

アイドルマスター シンデレラガールズ  
の王子様 星々

逆刃刀

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クラスで浮いた状態にあった榊和巳は、ある日一人の中年男性に出会う。

「君にシンデレラ達の王子様になってほしいんだけど、どうかな？」

予想だにしなかった発言に、榊は言葉の真意を掴めなかった。

偶然が折り重なりアイドル業界に挑戦することになった彼は、悪戦苦闘しながらもシンデレラ達の王子様を目指していく……。

※この作品には男性アイドルが登場します。それが苦手な方は別作品を、そうでない方はどうぞお楽しみください。

# 目次

一話	先輩との出会いは必然？おじさんとの出会いは偶然です	1
二話	頼りなあのは十七歳？	23
三話	若者に沈黙は厳禁です	46
四話	敵ですか？そういうのは身近にいるんですよ	62
五話	元モデルのあのはダジャレ好き？	94
六話	目つきが悪いのは自分も同じ？	113
七話	一週間ぶりの先輩はサインが苦手	129
八話	猫耳とロツカーはにわか？	152
九話	最後の刺客は中二病？	166
十話	気遣いほど心に刺さるものはないんですよ？	182
十一話	前日に夜更かしはいけません	199
十二話	練習はあくまで練習	206
十三話	魔王を倒しても平和は訪れないようです	214
十四話	一押しだから	228
十五話	変化は突然に	243



一話 先輩との出会いは必然？おじさんとの出会いは偶然です

春、それは別れの時期を乗り越えて新しい出会いを迎える季節だ。

暖かな陽気は別れで感じた寂しい心を和らげ、淡紅色のカーテンを広げる桜は新しい出会いに期待を膨らませてくれる。

しかし、いくらプラスイメージしかない春でも、万人に対してその効果があるわけではない。

街の中央に位置する一際大きな建物。複数の棟で構成され、運動場も備える場所の最上階で、春の陽気には似つかわしくない男子生徒がいる。

“1ー9”というプレートが掲げられた部屋の窓際の席で、他人からは不機嫌そうに、しかし本人としては至って平然と窓の景色を眺めていた。

自分の机に貼つてある“さかさ榊 かすみ和巳”の紙を見て、彼は極力小さくため息を漏らした。

……出だしから完全に転けてるよね。

高校の入学式から窓際の席で外の景色を眺めるなんてラノベの主人公じゃねえんだ

よ、と榊は内心で自分を非難する。

既に周囲では同じ出身校の人と話す子や、新しい友達を作ろうと積極的に話しかける子もいる。

榊はこの集団の中では後者でないといけなはずだ。地元から離れた高校を選んだため同じ中学校の生徒は校内に誰一人いない。だからこそ、入学式でなるべく多くのクラスメイトに話しかけて相手に好印象を与えなくてはならないのだが、榊はそれが失敗してしまったことを自覚していた。

仮にここで失敗しても、部活に入ればいくらでも挽回のチャンスはあるのだが、残念な事に部活に入る予定は今の所ない。

詰んでいる。テニスならマツチポイント、チェスならチェックメイト、将棋なら王手と言った状況と言えるだろう。

……高校生活三年間は、あまり楽しくないかもな。

入学式で早速高校生活諦めようとしていると、

「お前達、入学式が始まるから整列して体育館に行くぞー」

担任の先生が教室に入ってそう言うと、生徒達はそろそろと廊下に出ていく。

一学年が九クラスで成り立っているので榊達のクラスが最後になり、廊下に出ても他のクラスの生徒は見当たらない。

名前の順に並び身だしなみを整えた後、列は体育館に向かっていった。

体育館は別館にあるためわざわざ四階から一階まで下りなくてはならない。四階から三階に移り、二階へと下りようとした。そのときだ。

「す、すみません！ 道を開けて下さーい！」

不意の大声に、その場にいた全員が声のする方に疑問の視線を向けた。榊も例外ではなく、背後に顔を動かした。

だが榊だけは、周囲とは違う表情を浮かべた。

それは自分が想定していたものとは違うことが起きた場合に浮かぶもの——驚きだ。

「おっ……!?」

突然体に何かがぶつかってきた。状況的に考えて、ぶつかってきた何かは先ほどの声の主だというのは分かる。しかし今、それは些細な事だ。

……落ちる！

このままでは確実に階段を駆け落ちてしまう。自分一人だけなら流れに身を任せてもいいかなあ、と考えてしまうが、現在列で移動しているため階段にはたくさんの生徒がいる。

そもそもぶつかってきている人だっているのだ。入学式に生徒が階段から転落事故なんて事になったら、それこそ高校生活がおわってしまう。

だから榊は落ちないための行動をとった。まずは左手で階段の手すりにしがみつき、右足を二段下まで下げて体勢を整える。

そして空いている右手をぶつかってきた人の背中に回した。

右手から伝わるなめらかな髪の感触に、始めてぶつかってきた相手が女生徒であることを知った。

「ぬ、お……!」

前後の生徒が警戒して離れていくが幸いにも女生徒は軽く、榊でも充分に支える事が出来た。

「すみません。怪我はありませんか!」

相手が一步離れて榊の身を案じてくれる。

平均よりも若干高い背の女生徒。

手入れのいき届いているだろう長髪が特徴で、綺麗というよりも可愛いという印象を榊は持った。

三階から来たので相手は二年生という事だ。つまり先輩にあたるわけなので、榊は頭を横に振ったあとに慣れない敬語で、

「大丈夫です。先輩が軽かったんでなんとか落ちないですみましたので」

「本当にすみません。私慌てちゃ……あ!」



話の途中にも関わらず先輩が指差しで大声を上げた。

今度はなんだ、と人差し指の差す方を見ると、

「あ……」

左胸に飾っていた花が潰れている。先輩を受け止めた時にでも潰れてしまったのだろうか。

「ど、どうしましょう。せつかくのお花が……」

「いや、気にしないでくださいよ。たかが造花ですし」

「ですけど……」

確かに先輩の不注意で花が潰れたのは否定できない。

しかし、やはり紳士にとってはたかが造花なのだ。綺麗だろうが潰れていようが、入学式には何ら影響がないようにも思える。

それを一々気にする様子を見る限り、先輩の人間性が見えてくる。だが、

……周囲の視線が痛いんですよね！

無理もない。いきなり大声がしてそつちを見たら、先輩である女生徒を困らせてる新入生がいるのだ。

もし紳士が逆の立場なら同じように、こいつ何やってるんだ？ と冷めた視線を送るに違いない。

だから早くこの窮地から脱しなければいけないのだが、先輩はいくら紳が大丈夫と言つてもなかなか納得してくれない。

挙げ句の果てには、

「島村! 何やつてるんだ、入学式はもう始まるぞ」

「卯月! 早くしないと遅刻だよ!」

下の階から先生と友達だと思われる声が響いてくる。

まさかの催促で先輩の顔はさらに戸惑いの色を濃くし、今の状況を絵で表すなら、きつと目は渦巻き状になっているだろう。

「あの先輩、もう行った方がいいと思いますよ? 入学式が始まっちゃいますし」

「え? でもお花が……」

「これなら大丈夫ですよ。クラスに戻れば予備の花があるので、それと変えてきますので」

本当は予備なんてものはない。担任からは一つしかないから絶対なくしたりするなよ、と念押しされている代物だ。

しかしこうでも言わないと恐らく相手は納得してくれないだろう。

現に先輩は数秒迷つた後、ばつが悪そうに頭を下げて、

「ほ、本当にすみませんでした! あの、後でちゃんとお詫びしますから!」

そこまでしなくても、と思いつつ、ありがとうございます、と返してしまうのは些かおかしいだろうか。

階段を駆け足で下りていく先輩は、何故か途中で立ち止まってしまった。  
次は何事だ、と榊は自然と身構えてしまう。

「な、何ですか？」

「ええと、迷惑かけておいて言うのもあれなんですけど」

そこまで言うのと、先輩は榊の予想に反して笑顔をつくり、

「入学おめでとうございます！　これから頑張ってくださいね！」

完全に意表を突かれた笑顔と言葉に、榊はすぐに言葉を返すことが出来なかった。

再び階段を駆け下りていく先輩の後ろ姿を、榊は周囲の視線を気にせず見つめていた。

……ああいう笑顔が、俺にも出来たらなあ……。



入学式から早一週間が過ぎてしまった。

在校生との顔合わせ会や入学して早々の実力テストも終わり、ようやく新入生の学校生活にも落ち着きが見え始めてきた。

あと新生に残っている大きなイベントは、

……部活動の仮入部かあ。

教室の席で仮入部お知らせの紙を見ながら、榊は頭を悩ませていた。

榊の通う高校では部活動の仮入部は平日の三日間行われ、その間に行く部活は事前に紙で提出することになっている。

仮入部は月曜日から始まり、それまでに用紙を提出しなければならぬ。

榊はゆつくりとした動きでカレンダーと時計に目をやる。日付は金曜日、時は三時半を過ぎて放課後になっている。つまり提出期限を過ぎてしまっているのだ。

担任にはまだ迷っているのので後で職員室に提出しますと言ってあるが、用紙は依然として空白のままである。

入学当初から部活動に入るつもりはなかったのだから、空白のまま出してもいいような気もする。そうなるなら、おそらく担任からはどうして空白なんだ? ときいてくるに違いない。

そこで素直に部活動をやる気がないと言うと、文武両道が校風の一つでもあるため今度は口酸っぱく理由を聞いてくるだろう。

それはかなり面倒だ。単に部活をしたくないという理由では納得してくれないだろう。

しかし最初から入部する気がないので仮入部だけ行くのも、冷やかしのように感じてその部に申し訳なく感じる。

……でも仮入部も参加してないと、ますますクラスで浮いちゃうよな。

ただでさえ入学式にやらかしてしまっている。別のクラスでは入学式直前に先輩を泣かせたという、根も葉もない噂まで流れてる始末である。

さすがにクラスメイトは現場を見ているので噂を信じる人はいない。けれどこの一週間自分から話しかける事を一切しなかった榊に好印象を持つてる人が一人もいないのも事実だ。

……あんな事があつた後で、こっちから話しかけるのは難易度高いんだよ。

など言い訳してみるが、クラスで浮いたボツチである事に変わりない。

……高校では、不登校にならないように気をつけないと……。

最早高校生活に絶望さえ感じた。その時だ。

「ん？ あれは……」

窓から校門へ走る見知った人がいる。

絶賛ボツチ中の榊には、クラスメイト以外に知り合いは一人しかいない。

……島村、卯月先輩。急いでるけど、部活に入っていないのかな？

入学式にぶつかつてきたお人好しの先輩とは、あれ以来面と向かつて会っていない。

去り際に言っていた”お詫び”に期待していたわけではないが、あれから一週間も音沙汰ないと、それはそれで寂しかったりもする。

……そう言えば、高校でまともに話したの先輩だけじゃん……。

新入生にはあるまじき事実、榊は目眩を感じずにはいられなかった。

もう帰ろう、そう決心した榊は用紙を乱暴に鞆に詰め込み、足早に教室を後にした。



帰ってむせび泣くしかないと考えていた榊の視界に、妙に目立つ人物が写っていた。

猫背気味の中年男性。スーツを着ているが、小柄な体型と黒と白の混じった髪は、ビ

ジネスマンという感じがしない。

人当たりは良さそうなのだが、校門前で辺りを見回していると、どうしても不審者で

は? と疑念を持つ人も多いだらう。

だが榊は、不思議と相手に対して警戒心を感じなかった。

だから榊は迷わず中年男性に向かっていき、

「どなたか探しているんですか?」

中年男性は自分に話かられていると気づくと、その柔らかい笑顔を榊に合わせてくる。

「いや、校門前で待ち合わせをしていたんだけどなかなか来なくてね。二年生の島村卯月っていう女の子なんだけど知ってるかい？」

「！ 島村先輩なら、さつき走って出て行きましたけど」

「おやおや、彼女も急いでいて忘れてたのかな」

そう言うと、中年男性は困ったように頭を掻いた。

島村先輩と知人なのは間違いないだろうが、一体どんな関係なのか。

親子と言うには年が離れすぎているように感じる。だからと言って祖父と孫かと言われると年が近すぎる。

思わず品定めする目で見てみると、中年男性がはにかんでみせ、

「一応僕、怪しい者じゃないんですけどな」

「いえ！ 疑ってたわけじゃないんです。ただ、島村先輩との関係が気になったとか……っておかしいですよ。他人の自分が気にすることじゃないのに」

自分でも何を言ってるか理解不能になりかけている。それでも中年男性はまた笑顔に戻して、

「君、名前を聞いていいかな？」

「………榊、榊和巳です」

「そうかい。じゃあ榊君、時間があるなら少しお茶でもしないかい？ 僕も少し、君に興

味が湧いてきたよ」

どうして自分なんかに興味を? と疑問を持ったが、どうせ今日は帰ってもむせび泣く予定だったのだ。

それなら気晴らしに話を聞くのも良いかもしれない。榊は二つ返事で承諾した。



高校をあとにした二人は徒歩十分

程にある喫茶店に入った。

道中では大した会話もなく、中年男性からの質問に榊が淡々と答えるだけにとどまつた。

喫茶店で窓際に案内された二人は互いにアイスコーヒーを注文した。

コーヒーが飲めるなんて大人だね、と中年男性は言うが、今時の高校生ならブラックも平気で飲むやつだっているのだ。

……俺はブラック苦手だけどなあ。

渡されたグラスにミルクとシロップを注ぎ、ストローで中を混ぜていく。一口飲んでみて味の問題ないことを確認すると、タイミングを見計らったように中年男性は名刺を差し出してきた。



「一応これが、僕の身分かな」

「ええと、346プロダクション……部長……今西……」

「部長と言っても、僕は名ばかりの部長なだけだね」

こちらが思っていないのに自虐ネタを言われると、榊としては苦笑いするしかない。

だがその間にも、榊は名刺にある会社名から目を離さなかった。

346プロダクションはテレビに疎い榊でも知ってるほどの芸能プロダクションだ。

有名な女優や歌手が多数所属しているのは知っているが、もしかして彼女もその一員なのだろうか。

……あんまり女優とか歌手のイメージわからないけどなあ。

「346プロダクションの人っていうことは、島村先輩も……う」

「そうだね。でも彼女は、346の本業である女優や歌手じゃなくて、スタートしたばかりのアイドルなんだよ」

「アイドルですか……」

「まあ彼女は、ついこの間まで練習生で、最近あるプロジェクトに参加が決まったばかりなんだ。だからまだCDも出してないんだよ」

あるプロジェクト？ と榊が首を傾げると、今西はおもむろに鞆から一つのファイルを取り出した。

差し出されたそれは赤字で社内機密と書かれている。

そんなものを一般人である自分が気軽に読んでいいのかと、榊は疑問の視線を今西送るが、彼は大丈夫だよ、と頷いてくる。

部長が言うなら大丈夫だろうと、榊はファイルの表紙をめくった。

……シンデレラプロジェクト……。

ざっくりまとめて言うと、新人アイドル14人を一つのグループとしてプロデュースしていくものらしい。その内の一人に島村がいるわけだ。

「ああ、やつぱりそうか」

「やつぱりとは?」

「いえ、島村先輩は女優とか歌手よりも、アイドルの方が向いてるよなと思って」

「それはなんで?」

なんか尋問されてね?　と思うが、別に答えを渋る理由もない。だから深くは考えず思ったままの感想を言う。

「俺も一度しか会ったことがないんで上手く言えないんですけど、島村先輩は結構天然みたいなところがあって、女優や歌手みたいじゃない気がする」

「でもアイドルには向いてると?」

はい、と返した榊はこれから言おうとする言葉に一瞬ためらった。

自分でも恥ずかしいことを言う自覚がある。何より相手からしたら素人が偉そうに言うな、と思うかもしれない。

そう考えると言葉が喉で詰まってしまう。しかし、

「——大丈夫だよ」

まるで榎の心を読んだかのように今西が言葉をかけてくれる。

先程から一切変わらない物腰の柔らかい笑みに後押しされ、榎は照れくさそうに口を開く。

「島村先輩の笑顔は、みんなに幸せを与えてくれる感じがするんですよ。それも、誰にでも平等に。多分そういう魅力みたいのはちよつと固いイメージのある女優や歌手よりも、アイドルの方が活かせるんじゃないかと思ってみたりみなかったり……」

後押しされたにも関わらず、語尾の方ではだいぶ力が弱くなってしまった。

それでも今西の耳にはちゃんと届いていたようで、彼は満足そうに何度も頷く。

「榎君は人を見る目があるんだね。ぜひプロデューサーとして346に欲しいぐらいだよ」

「気持ち嬉しいですけど、俺まだ15ですよ?」

「そうだったね。……じゃあ、ちゃんと現実味のある話をしようか」

そう言うと、今西は飲みかけのコーヒーをわざわざ横にどかした。

真面目な話だ。雰囲気ですう感じた榊も思わず背筋が伸びてしまう。

現実味ある話が何なのか。榊には想像も出来ないことに、期待と不安が入り混じるのを鳥肌として表面化している。

そして今西が口を開けて発した言葉は、

「君も、島村君と同じアイドルになってみないかい?」

「……?」

一瞬。いや、一秒でも十秒経つても榊の今西の発言を理解出来なかつた。

それをどう捉えたのか、今西は榊の持つファイルを指差して、

「もう少し砕いて言うかね。君にシンデレラ達の王子様になってもらいたいんだけど、  
どうかかな?」

未だ機能を取り戻さない頭で、榊は窓の方を見た。

日の光を浴びて、窓は榊の姿をぼんやりと映し出す。

榊は自分の容姿に自信がある方ではない。思考停止中のため無表情のせいもあるだろうが、世間で言うイケメンの部類に入るとは到底思えない。

髪だって普通の高校生らしく黒の短髪だ。

良くて中の中、自惚れても中の上が榊の自己判断だ。

試しに笑顔を作ってみるが、一目で作り笑顔だと分かる。

その証拠に、窓の外にいた大学生ぐらいの女性は、まるで苦虫を潰した顔で足早に去ってしまったのだ。

榊としては自分に向けてやったつもりが、女性からしたら自分に向けられたものだと思っただろう。

恥ずかしさが体を駆け巡り冷や汗となつて排出される。

だがそのおかけで榊の思考は一気に現実引き戻された。

……アイドル？ 俺が？

今西の言つてゐることは理解出来たが、その意図が未だに理解出来ない。

あつけらかんと名刺と手元のファイルを交互に見ていると、今西はコーヒーに手を伸ばして、

「もちろん、今すぐにアイドルになれるわけじゃない。今度シンデレラ達の王子様を決めるオーディションがあるんだけど、ぜひ榊君に参加してみてほしいんだよ」

「ほしいと言われましても、そもそも346プロダクションですからアイドルはたくさんいるイメージはありますけど、男性アイドルなんているんですか？」

「ううん。346も男性アイドルを採用するのはこれが始めてだね。まだ試験的な部分が多かったりするのが現状だよ」

「そうですか。それにしてもオーディションですか……。ちなみに今度つていつなんで

すか?」

「ん? 明後日の日曜日だよ」

「明後日……!?!」

あまりにも急すぎる展開に、榊は目を丸くする。何をどう考えればそんな直前にスクウトなんてしてくるのか。

「オーディションって言われても、それって事前に書類審査があつたんですよね? それなのにいきなり参加したら駄目じゃないですか」

「大丈夫大丈夫。僕の方で特別枠として参加させるから」

……大丈夫じゃないし、それは職権乱用だろ!

そもそも書類審査を通るのだからって簡単ではないのだ。テレビで得た情報だと、女子だと書類審査だけで倍率は十倍を軽く超え、有名なオーディション企画だと時には百倍や千倍にだってなるときもあるのだ。

今回は男性アイドルなので多少倍率は低くとも、346プロダクションのオーディションなら応募数もかなりの数に違いない。

それなのにたまたま部長という上の人の目に留まったからって、書類提出すらしていない自分が飛び入り参加するのはやはり気が引ける。

「別に今ここで決めなくていいよ。榊君が少しでも興味を持つてくれたなら、今日はも

う充分だから」

榊が真剣な顔つきで黙っていたのを今西は脈ありと考えたようだ。

どうしたらそうポジティブシンキングに生きていけるのか。もしコツがあるのなら是非とも教えてほしいものである。

だが今日は興味を持ってもらえただけでいいとはどういう事だろう。明後日がオーディションなら、普通は今日にでも決断してもらわないといけないのではないか。

しかしそこで、今西は腕時計に目をやると、

「おやおや、もうこんな時間かい。僕から誘っておいて申し訳ないけど、もう行かなくちやいけないんだ」

「あ、今日は素敵なお話をありがとうございます」

今西が腰を上げるのを見て、榊も慌てて立ち上がり頭を下げた。

それに対し、いいんだよ、と今西は笑い返してくれる。

「そうだ榊君。明日の土曜日は何か予定があるかな?」

「明日ですか? 特に今の所はありませんが」

今の所と見栄を張ってみたが、間違いなく明日の予定は空白だ。

そもそも、クラスで浮いてて帰ったら泣こうと思つてた人間に、週末の予定があるはずもない。

一人で街に買い物へ行くのは可能だが、それは暇だからすることであって、結局は予定がないことにかわりはないのだ。

……あれ? ただ明日の予定を聞かれただけなのに、なんで俺の心はこんなにも傷ついていたんだ?

それはきつと日頃の……、いや、きつと入学式の行いのせいなのだろうと榊は自嘲の笑みを浮かべた。

そんな榊の事情を知るはずもない今西は、彼の予定が空いてると聞いて嬉しそうに笑う。なら、と前置きして、

「明日 346の会社に来てくれないかな? アイドルが日頃何をしてるか見せてあげるよ。その方が、君も決断しやすいでしょ?」

「それは嬉しいお誘いですけど、いいんですか? もしかしたらアイドルの現実を見て嫌になるかもしれないですよ」

「それならそれでいいじゃないか。とりあえずオーディション受けてやっぱ無理でしたって言うよりは、事前に知って、その上でやめておきますと言ってくれた方が僕としては助かるよ」

何故かオーディションに受かるのを前提に話が進んでいるようにも感じるが、こんな話は普段生きてる中で滅多にないだろう。



……だったら見てみるのも、悪くないかな。  
何より学校での話のネタになる。

そう思考を完結させた榊は、再度今西に頭を下げた。

「それなら、明日はお願いします」

「そうと決まれば、明日は九時には来てほしい。受付で僕の名前を言えば分かるようにしておくから」

それだけ言うと、じゃあまた明日、と言って今西は席を立った。

店の外に出るのを見送ったあと、榊はゆっくりと腰を下ろした。

……俺なんかアイドルかあ……。

学校を出るまでは想像すら出来なかった展開に、榊は夢見心地で視線を落とした。

本音を言うと、あまりアイドルに興味はない。テレビなどでアイドルの姿を見ても、可愛いとかかっこいいと思ったことはないはずだ。

それに仮にオーディションに受かって、自分が本当のアイドルになったところで売れる自信も全くない。それなのに、

……俺は一体、何を期待してるんだ？

アイドルになったからってお金持ちになれるわけでも、クラスでのポッチが解消されるわけでもない。それでも榊は何かを期待している。

それが何なのかはよく分からない。まるでシャボン玉のように、頭に浮かんでは消えていつてしまうのだ。

……だから明日は、それを確認するんだよな。

アイドルが何をしてるかよりも、今胸に抱いてるこの何かをはつきりさせたい。そう決意した榊は視線を上げる。

「あ……」

すると手には社内機密と書かれたファイルがある。すつかり返すのを忘れていた。それに、

「この支払いって、俺持ちかよ」

テーブルの上に置かれたままの伝票を見て、榊は思わず苦笑いをする。やはり明日は、346プロダクションに行かなくてはいけないようだ。

## 二話 頼りなあの人は十七歳？

土曜日だと言うのに依然としてサラリーマンが行き交う道を、榊は流れに沿うように歩いてた。

昨日今西に指定された346プロダクションの本社ビルに向けて、スマートフォンナビを頼りに歩を進める。

服装をどうするか悩んだが、見学と聞いているので学生の正装である制服にしてある。

『間もなく目的地に到着します。案内を終了します』

ナビのガイドは当然ながら正確で、予定時刻の十分前には目的地に着くことが出来た。

「やっぱり天下の346プロダクション。会社の方もご立派ですなあ」

346プロダクションの本社ビルは正にお城そのものだった。調べてみたらこの本社ビルは映画やCDのPVにも使用されることが度々あるらしい。

明らかに場違いだな、と思いつながらも榊は自動ドアを通っていく。

ちなみに、榊が346プロダクションと思っていたのは実際には美城プロダクション

と書くそうだ。

渡された名刺にも346と書かれていたので間違いでないのだろうが、覚えておいて損もないだろう。

中に入り受付に行くと、二人の受付嬢が出迎えてくれた。

「おはようございます」

「あ、お、おはよう、ございます……」

受付嬢らしく凛とした挨拶に、榊は思わずたじろいでしまう。

今西は受付に名前を言えば分かるようにしておくと言っていたが本当に大丈夫なのだろうか。高校生である榊にはこういった場所に来た経験がなく、名前を言えば分かると言われてもどう言うべきなのか。

「あの、榊、和巳なんですけど……」

「はい、榊様。本日はどういったご用件でしょうか?」

流石は大手会社の受付嬢。こちらが挙動不振な事をしても表情一つ変えず対応してくれる。

機械的と言えば失礼にあたるが、その方が榊としても気持ち楽だ。

彼は背負っていたリュックの中から名刺を取り出して、

「すみません、今西部長に用がございまして、受付に言えば分かるか聞いてるのですが」

「そうでしたか。少々お待ち下さい」

そう言うと、受付嬢は内線の受話器に手を伸ばした。

「こちら受付ですが、……はい、只今榊様がお見えに。……はい、かしこまりました」

受話器を戻した受付嬢は榊に一礼してから、

「お待ちせしました。今西がすぐこちらに参りますので、あちらにお掛けになってお待ち下さい」

どうやらちゃんと話は通っていたようだ。

榊は受付嬢にお礼を言うと、言われた通り近くにあったソファーに腰掛けた。

建物内を見渡すと、それだけでテレビで見た事がある人が何人もいる。だがその誰もが女性であり、男性は大抵マネジャーか各業界の関係者だ。

……例えば数パーセントでも、この関係者になるかもしれないんだよな。

なんだか場違いな気がして榊はそわそわしてしまう。すると、

「やあ榊君、待たせたね」

声のする方を見れば、いつの間にか今西が側まで来ていた。

榊はすぐに立ち上がり、

「あ、おはようございます。今日はよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく。じゃあ早速で悪いんだけど、今日の打ち合わせと書いてほしい

のがあるから、近くのカフェに行こうか」

打ち合わせと言われると、何故かそれだけで心が躍るような感覚を得る。

榊は期待に胸を膨らませて今西の後を追った。



「……………」

カフェについて榊が最初に見せたのは戸惑いだった。

榊達が着いたカフェは会社内にある建物だ。昨日来た場所よりはモダンな雰囲気が強く、内装も割と落ち着いた造りだ。

カフェには全く問題ない。なら、何故榊が困惑した表情を浮かべているかというところ、「おかえりなさいませ、ご主人様。キャハッ!」

カフェの雰囲気にはあまりにもミスマツチしたメイドが眼前にいるからだ。

店内には他にも女性従業員がいるが、その人達の場合はカフェの雰囲気に合わせたウエイトレスのイメージを持たせる服装ばかりだ。

だがこの人だけは違う。服装に黒と白を基調としているところまでは同じなのだが、この人のはやたらフリフリしている。ポニーテールを大きめのリボンで結っているせいもあってかメイドらしさが強調されている。

こんなのが許されるのは榊の浅はかな知識では秋葉原のみで、この場では異彩を放つてると言っても過言ではないはずだ。

いきなりの未知との遭遇に榊は目を丸めるが、今西は全く気にした様子を見せず、

「やあ菜々君、今日も元気そうだね」

「あー、部長さんでしたか。はい、歌って踊れる声優アイドルとして、安部菜々は今日も頑張ってます！」

そう言つて菜々は目の横でピースサインをつくる。

……それはさすがに痛くないだろうか……。

今西が随分落ち着いていたので、こういうのが好きなのだろうかと一瞬間によぎったが、どうやら彼女も346所属のアイドルのようだ。

とりあえず二人は昨日と同じアイスコーヒーを注文する。菜々がまたピースサインをつくつて去るのを見送つてから、榊は思い出したようにリュックからファイルを取り出す。

「あの、これ忘れてましたよ」

それを見た今西は驚いた表情を見せた後、恥ずかしそうに頭を掻いてファイルを受け取った。

「いやあ、本当に助かったよ。無くしたつて上に知られたら、僕部長でいられなかった

よ」

「だったらこういうのは、あまり他人に見せない方がいいですよ」

気をつけるよ、と苦笑して今西はファイルを鞆にしまった。

そこで終わるかと思いきや、そのまま別の紙を取り出して、

「それじゃあ、僕から代わりにこれをおあげるよ」

渡された紙を受け取って、表裏を見渡してみる。

紙には名前や生年月日等、様々な項目があり、

「これってもしかして……」

「あー！ 面接カードじゃないですか！」

ちやうどアイスコーヒーを運んできた菜々が榊の持つている紙を見て大声をあげる。

榊の何かを訴える視線など一切気にせず、彼女は素早くグラスを置いて今西に対し、

「部長さん！ この子 346うのオーディションちを受けますか!」

「受けるかどうかを、今日色々見学して決めてもらうんだよ」

「そうだったんですか。——あれ？ でも346に男性アイドルなんていましたっけ？」

ナナのウサミンメモリーにはそんなの存在しないのですが」

ウサミンメモリー？ と聞き慣れない単語に、榊は意味は分からずとも納得する。

……この人、外見だけじゃなくて中身もこういう人か……。



アイドルになるのにこれだけの個性が必要なら、中々自分には厳しそうだ。そんなことを思うと、今西がアイスコーヒーを口に含んでから、

「男の子は初めて採用するんだ。でもこれ、まだ秘密案件だからよろしくね」

「わかりました！ それならウサミン星から来たこの安部菜々が、面接カードの書き方をレクチャーしてあげます。ええと……」

「ん？ あ、榊和巳です」

「それなら榊君！ 先ずはペンを持ってください！ ナナにかかれば面接カードで好印象持ってもらえること間違いなしですよ！」

「それはいいね。僕は立場上アドバイスできないから」

何故受ける前提なのか、疑問に思うがこういったものに経験がない榊には経験者のアドバイスは心強い。

「それはすごく有難いんですけど、安部さんまだ工作中じゃないですか」

「まだ開店したばかりなので少しなら大丈夫ですよ。それに、安部なんてよそよそしい呼び方は止めてウサミンと呼んでも平気ですから！ キャハッ！」

……ああ、それはちよつと無理ですわ。

何かが許さない。おそろくちよつぽけなプライドか何かだと思うが、それぐらいは大事にしておきたい。

とりあえず後半部分は無視して、前半部分で言われた通りペンを持つ。

最初は名前や生年月日などでスラスラ書ける。生年月日のところで椅子に座った菜々が、

「わあ、榊君ってまだ十五歳なんですか」

「まだって、菜々さんは何歳なんですか?」

「な、ナナはピチピチの十七歳ですよ」

「……………」

「十七歳ですよ!」

「……菜々さん、制服の下はどうしてます?」

「ミニスカにルーズソックスに決まってるじゃないですか。ナウいでしょ!」

「……なんか、本当にすみません」

「どうして謝るんですか!」

「どうやらこの事については深く言及してはいけないようだ。」

「……誰にだって秘密の一つや二つはあるよな。」

「だから気にせずペンを進めた。」

最初の方は基本情報と呼べるものなので問題なかった。しかしそれが終わり、次の質問形式のところ榊の手が止まった。

「ん？ 何か分からないところでもありましたか？」

「いや、分からないというか、志望理由なんですが……」

「それなら深く考えないで、ありのままを書けばいいんですよ。あまりよく書こうとすると、返って不自然になってしまいますからね」

菜々の言ってる事は最ものことだ。しかしそれだと、スカウトされたからになってしまふ。

それだと、お前オーディション受けに来たんだろ？ と面接官に突っ込まれること間違いはない。

……昔からアイドルに憧れてたからが無難だけど、それだと色々聞かれたら言葉に詰まっちゃうだろうしなあ。

どう書こうか悩んでいると、それまで黙ってた今西が、

「僕がスカウトしたからって書くのと色々面倒だろうし、今は空白のままでもいいよ。今日は見学してる中でそこも考えてみてよ」

そう言ってくれるとこちらとしては助かる。

「菜々さん、特技とかあってどういうのがいいと思います？」

「そうですねえ。女の子なら料理とか裁縫とか、中には楽器演奏とかもありますけど。

男の子なら無難に何かスポーツを押せばいいじゃないですか？ ちなみに榊君は運動

神経の方は？」

「一応スポーツテストでは上の方でした」

「ならここはスポーツとだけ書いておくのがいいですね。そうすればきつとオーデイションの時に何のスポーツが得意ですか？ って聞かれるはずですから」

菜々のアドバイスは榊が思っていた以上に的確で、結果としてほとんどの項目で菜々の助けるをもらう形となってしまうた。

悪戦苦闘しながら三十分程で書き終わった後は、菜々に読んでもらって細かい箇所を添削する。

それを再び菜々に読んでもらって、面接カードの記入は終了した。

「うん。志望理由は空白のままですけど、これならナナ的には合格だと思えますよ」  
菜々から返された面接カードを榊自身も見返してみる。

各項目には文字がびっしり書かれている。とても榊一人ではここまでは書けなかったはずだ。

面接カードだけあって、項目には自分の長所や自分のアピールポイントを体験談を交えて書くところがある。日本人の性質として、あまり自分の長所を書くのが苦手だったりするのだが、

……菜々さんが上手く引き出してくれたから思ったより楽だったな。

榊が他人との輪に入るのが苦手と言うと、

『それはきつと、あえてみんなと距離を置いて冷静に物事を見れてるって事ですよ。リーダーには欠かせないポイントです』

また、何かをすると周りが見えず空気が読めない人間と呼ばれると言うと、

『それはあれです。一つの事に対しての集中力が高いんですよ。ナナは正直羨ましいぐらいです』

と言うように、榊が思う短所を菜々はことごとく長所に変えてくれる。

榊一人ならこれだけで半日潰れても不思議ではなく、菜々の存在は本当に有り難かった。

書きあがったものを今西に渡すと、彼は一度流し見するだけで鞆に仕舞ってしまふ。

どうやら特に問題はないようだ。だから榊は菜々に向き直すと頭を下げて、

「菜々さん、今日はありがとうございました。おかけで面接カードもまともなレベルになれました」

率直なお礼を述べると、菜々は目が回るのではないかと思うほど首を振る。

「何言ってるんですか。あれは榊君にそれ程の魅力があつたからですよ」

「百万歩譲つてそうだったとしても、それを引き出してくれたのは紛れもなく菜々さんです。菜々さんって意外と出来る人ですね。伊達に長くは生きてません」

「意外ってなんですか！ それに、ナナと榊君は二歳しか違いませんか!？」

……菜々さんもブレないなあ……。

それだけプロ意識が高いのだろう。

自分がもしこの業界に入る事になったら、きっと彼女を先輩として敬うに違いない。どういう意味でかは聞かないでほしいが。

「おや、もう十時前ですか。すみませんが、惜しまれつつもナナはお仕事の方に戻らせてもらいますね」

「あ、待つてください菜々さん」

立ち上がった菜々に対し榊は腰を上げて、

「最後に、一つだけいいですか？」

「何ですか？ あ！もしかしてナナのサインが欲しいんですか!？ お気持ちは嬉しいんですが、それは仕事が終わった後にお願ひします」

「いや、そんなのはどうでもいいんです」

「ナナのサインがそんなもの!？」

おつといけない。思わず本音が出てしまった。

普通の人ならアイドルのサインなら喜ぶべきところなのだろうが、榊はやはりまだアイドルにそこまでの興味を持つ事が出来てない。

気付けば菜々がカフェの隅の方で一人うずくまっていた。

「そうですね……。ナナのサインなんて”そんなの”ですよ。いい年してウサミンとか言ってるアイドルのサインなんか……。どうせなら川島さんとかの方がいいに決まっていますから……。ナナなんか、菜々なんて……」

いけない。あれだけウサミンキャラを押し通せる精神力があるのに、妙なところで打たれ弱い。

「ああ菜々さん？　もちろんサインは欲しいですよ。でもこれから見学もあるので、終わった後をお願いしようと思つてたんですが……」

「……本当ですか？　ナナなんかのサインでも大丈夫ですか？」

「大丈夫なにも、菜々さんのサインが欲しいんですよ」

なぜ年上相手に気を使わなくちゃいけないのかとは思ふ。しかし菜々に助けられたのは事実なわけで、

……これで五分。いや、そもそも俺が発言を間違わなければこうならなかったのか。ならば五分ではなく菜々にはまだ貸しがある状態である。

……いつかお返ししなくちゃな。

そんな事を思い、榊は微笑する。

「だからとりあえず、今出来るお願いがあるんですけどいいですか？」

「今出来るお願いですか？ 何かは分かりませんが、ナナは構いませんよ」

立ち上がる菜々に手を貸して、よかった、と榎は安堵する。

そして口から出るのは一つの疑問。それは、菜々がアイドルだと知ってからずっと抱いていた疑問だ。

「——菜々さんは、どうしてアイドルになったんですか？」

「ナナがアイドルになった理由ですか？ 言っておきますけど、榎君の志望理由の参考にはならないと思いますよ？」

「もちろんそれは分かっています。男女だと違いがあるのは百も承知です」

でも、と榎は前置きして、

「よく分からないんです。一応事前の下調べはしていますけど、まだ全然アイドルがどういったものなのか理解しきれてないんですよね。」

だから、って言うとか変かもしれないんですが、今日部長さんに色々見せてもらって、もしアイドルの方にお話する機会があるなら聞いてみようと思つてたんです」

「それが、アイドルを指した理由？」

「はい。スポーツ選手とか公務員とかなら、志望理由って結構限られるしある程度は想像も出来ると思うんですよ。だけど、アイドルってそれこそ十人十色でなりたい理由や、実際になった経緯も変わって来ると考えてます」



最後の言葉を、榊は照れくさそうに頬を掻きながら言う。

「だからそれを知れば、今はぼんやりとしか見えないアイドルも、少しは色があつきりす  
ると思ってるんです」

言い終えた榊は、菜々が啞然とした顔でこちらを視てるのに気付いた。

考えてみれば、かなり恥ずかしい事を言っていたかもしれない。

……なんだよ色があつきりするとか、まるで中二発言じゃん。

ウサミンとかキャハつと言ってるよりは幾分かはマシだと思う。だがもし、その張本人である菜々から“痛い”など言われたら、立ち直れずそのまま帰宅する自信がある。

しかし、榊の予想に反して、菜々は顔の向きを今西に合わせると、

「部長さん、榊君は良い子ですね」

「そう思うでしょ。僕も改めてそう実感したよ」

なぜか褒められてしまった。

褒められるのは素直に嬉しいが、どうして褒められたのかわからないと嬉しさも半減してしまふ。

……アイドルを知ろうとしてるから？ でも、知らないものを知ろうとするのは当たり前だよな。

当然、インターネットを使えば情報はいくらでも入ってくる。その中にはアイドルに

なりたかった理由や経緯も書かれているが、

……やっぱり生の声は違うはずだよな。

紙という媒体を通して見るのと、相手の表情や声のトーンを通して聞くのとは、訴えかけてくる質が違うと榊は考えている。そして今、それを聞くことが出来る数少ないチャンスなのだ。

最近の子はそこまでしないのだろうか。恐るべしゆとり世代……あ、自分もゆとり世代の一人でした。

などと一人突っ込みをしていると、菜々が咳払いを一度して、

「ナナの場合はありがちなんですけど、小さい頃から憧れていたんですよ」

「確かに、小さい頃から憧れるのは一番多い理由かも——」

「——魔法少女に」

……魔法少女のどこがありがちなんですかねえ。

だけどあれだ。男の子だって小さい頃は戦隊ヒーローなどに憧れるものだから、女の子が魔法少女に憧れるのは別に変わったことではないはずだ。

「ええと、魔法少女に憧れると言ってますが、そこからどう心境が変化したんですか?」

「?」 ナナの気持ちはずつと変わりませんか? ずつと魔法少女に憧れていたナナは、高校生でついに魔法少女になる事を決意したんです!」

……さすがにそれは変わってるだろ。

榊の身近には、高校生にもなって戦隊ヒーローになりたいと言ってる人間はいない。いや、そもそも高校でボツちな自分にそんなのを話す人がいるはずもないのだ。

自分で傷口に塩を揉み込むような気持ちになる。急降下しそうになるモチベーションをなんとか持ち直し、榊はゆっくり言葉をつくる。

「菜々さんは、高校生になってもいつか魔法が使えるようになるとか本気で考えてたんですか？」

「え？　ち、違いますよ！　ナナが言う魔法少女っていうのは、そんな直接的なものじゃなくてもっと間接的な魔法少女です！」

「魔法少女に直接も間接もないと思いますけど……」

若干引き気味に言うのと、菜々は頭を掻きむしって、

「ああもう！　ナナが言ってるのは、声優としての魔法少女ですよ！」

「ああ。そういうえば、最初に声優アイドルって言ってましたね。でもそれなら、アイドルじゃなくて普通の声優でよかったんじゃないですか？　アイドルも兼任だと、声優の仕事もあまり出来ないじゃないですか」

榊にとっては何気ない発言のつもりだった。

しかしそれを聞いた菜々の目の焦点が段々と合わなくなっていく。

「それぐらいナナだつて分かつてます。でも、何事も上手くいかないのが世の中なんですよ」

あかんこれ、完全に地雷踏んだパターンだ。

菜々だつて声優一本の方が、自分のやりたい事を出来るのは理解しているはずだ。それが現在声優アイドルをしているというのは、結果的に声優にはなれなかったのだ。

……高校生から目指してゐるって事はもう何年も……あ、まだ十七歳だから長くても二年ですぬ。

ふざけている場合ではない。自分は菜々のトラウマを えぐ 抉つたと言われても間違いないのだ。

……こんなんだから、クラスでも浮いちやうんだよ。

藁にもすがる思いで榊は今西に視線を送る。しかし彼は、普段と変わらない笑みを見せるだけで助けてくれる様子はない。

……しかもなんで嬉しそうなんですかねえ。俺の困った顔がそんなに楽しいですか？

講義の視線を今西に送ろうとした。すると、

「でも、でもですぬ!」

不意打ちとも言える菜々の大声に、榊は反射的に意識を菜々に戻した。

彼女は、周囲の注目など一切気にせず、

「ナナはアイドルになつて良かった思つてますよ！ 確かに、声の仕事はなかなか貰えませんし、貰えても一回限りのいわゆる所謂モブキャラばかりです」

だけど、と菜々は胸に手を当てる。

その仕草は何かを思い出ししてるようで、

「ナナがあのままは声優を目指していたら、多分モブキャラの仕事やCDデビューも出来なかつたと思うんです。アイドルのナナだからこそ、今は魔法少女の仕事もくるって信じられるんです」

「アイドルと言うよりは、ウサミン星人だからですよね」

もう！ と赤面して言うが、強く言わないという事は少なからず自覚しているのだらう。

「とにかく、とにかくですよ！ ナナが言いたいのはです！ 榊君がもしアイドルになるのを悩んでるなら、とりあえずなつてみるべきです。アイドルにならないと普段出来ない事だつてたくさんあります。それにきつと、榊君の心を熱くする何かがあるはずですよ！」

明らかにウサミン星人とはキャラが違う熱血発言に、榊も思わず後ずさりしそうになる。

だがそれはしていけなき事だ。こちらの質問に対しての答えとしては主旨がずれているが、相手が真剣に答えてくれていたものには違いないのだ。

「安部！ いつまで休憩しているつもりだ。早く仕事に戻りなさい！」

厨房の方から店長と思われる声が聞こえてくる。

「すぐ行きます！」と返す菜々々を見て、榊は二度目となるお辞儀をして、

「さつきも言いましたけど、今日はありがとうございました。本当に助かりましたし、すぐく参考になりました」

「いえ、ナナもアイドル関係で他の人に教えたのは初めてだったので楽しかったですよ。それに、最後の質問だって、榊君の求めていた答えとは違っていたでしょうし」

「そんな事ないですよ。確かに質問の主旨とはちよつと違った答えだったですけど、アイドルは菜々々さんを必死にさせるものだというのが分かっただけでも十分な収穫ですから」

「うう、榊君は本当に良い子ですね。ぜひアイドルになってくださいね。その時にはナナはいくらでもアドバイスしますから！」

そう言つて、今度こそ菜々々は仕事に戻った。

「それじゃあ、面接カードも書き終わつたし、僕達もそろそろ行くこうか」

「え？ 打ち合わせはしないんですか？」

「うん。あまり時間もないからね。それは車の中でしょう」  
「すみません。俺が余計な事書いてたせいで」

思つたより早く面接カードが書き終わつたから調子に乗つてしまった。

……最初に時間を確認しておくべきだったな。

そうすれば菜々に質問などせず打ち合わせ出来たはずだ。

しかし今西は、とんでもない、と言つて、

「君が菜々君にあの質問をしたのは、少しでもアイドルに興味を持つてくれたからでしょ。それなら、スカウトした僕としては嬉しい事だよ。打ち合わせと言つても今日の予定を伝えるだけだから、それは車の中でも十分さ」

「そう、ですか……。そう言つてもらえると助かりますが」

「何かに興味を持つて、それをちやんと行動に移すのは決して悪い事じゃない。今日は何人も何人かのアイドルに合うと思うけど、菜々君にした質問は気にせずした方がいいよ。346の子は皆優しいから、きつと答えてくれるさ」

はあ、と榊は空返事にも似た反応を見せる。

正直菜々に聞けたからつて、他のアイドルにも聞けるわけではないと思つてる。

……菜々さんには不思議と親近感があつたからなあ。

それが他の人にも湧いてくるかと言つと、榊としては「無理」と返答する。あれは

菜々の人当たりの良さがあってこそであり、その菜々相手でさえ質問した時は緊張していたのだ。

菜々には他のアイドルと話す機会があれば聞いてみようと言ってはみたものの、実際に目の前にいたら上手く話せる自信はない。

……でも、知ろうとするのは悪い事じゃないんだもんな。

菜々はその事で良い子だと言ってくれた。今西も菜々の言葉に同意してくれた。それなら別に臆する事はない。

……スリーサイズとか、そういう変なのを聞いているわけじゃないからな。

最後は開き直りにも近い思考を持って榊は頷いた。

カフエを出る直前、厨房へ向かう菜々と目が合った。

彼女は口パクで“頑張って”と手を振ってくれる。

女子から手を振られるという榊には縁のなかつた出来事に、戸惑いながらも手を振り返す。

自分でも照れてる自覚があるのだ。当然菜々もそれを察し、くすりと笑って厨房に消えた。

「榊君も、まだまだだねえ」

今西の言葉に反論出来ず、榊の顔色は照れくささから恥ずかしさに変わっていった。





## 三話 若者に沈黙は厳禁です

「最初はラジオですか？」

車の助手席で、榊は今西にそう問い掛けた。

カフェを後にした二人はそのままの足で駐車場に向かった。今西が運転席、榊が助手席に座り出発しようとした時に、今西から一枚の紙を渡された。

右手で受け取った紙を一通り見て、榊は先程の問い掛けたをしたのだ。

そこには今日の予定が簡単に記されており、最初の項目には『ラジオの収録見学』とあった。

車を走らせ警備員に挨拶した後、今西は一瞬だけ榊に視線をやって、

「そうだよ。ちょうど、346のアイドルがやってるレギュラー番組の収録があつてね。と言つても、榊君は現代っ子だからラジオは聞かないかな？」

「そんな事ないですよ。家だとテレビのチャンネル争いが絶えないんで、普段はテレビよりラジオを聞いている事の方が多いです」

「おや、榊君は意外とアナログ派だったか。なら、“ゆるふわタイム”っていうラジオ番組は知ってるかな？」

その番組名なら榊にも聞き覚えがあった。

高森藍子というアイドルがパーソナリティーを務めてるのは知っている。しかし、榊はこのゆるふわタイムを一度くらいしか聞いたことがない。

……あまり俺には合わなかったんだよな。

上手く言葉に出来ないが、高森藍子の話し方はすぐくゆったりとしていて、聞いていてまだ十分くらいかと思っていたらいつの間にか終了時間になっていたのだ。

まさにゆるふわタイムなのだが、榊はそれがあまり好きじゃなかった。

だがそれを素直に口に出すことなど到底出来ず、榊は言葉を選ぶように窓からの景色を眺めて、

「一度だけ聞いたことあります。高森さんの人柄が出てる良い番組だと思いますよ」

「それは嬉しいね。でも、一度しか聞いてないって事は、榊君には合わなかったのかな」「うっ……」

精一杯言葉を濁したつもりなのに、たった一言の失言で勘づかれてしまった。

やはり経験の差なのだろうか。子供の言い訳など、大人にはすぐ分かるということだ。

「すみません。良い番組なのは本当なんですけど、俺にはちよつと合わなかったです」

「そんなに気にしないで、どんなに良い番組でも、本当の意味で万人受けするものなんて

ないんだから」

それだけ言うと、今西は運転に集中してしまう。

車内にはすぐに沈黙が落ちてきた。榊から話を振れば、今西は返してくれるに違いない。

しかし、今の彼に積極的に話を振る勇気がない。

……悪気がないとはいえ、346の番組を批判しちやたからな。

今西は気にしないでと言ってくれた。それが本心であるのは榊でもなんとなく分かる。

だからと言ってこちらから呑気に話を振ったら、まるで自分の発言の意味も理解出来ない子供のように感じる。

……そう考えてる時点で、やっぱり子供なんだろうなあ。

ラジオ局まで後どのくらいか知らないが、この無言状態が続くならそれは最早拷問だと思つた。——その時だ。

「ラジオ局までまだ時間かかるけど、榊君はこのままがいいかい？」

「えっ……」

救済とも言える発言に、しかし榊は体に熱が溜まるのを感じていた。

おそらく今西は分かっているのだろう。こちらが黙っている理由も、この状況を榊が

好んでいないのもだ。

全てを見透かされてる。その事実が榊の羞恥心を激しく刺激してくる。

榊はすぐに返答しない。しかしそれが長続きしないのを今西だけでなく榊自身も自覚している。

「……話を振ってくださいると、大変ありがたいです」

最後は根負けした榊が赤面して言う、そうだなあ、と今西は始めて、

「榊君は、どうして僕が君にアイドルになつてみないかと言ったのか、理解しているかい？」

「俺をスカウトした理由ですか……、そういえばまだ聞いてなかったですね」

展開があまりにもハイスピードで進んでいたのもあつてすっかり忘れていた。

最初にアイドルにならないかと誘われた時は、自分の顔はアイドルではないという自己判断こそしたものの、まだ今西の口からは直接の評価をもらっていなかった。

一体今西は自分のどこを見てくれたのだろうか。先程の恥じらいよりも興味が簡単に上回り、榊は今西の顔を見た。

今西は運転中のため視線を合わすような危ないことはしない。

だが榊の視線を感じ取ってくれてるようで、今西は目を弓にして、

「榊君はなんで、僕がスカウトしたんだと思う？」

質問をぶつけてきた。

なんでも言われても、榊には思い当たる節が全くない。

強いて言うなら平均よりも高めの身長ぐらいだろうか。だがそれも、街中を歩けば自分よりも高く、そしてイケメンに分類される人はいくらでもいるのだ。

菜々に教えてもらいながら書いた面接カードには、いくつかアピールポイントも書いてあったが、あれは内面の話なのでここでの回答には役に立たない。

やはりいくら考えても、自分がなぜアイドルに誘われたのが分からない。

榊は窓に頭を当て、投げやりに言った。

「あれですか、大人の勘ってやつですかね」

それはないよな、と冷めた笑いを繰り返す。

しかし榊の予想とは裏腹に、ほう、と今西は唸って、

「よく分かったね」

「え？ 本当に勘だったんですか？」

「もちろん全てとは言わないけど、直感があつたのは事実だよ」

今西がそんな発言するのが榊には意外だった。

同時に、榊は自分の心が先ほどと変わって急降下するのを感じていた。

自惚れるつもりではないが、やはりアイドルに誘われた以上何かしらの客観的な理由

があるのだと思っていた。それを、まさか今西の直感と言われてしまうと、榊としては興ざめにも似た感覚を得てしまう。

悪い言い方をするなら、今の自分は今西の“なんとなく”に付き合わされてると言ってもいい。

そんな榊の心情を察してくれたのか、今西は苦笑を漏らして、

「安心しなさい、僕だって直感という根拠のないものだけで君をスカウトなんてしないさ」

「なら、根拠のある理由ってなんですか？」

まるで拗ねてるような言葉遣いにも今西は表情を変えない。

ただ彼は運転中にも関わらず一瞬榊に視線をよこす。

「——思いやりだよ」

「思いやりって、そんなの見ただけで分かるわけないじゃないですか」

何故か自然と語尾が強くなる。

自分がアイドルのようなルックスを兼ね備えてないのは十分理解しているはずなのに、期待していた分苛立ちが際立ってしまう。

窓から見える景色では、そこらかしこにあるアイドルの映像やポスターが街を彩っている。

346プロダクションのアイドルや別のプロダクションのアイドル。女性アイドルや男性アイドル。

瞳に映る誰もが一目で“かつこいい”や“かわいい”という感想が出てくる。

思い返してみれば、菜々だつて個性はかなり強かつたが、容姿は文句なしにかわいかった。

彼らの中には榊と同じようにスカウトされた人もいるだろう。しかし、榊と違って輝きを放っているアイドル達は、きつとその容姿でスカウトされたのだろう。

それに対して、榊がスカウトされたのは根拠のない直感と容姿に関係ない思いやりだ。

どんどん意欲が削がれている。いつそ帰つてしまいたい、そう思い始めたときに今西は言った。

「思いやりは、榊君には不服だつたかい？」

問い掛けにも榊は敢えて応えない。

口を開けば、今西に悪態をつきそうになる。

それにこちらから言わなくても、今西ならきつと理解してくれる。だから榊は沈黙を選んだ。

しばらくの沈黙の後、榊の予想通りに今西は返答を聞かずに続けた。



いいかい？ と前置きした後、

「先ず最初に言っておくけど、346プロダクションには、正式じゃないけどスカウトする際の基準みたいのがあるんだ」

これ秘密事項だからよろしくね、と笑う今西の言葉にも榊は無反応。

それぐらいは何となく予想がついている。個人の好みだけでスカウトするのは一種のギャンブルみたいなものだ。

たとえその人には絶世の美少女に見えても、他の人からすればそれ程に感じることはない。最悪微妙という感想が出てきてもおかしくない。

だから売れないというわけではないが、会社としてはそれよりもある程度の基準を設けた方が、安定して売れるアイドルを輩出しやすい。

自分がその基準を満たしているのか、そんなことは聞かなくても分かる。現に今西の口からは、

「だけどね。もしその基準に則るなら、僕は榊君をスカウトしなかった。——いや、出来なかつたと言うべきかな」

そう言われても全く嬉しくない。

ならいつそのことスカウトすらしてほしくなかつた、そう言いそうになる口を榊はなんとか抑えた。

今西はまだ話している最中だ。愚痴をこぼすのは彼の話を聞いてからでも遅くない、そう榊は判断した。

車が信号で止まると、今西がまた榊に視線をやった。

君は、と今西は笑みを濃くして、

「入学式に、島村君と一悶着あつたんじゃないかな？」

「——は？　なんでそれを……」

今西の発言に、さすがに榊も目を丸めた。

こちらが反応を見せたことに、今西は満足気に続ける。

「実は島村君が話しているのを聞いていたんだよ。入学式前に新入生の男の子に迷惑を掛けてしまったけど、その子がとてもいい子だったから助かったって」

「いい子って、別に俺は何も……」

「聞いた話だと、君は入学式の際にリボンきしよ徽章ちゆうを島村君に潰された時に予備があると  
言つたみたいだね。でも入学式には、潰れたままのリボン徽章で出席していたそうじゃないか」

まさかその事が島村に知られていたのも、ましてや今西までもが知っている事が榊に驚きで仕方なかった。

だが榊はなるべく平然を装って、

「それは、島村先輩が大丈夫って言っても引き下がってもらえなかったからですよ」  
「でも、それは島村君にこれ以心配させたくない気持ちもあつたんだらう？　なら、榊君の行為は十分思いやりある行為だよ」

「……仮に思いやりがあつた行動だとして、よく俺が島村先輩と一悶着あつた人物だつて分かりましたね。名前とか聞いてなかったでしよ」

なんとなくだよ、と今西は簡単に返した。

そのタイミングで信号が変わり、車は再び走り出す。

「榊君が島村先輩と言つてたから、君が一年生なのは容易に想像がつく。まだ部活動が始まつてないのに島村君の事を知っていたから、きっとこの子がくだん件の生徒かなつて思つただけだよ」

それに、と今西は付け足す。

「周囲の生徒が僕に警戒しながら素通りしていく中、榊君だけは疑いもせず話しかけてくれたからね。こんな優しい生徒なら、島村君が言つてたような事しても何ら不思議じゃないと思つたよ」

「そうですか……。でも、もし違つてたらどうするんですか？　やつぱり違つてたから無しでつて言うつもりだったとか？」

「まさか、僕だつてそんなに無責任じゃないよ。——まあ確かに、君が件の生徒じゃない

可能性は十分にあつたけどね」

「だから、そのための“勘”ですか……」

「そうだよ、と今西はためらわず頷く。

「これでも僕は長くこの業界に携わつてきたからね。それなりに人を見る目はあるつもりだよ」

「その部長さんの目から見て、俺は売れそうと感じたんですか？」

「いや、売れるかどうかなんて、一目見ただけで分からないよ」

最早今西の発言の趣旨が理解出来ない。

アイドルとしてのルックスは足りない。長年業界に携わつてきた今西から見ても売れるかどうかは分からないのだ。

なら、“思いやり”というものだけでなぜスカウトしたのか。

榊が疑問を口に出すより早く、今西は回答を述べた。遠目でラジオ局が確認できる所まで来たが、今西はその事には一切触れず、

「僕はね、君が件の生徒だろうとそうじゃなくても、あシンデレラのプロジエクト子には君みたいな王子様が必要だと思つている。

もし榊君が明日のオーディションを受けると決意した場合、オーディション会場には君よりもルックス・歌・ダンス、全部が上の子ばかりだと思う。中には養成所に通つて

いる子もいるぐらいだ。

でも僕個人の意見としては、そういう子は今回のオーディションには向いてないと思ってるんだ」

「向いてないって、どうしてですか？ アイドルの素質があるなら、それに越した事はないじゃないですか」

また語尾が強くなっている。

だがそれは先程までの不安をぶつけてるのではない。ただ純粹に疑問の答えを知りたいという好奇心の結果だった。

榊は、いつの間にか自分の視線が今西に合わせているのに気づいた。

人からの視線は感じやすいもので、今西は榊からの視線を感じ取ると、息を一つ吐いてから、

「これが単なる男性アイドルオーディションならそれでいいかもしれない。だけど今回は、十四人の女の子の中に、男の子王子様はたった一人。それも相手は、下は小学生から上は大学生までいる」

「それだけ聞くと、すごく気疲れしそうですね」

そうかもね、と苦笑いで共感してくれる今西に、榊も同じ反応を返す。

「だから僕は、今回のオーディションに限ってはアイドルとしての素質だけじゃなくて、

思いやりや協調性といった内面を重視したいと考えているんだ。でも書類審査だけだと、最悪そういう子は一人もいないかもしれない」

「そこで俺の出番ってわけですか」

「そうなるかな。だけどオーディションは平等だからね、周囲が他のの子がいいと言えば、その子の内面に多少問題があっても採用になる」

「厳しいですねえ、と榊はため息混じりに言う。

「その中にど素人の俺が混じって、採用される可能性なんてあるんですか？」

「あるに決まってるじゃないか。ただ、可能性が他の子より低いだけだよ」

「そこはお世辞でも大いに可能性はあると言ってほしい。

「……もしかしたら、お世辞で少し可能性があるって言ってるかもしれないよな。

「一々確認するという無粋なまねはしない。ただ、

「……部長さん」

「なんだい？」と優しく返してくれる今西に対し、榊は籠った声で、

「俺がもし、奇跡やまぐれや偶然を連発してアイドルになった時、部長さんは喜んでくれますか？」

「当たり前じゃないか。榊君がオーディションに合格するという事は、僕の目に狂いはなかったという証明なんだから」

じゃあ、と榊は、今度は力を持った声で、

「俺がもし、アイドルになった後全く売れなくて、王子様になれないまま引退した時、部長さんは俺をスカウトしたのを後悔しますか？」

「……………」

今西は即答しなかった。

気付けば、車は既にラジオ局に到着していた。今西は無言のまま車を地下駐車場に走らせる。

車を駐車させた後、今西はやつと口を開いた。

「榊君と知り合ってまだ一日足らずだけど、君の悪いところが一つだけ分かったよ。――君はかなり我慢する事が……、いや、ここは臆病な性格と言っておこうかな。それも、何か新しい事に挑戦する時は特にそうじゃないかい？」

そう問いかけられても、榊としては返答に困ってしまう。

果たして自分は臆病な性格だろうかと自問してみるが、答えはすぐに出ない。

そもそも、まだ十五年というお世辞にも長くない人生の中で新しい事に挑戦する事自体が少ないのだ。

……菜々さんならきつと、慎重な性格とか言ってくれるんだろうな。

自分もどちらかというそう思っている。しかしそれを、今西は悪いところと言ってい

る。

修正すべきところなのだろう、そう榊は捉える。だが今西が続ける言葉は、

「あ、だけど勘違いしないでね。君のその性格は、臆病よりは慎重という方が正しいと思うし、将来必要になる要素だから大切にしてほしいよ」

だけどね、と今西は車から鍵を抜く。車から出ようとしない彼に榊も合わせる。

「榊君はまだ高校生になつたばかりなんだ。慎重になる気持ちも理解出来るけど、今ぐらいは後先考えず挑戦しても罰は当たらないよ」

「それで部長さんに迷惑をかけてもですか?」

意地悪とも取れる言葉にも今西は笑つてみせる。

「子供が大人に迷惑をかけるのは一種の特権だよ。そして、子供からの贈り物迷惑を笑つて受け入れるのが大人の義務さ」

「大人つて大変なんですね」

「大変だよ。だから今の内に子供の特権に甘えておくのがいい。もし君がアイドルとして成功出来なかつたとしても、僕は笑つて受け入れるぐらいの器は持ち合わせてるつもりだよ」

やつぱり敵わないなあ、と榊は今更ながらに思う。

子供が大人に敵わないのは当たり前前の事。それが榊には嬉しく感じてしまう。



「……すみませんでした」

「ん？ なんのことかな？」

いやあ、と榊は恥ずかしそうに頬をかく。

「俺だけ気持ち先走りして、部長さんに失礼な事を言ってしまったので」

「そのぐらいいは笑ってすませるよ。それに、あれは失礼な事じゃなくて榊君の本心なんだろう？ なら僕はそれが聞けて満足だよ」

じゃあ行こうか、と今西が先にドアを開ける。

それに続いて榊も外に出る。地下駐車場には春には不相応な冷たい空気が漂っている。

だがそれぐらいが丁度いい。榊の身体は、本人が自覚するほどに熱を持っている。

決して長くはない移動時間の間に、色んな感情が出たり戻ったりを繰り返していた。

それが一段落ついて冷静を取り戻したからこそ、自分の身体の状態を認識出来る。

胸の鼓動がやけに速く感じる。それが緊張と興奮のどちらなのかは、榊には判断がつかない。だが、

……それを嫌と感じないなら。きつといい傾向だよな。

そう確信して、榊は今西の後を追った。

## 四話 敵ですか?そういうのは身近にいるんですよ

初めて訪れたラジオ局に、榊は内から湧き出る興奮を抑えるのに必死だった。

普段はテレビよりもラジオを聞く機会の多い榊にとって、そこはテレビ局よりも価値のある場所だった。

今西が受付で手続きを済ましている間も、榊は346プロダクションにいた時以上に周囲を執拗に見渡している。

さすがにここで、家で聞いているラジオのMCの人に会えるという甘い考えはない。だが、ラジオ局に来たからには少なからず期待してしまうのは必然だと考えている。

「お待たせ。はいこれ、入館証だから首から下げておいてね」

手続きを終えた今西が、手にしていた二つの入館証の一つを差し出してくる。

言われた通り入館証を首に下げる榊を見て、今西が小さく微笑む。その反応に対し、榊は首を傾げて、

「あの、何かおかしな事でもありましたか?」

「いや、榊君がラジオ局に想像以上に興味を示してくれていたからね」

「車の中でも言いましたけど、普段はテレビよりラジオを聞いている方が多いので、自分に

とつては一般人がテレビ局に来た感覚ですよ」

そう返すと、今西は数度頷き、

「それはよかった。今日はスケジュールの都合でテレビの収録見学が出来なかったんだけど、ラジオにして正解だったよ」

「もしテレビ局の見学だとしても、俺は嬉しいですよ」

何事も初めて見るものは新鮮で、たとえば中身が薄くともそれだけで面白く見えるものだ。

それは榊も例外ではなく、テレビ局だとしても今のように興味を示していたに違いない。

……ラジオ局程かと言われると、また別問題だけだな。

それを口に出すことはせず、二人は歩を進める。

「思ったより道が空<sup>す</sup>いてたから、収録前に挨拶ぐらいは出来そうだね」

今西が時計を確認して言う言葉に、榊は心臓が大きく跳ね上がる感覚を得た。

いよいよアイドルに会う事になる。

……菜々さんはあまりアイドルの雰囲気なかつたからなあ……。

もちろんいい意味で。

それに、あの時の菜々はアイドルではなくメイドの菜々だった。

あの人なら、オンとオフの区別ははっきりしてるだろうと、榊はそう思い込んでいる。だけど今回は違う。相手はアイドル活動中なのだ。

しかもラジオの収録前という、現場の緊張感が高まつてる時だ。

そんな場所に今西ならともかく、完全に部外者である自分が入ってしまったていいものなのか。

明らかに場違いである。ちよつと帰りたくもなっている。

「ほら、ここが今から見学するスタジオだよ」

「はい……?」

そんな悠長な事を考えている内に、どうやら目的地に着いてしまったらしい。

眼前には“第二スタジオ”と印字された青い扉がある。

ただの青い扉——、のはずなのにその青い鉄塊は、榊に尋常じゃない威圧感を与えていた。

「それじゃあ入ろうか。挨拶出来ると言っても、あまり時間に余裕はないだろうしね」

「え……?」

こちらの心情など全く意に介さず、今西はノックする。

待つて、というよりも早く、今西は青い扉を開けてしまう。

覚悟のできてない榊は一瞬固まってしまう。しかしここで置いていかれては、とても

一人で中に入れる気もしない。

……腹くくられて事ですよねえ……。

意を決して榊は一步を踏み出す。するとまず目に入ったのはたたくさんの機材だ。

ラジオに関心のある榊には、そこがスタジオの隣で音声の調整などをする  
サブコントロールルーム  
副調整室と呼ばれる場所だとすぐに分かった。

正面では数名の男性スタッフが集まって最終打ち合わせをしている。話を通ってる  
おかげか、今西は片手だけ上げて挨拶を済ませる。

その隣に、アイドルと思われる女性が二人いる。

一人は大分おっとりとした印象を榊に与えた。雰囲気や服装からは、少し前からブーム  
ムになっている森ガールのようなイメージを持たせてくれる。

この人が、今回見学するラジオのMCである高森藍子だ。

そしてもう一人、藍子と楽しそうに会話をしているのは、ツインテールの高森よりも拳  
一つ分程高い女性だ。

こちらもおっとり——、というよりは天然の方がしつくりくるかもしれない。なんだ  
か卯月のような人だと、榊はそんな感想を抱いた。

そこでふと、正面の二人がこちらの存在に気づいた。まずはツインテールの女の子で  
近づいてきて、

「こんにちは。見学に来た方ですか?」

「えっ? はい……」

まさか相手から話かけられるとは思ってなかった榊は言葉に詰まってしまふ。

それに対し、相手は首を傾げて、

「あれ? でも今日は公開収録じゃないですよね。なのにどうして見学する人がいるんでしょう?」

どうしてと言われても、こちらは今西についてきた過ぎないので返答に困ってしまふ。

言葉にし難い空気が二人に流れる。すると、すかさず藍子が側までやってきて。

「愛梨ちゃん、打ち合わせの時に言ってたでしょ? 今日特別に来るって」

「そうでしたっけ?」

そうだよ、と言い聞かせようと言う藍子は、すぐに榊に頭を下げて、

「初めまして、高森藍子です。今日はよろしくお願ひします」

「十時愛梨ですつ。よろしくですつ」

「あ、どうも、榊和巳です。こちらこそ、よろしくお願ひします」

アイドルから挨拶されるとは思ってもみなかった榊は、反射的に挨拶を返す。

「やあ二人とも、今日はよろしくね」

今西が顔を見せると、二人は同じように頭を下げた。心なしか、自分の時より深く下げてるように見えるのは、きつと今西が目上の相手だからだろう。

「こんにちは部長さん。この子が朝話してた”期待の若手”さんですか？」

「そうだよ。どうだい？ なかなか良い原石でしょ？」

ええ、と同意する藍子を尻目に、榊は講義の視線を今西に送りつける。

「俺まだ346のアイドルじゃないですし、なるためのオーディションを受けるかも決めてませんよ」

「分かってるよ。だけど君は、僕の中じゃ立派な”期待の若手”だよ」

そう言ってもらえると悪い気はしない。それと同時に、こそばゆい感じになるのも事実だ。

「榊君、部長さんから話は聞いてますよ。今日は色々見学して、明日あるオーディションを受けるかどうかを決めるんですよね？」

「どうやら藍子の方は今西から話がいってるようだ。」

「……見た感じ、この人は常識ある人みたいだしな。」

「はい、と返す榊に、藍子は嬉しそうに頷く。」

「じゃあ、と手を叩いて前置きしてから、」

「今日の収録、一緒に頑張りましょうね。何かあっても、私と愛梨ちゃんがしっかりフオ

ローしますから」

「は、はい! ——はい……?」



「みなさん、こんにちは。高森藍子です。今週も“ゆるふわタイム”のお時間がやってきました。今日もみなさんと、素敵な時間を共有出来たら嬉しいです。

さて早速ですが、今日はこのラジオに素敵なゲストが来てくれます」

「みなさんこんにちは。十時愛梨です。今日はよろしくお願ひします。

それにしてもここ暑いですね。ちよつと脱いでもいいですか?」

上着に手を当てる愛梨に、正面にいる藍子は慌てて立ち上がり、

「だ、駄目だよ愛梨ちゃん! ここにいるのは私達だけじゃないんだから!」

「あ、そうでした。じゃあ今は我慢しますね」

もう、と文字通り椅子に崩れ落ちた藍子は、しかしすぐに気持ちを切り替えると声を張り上げて、

「なんと今日は、愛梨ちゃん以外にももう一人スペシャルゲストを呼んでいます! それでは自己紹介をお願いします」

「あ、はい! さ、さきやき和巳です。今日はよ、よろしくお願ひしみます……!」



上擦り、加えて嘸み嘸みの自己紹介に、愛梨の隣に座る榊は今すぐにも逃げ出した気分になっていた。

……どうして俺が、ここにいるんですかねえ……。

見学だけと聞いていたラジオ収録。それなのに何故か榊は副調整室ではなく、見学するはずだったスタジオの方にいる。

藍子に収録に参加してもらおうと伝えられた時、啞然とするしかなかった榊の隣で、今西も驚いた表情を見せていた。

今西もその話は聞いていなかったのだろう。きつと今西から話を聞いた藍子が、独断で話を進めたのかもしれない。

当然出来るわけがないと拒否する榊だったが、藍子と愛梨はフォローするからとスタジオの方に押し込んでくる。

スタジオに入った後も、ディレクターらしき人に大丈夫なんですか？ と確認を取ってみた。しかし彼はこちらの予想に反するかのごとく、素人が出るのも面白いんじゃない？ と随分軽い承諾を得てしまう。

ならば、と次に今西を見たが、こちらは予想通りにいいんじゃない？ とあつさり返されてしまう。

最早多数決など意味をなさない。そう悟った榊は、半ばやけくそ気味に収録に挑んだ

わけだが、

……出だしからしくじりましたね!

顔から火が出そうとは、まさに今の状況を言うのだろう。きつと今の自分の顔は、まるで茹でタコのように真っ赤に違いない。

手足が自分の意思と反して小刻みに震えだす。しかしこれが、緊張だけから来てるものではないのは、榎自身が理解している。

……やっぱり怖いなんてもんじゃないよな。

目の前にあるマイクは、榎の悲惨な自己紹介をしつかりと聞き取っていただろう。それはつまり、ラジオを聞いている全員の耳に届いているということだ。

もしかしたら学校の、さらにはクラスの誰かが聞いている可能性もあるのだ。そう考  
えるだけで、視界と思考が白一色に染まってしまう。

何か喋らないと、そう頭では分かっているけど、声帯が上手く働いてくれない。

口を動かし、言葉が喉が上がってもすぐに落ちてしまう。僅か数秒の間に、何度もそれを繰り返してしまう。

本当に逃げ出してしまいたい、心からそう思った時だ。

不意に手のひらが冷たくなった。視線を落とせば、自分の手のひらの上に別の手が置

かれています。

三色の縞模様の袖を辿るように顔を上げれば、

「十時さん……」

そこには当然愛梨がいる。

彼女はこちらの手を握り、大袈裟に驚いた様子を見せて、

「わあ！ 榊君の手すごく熱いですね。もし暑いなら、脱いだら涼しくなりますよ」

……ここで俺が脱いだら色々問題じゃないですかねえ。

収録見学が収録体験になっただけでも笑えないのに、公然わいせつで捕まったら笑い事では済まなくなる。

「だから愛梨ちゃん！ ここで脱いだら駄目なんだって！」

「ええ？ だって榊君すごい汗かいてますよ。暑いなら脱いだ方がいいじゃないですか」

「そうじゃなくて、榊君の汗がすごいのは、初めての自己紹介で失敗しちやっただからだよ。別に暑いわけじゃないんですよ！」

「申し訳ないんですけど、二人ともそうやって俺の失敗傷に塩をすり込むのやめてくれますか!？」

まるで先ほどのことが嘘のように、榊は大声で二人を制した。

……何がフオローしますからだよ。敵は身近にいたじゃないか!

見れば副調整室ではスタッフ全員が笑っている。ディレクターに至っては大笑、それも手を叩きながらというおまけ付きだ。

「ち、違いますよ。誰だつて間違ひはありませんから。気にしないでいいんですよ」

「そうですよ。私も自分のプロデューサーに誰の担当ですか? って聞いたことありませんし、自己紹介で嘔むぐらいなら可愛いから問題ないですよ」

「だからそう言つたら駄目だつて愛梨ちゃん! 榊君だつて自己紹介でうわづつた声で、しかも二回嘔んじやつたから、顔から火が出そうなくらい恥ずかしいんだよ。それを可愛いなんて言つたらかわいそうですよ」

「高森さんさつきからわざと言つてますか!? わざとじゃないなら、それはそれでタチ悪いですよ!」

この高森藍子というアイドル、一見常識人に見えるが実は結構危ない人物だ。天然とまではいかないが、どこか抜けているところがある。

一目で分からないゆえに、卯月や愛梨より厄介かもしれない。

要注意人物だな、と藍子への評価を改める。すると、眼前の藍子がわざとらしく、じゃあ! と切り出して、

「本日のゆるふわタイムは、ゲストの十時愛梨ちゃんと榊和巳君の三人でお送りします」

「高森さん、今のはわざとですよね。わざと無視しましたよね？」

「聞いて分かるように、榊君はまだラジオに不慣れですから、みなさん優しく見守ってあげてください」

無視ですかあ、と小言を言う榊の視界にあるものが映った。

それはガラス越しの副調整室、そこでスタッフの一人がスケッチブックをこちらに掲げて見せている。そこには短く、“そろそろ次行こう”とだけ書かれている。

…ああ、そういうことか。

どうやらオープニングで引っ張りすぎたみたいだ。

最近ではラジオも事前に収録したものを放送することあるが、ゆるふわタイムは生放送のため時間調整はとても重要になる。

その役目を担っているのがMCである藍子なのだ。しかし今回は、自分の嘸み嘸み自己紹介というイレギュラーがあつたため、スタッフから指摘されてしまった。

ならばこちらにも素直に従うしかない。手元にあるお茶で喉を潤し藍子の声を聞く。

「さてみなさん、今回のゲストである十時愛梨ちゃんのごことはよくご存知ですよ。ただ、榊和巳君の事は全く知らないでしょう。」

ですから、普段は事前に頂いてるお便りとりアルタイムで頂くお便りの両方をご紹介してますが、今回はリアルタイムのお便りのみをご紹介させていただきます。もちろん

ん、頂いてますお便りは次回以降ご紹介しますのでご安心してください」

そう言つて藍子はタブレットを取り出した。リアルタイムのお便り、多分ホームページにでも専用のページがあるのだろう。

ここでは藍子のみがそれを閲覧可能で、その中から選んでトークをしていくようだ。……俺と十時さんが見ても、まともに進まなそうでもないな。

そう言つた意味では、藍子だけがお便りを見れるのは正解かもしれない。

眼前では藍子がタブレットをスクロールしながら、そうだなあ……、と目をしきりに動かしている。そしてすぐに一点に目がいくと一つ頷いて、

「それじゃあ最初のお便りは、ラジオネーム“コタツの猫”さんからです。」

藍子ちゃん愛梨ちゃん、そして和巳君ゆるふわー。はい、コタツの猫さんゆるふわー「ゆるふわー」

「ゆるふわー?」

「ラジオでの挨拶みたいなものですよ。お便りにはだいたい書いてありますから。ちゃんと返してあげてくださいね」

言われてみればそんなものがあつた気もする。一度聞いただけではやはりうろ覚えな部分が多い。

「それではお便りの続きです。」

和巳君の嘸み嘸み自己紹介とても可愛らしかったです。初めてのラジオ収録頑張ってください。だけど和巳君は一体何者ですか？ できれば和巳君から改めて紹介お願いします」

「絶対嫌です」

「即答ですね。それでは私が回答します。彼は今度346プロダクションが行う男性アイドルのオーディションを受ける可能性があるんです。

可能性というのは、今日このラジオも含めて色々見学してオーディションを受けるかを決めるようです。それで合ってますよね」

ええ、と頷く榊は副調整室の今西を見る。

346プロダクションが男性アイドルのオーディションを行っているのは社内機密と聞いていた。

それを藍子は躊躇いもなく喋っている。

こちらの視線の意図を理解した今西がスタツプからスケッチブックを借りて何かを書き込んでいる。

一体何を、と思う榊に今西が見せた文字は、

『気にしなくていいよ。社内機密って言ったけど、あれ嘘だから』

……………？

すぐさま今西は次の紙にペンを走らせる。

『オーディションしてるんだから、秘密なわけじゃないじゃないか(笑)』

……言われてみればそうなんですけど、(笑) って書かれるとなんか腹立つ!

考えてみれば、346プロダクションが初めて男性アイドルのオーディションをするのに、それを世間が知らないわけがないのだろう。

それなのに今西の言葉にまんまと騙されていたのは、それだけ世間に関心がなかったからだろうか。

……考えても仕方ないか。

まだ心に苦味が残ってるが、これ以上気にしても無駄なのは理解できる。だから、榊はまた嘸まないように細心の注意を払いながら、

「まあ俺としては、色々見学出来ていいかなあとか思ってたんですけど。それが何故か、こうして実際に体験することになったわけでした……」

「いいじゃないですか。それによく言いますよ。百聞は一見に如かずって」

「愛梨ちゃん、それだと見学だけで充分になっちゃうから。——とにかく、榊君はこれからアイドルにかもしれない子なんで、みなさんもよかつたら覚えておいてくださいね。それでは次のお便りです。ラジオネーム“桜吹雪”さんから、

ゆるふわタイムのみなさん、ゆるふわー。はい桜吹雪さん、ゆるふわー」



藍子の言葉に合わせて、榊も同じように言葉を返す。

「榊君上手ですね」

愛梨が拍手で褒めてくれるが、それを素直に喜ぶことが出来ない。

……挨拶で褒められるって幼稚園児かよ。

それは藍子も理解しているのか、こちらに苦笑を見せてくれるのがせめての救いだ。

「では榊君の挨拶がきちんと出たのでお便りの続きです。

いきなり知らない男の子が出てきてびっくりしましたが、なんとアイドルの卵だったんですね。ぜひアイドルになれるように頑張ってください。ちなみにアイドルの卵ということ、藍子ちゃんと愛梨ちゃんはどうしてアイドルになったんですか？ 榊君と同じようにオーディションですか、それと街でスカウトされたからですか？」

……ん？ これって……。

奇遇にも、今日出会うアイドルに聞こうとしていたことを、この桜吹雪さんが質問してくれたようだ。

これはまたとない機会だ。そう思った榊は便乗するように声を出して、

「確かにそれ、俺も気になりますよ。お二人がどうしてアイドルになったのか」

「そうですか？ 本当なら榊君に色々答えて欲しいんですけど」

「他にお便りはあるじゃないですか。それに、折角選んだお便りなのに答えなくちゃ、桜

吹雪さんがかわいそうですよ」

半ば強引に話を運ぼうとしている榊をどう思ったのか。藍子がくすりと笑うのが見えた。

こちらの意図を読まれてるのではないか、そんな一抹の不安も感じた。しかし藍子はそれ以上その事に触れようとはしなかった。

それじゃあ、と前置きして、

「私の場合、今のプロデューサーさんにスカウトされてアイドルになったんですよ。公園をお散歩してる時にお会いしてその時に。」

最初はこれといった特技とかもないんでアイドルなんて向いてないと思ったんですけど、プロデューサーさんが私の優しさを個性と言ってくれたんですよ」

「優しさが個性……」

奇しくもそれは、榊が今西に言ってもらった事とよく似ていた。

「私その時思ったんです。もし私の姿や声を、ファンの人が見たり聞いたりして優しい気持ちになってくれたら、それはとても素晴らしい事なんじゃないかって。だから私は、アイドルになる事を決意したんです」

藍子の話を聞いてすごいなあ、と感心する反面、どうしてそういう考えになるんだ？ という疑問もある。

榊は今西に思いやりがあつたからスカウトしたと言われた時、それを素直に受け取る事が出来なかつた。それがアイドルにどう必要なのか理解出来てなかつたからだとは思っている。

だが藍子の話を聞く限り、彼女はすぐにそのプロデューサーの言葉を信じ、アイドルになつたように思える。

「……あの、藍子さん？」

「はい、なんですか？」

「ちよつと、一つ思つたんですけど……」

何？ と返してくれる藍子に榊はどうしようか悩んだ。

これから言おうとしてる事は、わざわざこの場で言う必要があるのか。むしろ雰囲気壊す可能性だつてあるのだ。なら、ラジオが終わつた後にでも聞けばいいじゃないか。

でも、

「高森さんは、スカウトされた時に優しさが個性つと言つてもらえてアイドルになつたと言つてましたが」

この場を逃して後で言えるほど、自分に度胸がないのは誰よりも分かつてる。

「失礼を承知で言いますが、優しさなんて、大抵の人が持つてるじゃないですか」

そもそも、当初はラジオの収録見学だったのに、それをいきなり参加させてきたのは向こうなのだ。だから、

「そりゃあ、そう言ってもらえるのは嬉しいとは思いますが——」

言ってみえ。

「どうしてそんな言葉を間に受けられるんですか?」

言ってしまった。

人によつては言葉の続きに、馬鹿じゃないんですか? と思われても仕方のない発言だ。

完全に空気を壊してしまった気がする。心なしか、副調整室にいるスタッフの表情もよくない。

子供だから許されるなんて甘い考えはない。しかしこれで、現場の雰囲気どころか、自分を連れてきた今西まで被害が及ぶかもしれないと思うと、やはり今の発言は軽率だったかもしれない。

今更発言を取り消すことなんて出来ない。それに今西は言っていた、346の子は皆優しいから、と。

榊の視線はずっと藍子に向けられている。その表情は先ほどと変わらず笑顔のままだ。

だがまだ油断出来ない。女性の笑顔は何よりも読みにくいものだ。誰かが言っていた気がする。表面では笑っていても、内面ではどう考えてるなんて分からない。

次の発言に榊が身構える。無意識のうちに体に力が入ってしまう。

「榊君は——」

藍子がゆつくりと口を動かす。

「どうしてアイドルオーディションに応募したのかな？」

「どうしてって、それは……」

部長さんに誘われたから、と言いそうになる口を榊はすんでのところであぐらをかいた。

いくらオーディションが社内機密ではなかったとしても、オーディションには応募するのが普通だ。それを部長さんに誘われたからと言えば、コネと言われてしまう可能性が高い。

……まあでも、書類審査を免除されてるから、コネと言われても間違いじゃないんだけどね。

それでも言わないに越した事はないのだ。

榊はすぐに代わりとなる言葉を脳内で模索する。自分から応募したではすぐにボロが出る。それ以外に今の自分に状況が似ているのは、

「……友達が勝手に応募してて、そしたらたまたま書類審査を通ったんです」

「わあ! それって私と同じじゃないですか!」

愛梨が仲間ですね、と喜んでいますが実際には違うので、榊はちゃんとした返しをしな  
い。

「その人にどうして俺を応募させたのか聞いたら、思いやりがあるからって言われて  
……」

「榊君はそれが納得出来なかつたんですね?」

「二応。でもその人とは理由とか含めて色々話したから今は割り切ってます。ただ、高  
森さんの話を聞く限り、俺みたいに反発してなそうなんで、すごいと思う反面、なんで  
という疑問も出てきました」

うんうん、と頷く藍子は、その穏やかな表情を少し崩して、

「私も、榊君と同じ考えだと思ふな。優しさとか思いやりって誰にでもあるものだもん」  
でもね、

「その誰にでもあるものをあえて褒めてもらえるのは、実はとってもすごい事だと思う  
の。だから私はその言葉を疑わなかつたし、アイドルになるのに迷いもなかつたよ」  
そんな考えなど、榊の頭には一片もなかつた。

誰にでもあるから嬉しくない自分と、誰にでもあるからこそ嬉しい藍子。

多分、自分はアイドルになるにはナンバーワンにならないといけないと考えていた。

だけど藍子はそうではなく、どちらかというところを指しているように感じる。

だからこそ、藍子は自分とは真逆の考え方を持てるのだ。

「もちろん、榊君は男の子だから、私と考えが違うのは当たり前だよ」

それには同意出来る。だからと言って素直にそれを受けとめる事は出来ない。

「——あの榊君、時間も押してるから、私からは一っだけ言わせてもらおうね。」

アイドルである以上、魅力はたくさんあって大きい方が良いに決まってると思うよ。

「……でもね」

でも、と藍子はあえて同じ言葉を繰り返した。

「たとえ少しのファンの方しかいなくても、その人達は確かに私達を見て幸せな気分になつてくれるんだよ。それが百人でも十人でも、たった一人だとしても、私達が普段の生活だと絶対出来ない事なんだよ」

「普段の生活だと、絶対出来ない事……」

うん、と笑みで頷く藍子はなぜか突然立ち上がった。

不意の出来事に副調整室のスタッフが困惑の表情を浮かべた。だが藍子はそんな事など気にもとめず、テーブルの横を通り榊の目の前で止まった。

なんだ？ とたじろぎそうになる榊を尻目に藍子はこちらの両手を包み込むように

握った。

やわらかい、と悠長な感想を頭に浮かべる榊に藍子は、

「大丈夫、アイドルは榊君が思ってるより怖くないよ。それに、榊君は自分が考えるよりも魅力溢れる人ですから」

嘘だあ、と即座に榊は思った。

今西でさえ大した事は言ってもらえなかったのだ。それを藍子に言われても今一ピ  
ンとこない。

しかし、こうしてアイドルに両手を握られて笑顔で言われると否定出来るわけもな  
く、

「はい、ありがとうございます。何が魅力なのか全然分かりませんが……」

「こんなにアイドルに対して真剣に考えてるだけでも、私は魅力の一つだと思うけどな」

「そうですよお。私なんて今でもよく分からないままアイドル続けてますよ?」

「だから愛梨ちゃん! そう言ったらここまで悩んでる榊君が馬鹿みたいじゃないです  
か!」

「あの高森さん? そうやって暗に馬鹿って言われるぐらいなら、直接馬鹿って言っ  
てもらう方が俺のメンタル的には嬉しいんですが」

え?! 違いますよ! と否定する藍子と、いじめたら駄目ですよお、と便乗する愛梨



を見て、榊は自然と口端が上がるのを自覚していた。



「さてみなさん、今週のゆるふわタイムもそろそろ終わりの時間が迫ってきました」

藍子の締め挨拶をするのを聞いて、もうそんな時間か、と榊は時計に目をやった。

……一時間があつという間だったな。

あれからもたくさんの事があつた。

藍子と愛梨の水着の写真集を出してほしいというお便りが来た時に、藍子のテンションが異様に下がったこと。

愛梨はケーキ作りが趣味らしく、何ケーキが得意ですか？ というお便りの時には、もし自分がアイドルになれば愛梨が手作りケーキを振舞ってくれることになった。

それ以外にも約一時間の間にたくさんのお便りが読まれた。そしてそのほとんどには、ぜひアイドルになってほしい、と自分に対しての励ましのメッセージが添えられていた。

中にはもうファンになってます！ というお便りよりもあり、さすがにそれには照れ隠しをせずにはいられなかった。

「それでは最後に榊君から感想をいただきしたいと思います。榊君、今日のラジオ収録はいかがでしたか?」

「はい。ラジオ収録なんて普段なかなか出来ない事ですから、今日はすごい楽しかったです」

「本当は色々なコーナーもあるんですけど、今日はあえてお便りコーナーだけにしてみました。他のコーナーは、榊君がアイドルになった時にまた来てもらうということでしょうしくお願いますね」

なれたらですよ? と返す榊に、なれますよ、と即座に返してくる。

「それじゃあみなさん、良い週末をお過ごしください。ゆるふわー」

「ゆるふわー」

「ゆるふわー」

暫しの沈黙の後、スタッフさんからOKの指示が出る。

その瞬間に榊の緊張の糸が簡単に切れ、伸ばしきっていた背筋も折れてあごをテーブルに乗せる形になってしまう。

「お疲れ様。どうだったかな? 初めてのラジオ収録は」

副調整室から今西が入ってきて、ねぎら 劳いの言葉と感想をきいてくる。

だから榊は、なんとか上体を起こして今西に向き直してから、

「どうと言われても、とにかく今は疲れたとしか言えないですよ。それに部長さんも、収録体験だつて知つてたなら教えてくださいよ」

「いやあすまないね。僕もてつきり見学だと思つてたから、高森君から言われた時は驚いたよ」

「私の方からディレクターさんをお願いしてみたんです。何事も経験かと思ひまして」

それはナイスプレーだね、と親指を立ててみせる今西に、榊は蔑んだような目で見る。

「そう機嫌を悪くしないでおくれ。高森君だつて君の事を思つてやつてくれているんだから」

「別に悪くはしてないですよ。ただ事前に教えてくれてもいいと思つただけで」

「藍子ちゃん榊君を驚かそうとしたんですけど失敗しちゃいましたね。これつて余計なお世話つて言うんですよね」

……そこまで悪く言つてないですよ!?

なぜこの人は事態を悪くするような事ばかり言うのか。天然だとしても悪意の塊にしか見えない。

「あの……、高森さん……?」

榊が恐る恐る視線をやると、そこにはこうべ頭を垂れた藍子がいる。

嫌な予感がする。とても嫌な予感がする。

出来ることなら知らんぷりをして逃げ出したい。だがそんな事を今西達がさせるわけないし、なによりしたら人間として終わってる。

どうしてこうなる、と向けようのない不満を抱きながら藍子に声を掛けようとする  
と、

「私は……、ただ榊君に喜んでもらいたかっただけなのに……」

藍子が先だった。

その声は途切れ途切れで、それは誰が見てもすすり泣いているように見える。

……え? 今の泣くところなの? 俺何も言っていないけど。

全く以って理解出来ない。だが理解などする必要などないのだ。とりあえず今はこの場を何とかしないとけない。

「た、高森さん。俺別に迷惑なんて思っていないですから」

「……………」

「それに俺普段からラジオ聞いているのですごい楽しかったですよ」

「……………」

……怖い怖い! 無言が一番怖い!

「部長さんからも何か言ってくださいよ!」

「それはよくないな。榊君も自分の言葉には責任持たないと」

「俺そこまで言ってるじゃないですよ。どっちかと言うと止めの一撃は十時さんの一言ですよね!？」

「榊君、自分のケツは自分で拭け、ですよ」

「十時さんアイドルがそんな言葉言ったら駄目だと思えますよ!？」 それに俺は——ひっ  
!」

視線を離して一瞬の隙に藍子の両手が榊の肩に置かれていた。

払い除けたいのになんか出来ない。理由は色々出てくるが、とにかく威圧感が半端じゃない。

「高森さん落ち着いて。俺は本当に無実ですよ?」

「……………」

「(こ、こ)こういう時こそ心を整えないと」

「……………ぷっ」

「ぷっ、て今はそういう事言ってる場合じゃ……………ん?」

榊が異変に気付いたのと、スタジオが笑い声に包まれたのはほぼ同時だった。

啞然とする榊でも、この状況から察せる事がある。

「騙しましたね……………」

「ごめんなさい。榊君が意地悪言うからつい仕返ししたくなって」

申し訳なそうに舌を出してみせる藍子の姿はとても可愛らしく、それだけで怒る気もなくしてしまう。

「高森君もだいぶ上手くなつたね。これなら次のオーディションも大丈夫なんじゃないかな?」

オーディション? と首を傾げる榊に、藍子は少し照れ隠しするようににはにかんで、「実は今度、舞台のオーディションを受ける事になってるんですよ。その役には泣く演技もあるのでそのために練習中です」

「舞台のオーディション……」

「あ、でも舞台と言っても小さいものだから。テレビでやってるようなやつを想像したら駄目ですよ」

「何言ってるんですか。舞台に大きいも小さいもないですよ」

そこまでアイドルに詳しくない榊だが、時々アイドルが主演のドラマを見かける機会があつたが、お世辞にも演技が上手いとは言えないものばかりだ。

そういったものは大抵そのアイドルが主演するのが決まっているのだろうと、榊は勝手に決め込んでいる。

だが藍子は違う。確かに小さな舞台かもしれない。しかしオーディションをする以

上、そこには女優の卵だつて受けているのだろう。

アイドルよりも専門職であるその人達と競い合おうとしている。それは榊にとつてとても、とてもすごく、

「かつこいいと思いますし、アイドルの先輩として心から尊敬します」

「かつこいいなんて、そんな事言われてたの初めてですね」

「それに榊君、アイドルの先輩つて言うけど、君まだアイドルじゃないからね」

「な、なつたらの話ですよ」

そういう事しておくよ、と意味深に言う今西を無視して榊は藍子に頭を下げる。

「今日はありがとうございました。オーディション頑張ってください。素人目ですけど、今の高森さんの演技なら大丈夫だと思えますよ」

「ふふ、ありがとう。榊も、アイドルのオーディション頑張ってくださいね」

「私も、榊君みたいな子が仲間だと嬉しいなあ」

「まあ……、善処します」

「おやおや？ 榊君はまだオーディションを受けるか決めてないんじゃないかな？」

先ほどからやけに一言多い今西に、榊は明らかな不機嫌を視線で訴える。

「これには今西も何かを感じたのか、苦笑いして、

「それじゃあ、僕達も次に行こうか」

それだけ言つて足早にスタジオを後にした。

逃げやがった、と小言を漏らす榊は、ため息混じりに再度頭を下げて、  
「すみません、部長さんが行つちやつたので俺も行きます。本当に今日は貴重な体験を  
ありがとうございました」

「いえいえ、と笑みで返す藍子は、しかし榊に近づくとそつと耳打ちで、

「部長さんにもよろしく言つておいてくださいね?」

え? と思つた時には、藍子は人差し指を口に当てている。

おかげでどうして? という疑問を口に出さなくて済んだが、

……何で分かつたんだ……?

どこかで言い間違えていたのだろうか。いや、緊張で記憶は多少はあやふやだがそれは  
あり得ない。

もしそうだったなら今西に何かしらの指摘をされてるはずだ。

「ほら、部長さんが待つてますよ。早く行かないといけないんじゃないですか?」

「え? あ、はい。失礼します!」

合格したら教えてくださいね、と見送つてくれる二人に三度目のお辞儀をして、榊も  
今西と同様に早足でその場を去つた。

やつぱり高森藍子というアイドルは油断出来ない。終始それを教え込まれた収録体



験  
だ  
っ  
た  
。

## 五話 元モデルのあの人はダジャレ好き?

「どうだい、<sup>う</sup>346のアイドルは?」

ラジオ局を出て車に乗り込んだ今西が発した最初の一言がそれがだった。

シートベルトを締めた榊はわざとらしく考える素振りを見せて、

「菜々さんを含めてですけど、皆さんなかなか個性が立っていますね。まあ、売れているアイドルなんてそんなものなんでしょうけど」

でも、

「まだ三人しか会ってないですけど、みんな優しいですね。346の方向性が少しだけ分かった気がします」

「言っただろう。<sup>う</sup>346のアイドルはみんな優しいって」

そうでしたね、と返す榊を見て今西は車を走らせた。

駐車場を出て車道に入ったところで、榊は思い出したように言葉をつくる。

「あ、そういえば部長さん。高森さんから伝言預かってきましたよ」

「ほう、彼女は何だった?」

「<sup>お</sup>部長さんにもよろしく言っておいてくださいだって」

「おやおや、と苦笑いしてみせる今西に、榊も同じ反応を示す。

「高森君の前で君を褒めすぎてしまったかな」

「気をつけてくださいよ。コネと言われても否定出来ないのが事実なんですから」

「次からは気をつけるよ。それより、次の場所は確認したかな？」

「はい、と榊はポケットから予定表の紙を取り出す。そこには“モデル撮影”と書かれている。

「……モデルかあ……。自分にはあまり縁のなさそうな仕事だな。

「アイドルだからグラビア撮影をするのは知ってますが、モデル撮影とかもするんですか？」

「もちろん。と言っても、モデルには向き不向きがあるから、アイドル全員がやってるわけじゃないけどね」

「なら自分は断然不向きの方になるだろう。それならラジオの時みたいにいきなり体験なんて事はまずないだろう。」

「とりあえずは胸を撫で下ろした榊は予定表に目を走らせる。すると、モデル撮影の隣に榊でも知ってる名があった。

「……高垣楓……。」

「この人なら顔がすぐに出てくる。テレビや雑誌で顔を見る機会が多い気がする。」

それはつまり、この高垣楓というアイドルはそれなりに上の人なのだろうと榊は予想した。

だからそれを確かめるために、榊は今西に高垣楓の名前を指差して、

「高垣楓さんって有名人？」

「彼女は元々346のモデル部門にいてね。最初からそれなりの知名度があつたよ。もちろん、アイドルとしての実力もあるから今の地位があるわけなんだけどね」

モデルからタレントへはよく聞く話だが、モデルからアイドルになるのはそんなに多くないような気がする。

小さい頃からアイドルになるのが夢だったなら分かるが、それならもっと早くなっているだろう。

彼女に興味が湧いてきた。そんな時だ。

突如車内に連続した低音が響いた。

今西が頬を緩め、榊が頬を赤らめたなら、音の原因を探るのは容易だった。

「お腹が空いたかい？」

「……すみません」

「謝る事じゃないよ。今日は朝から緊張してばっかだからね。途中で昼食をとってから

現場に行こうか」

断る理由も余裕もない榊は、今西からの提案に黙って同意するしかなかった。



近くのファミレスで昼食を終えた榊達が向かったのは、346プロダクション本部の別館にある撮影現場の一つだった。

今回はアイドルよりも先に着いたのか周囲に楓は見当たらない。

しかしスタッフ達は今も忙<sup>せわ</sup>しくなく撮影場所のセッティングを続けている。

部屋の隅でその様子を見ていた榊は、感慨深そうに息を漏らして、

「ラジオ局でも思ったんですけど、アイドルが大変なのは当然かもしれないですけど、スタッフさんはそれ以上に大変ですよ。アイドルより先に来て準備して、アイドルより遅くまで残って片付けとかしないといけないんですから」

「そうだね。彼らの勤務条件は厳しいし、給与だつて決して良いとは言えない。それなのに、どうして彼らはこの仕事を続けているんだと思う？」

榊は何気なく感想を言っただつたのに、今西はそれを掘り下げて疑問を投げかけてきた。

……大変で給与も高くないのに続ける理由……。

上げようと思えばいくつかあると思う。例えば辞めたいと思っても次の仕事が見つからないとか、この仕事が生性に合ってるなどだ。

どれが最適だろうかと思いを巡らせながら榊が出した答えは、

「やりがいがある、からですか？」

こちらの回答に今西が笑みを作った。当たった？ と期待を寄せる榊に今西は、

「正解と言いたいところだけど、もう一声欲しかったから三角かな」

当たりでも外れでもない時にどんな顔をしていいか分からない榊は、とりあえず素直に疑問を表情に出してみる。

すると今西は、答え合わせをする教員のように少し優越感に浸った顔を見せて、

「彼らは誇りを持つてるんだよ。自分達も一つの作品を作り上げてる一員だって。当然メインはアイドル達であり、彼らが表に出る事は滅多にない。

でもメイクさんがいるからアイドルは魅力を増し、技術さんがセットを作ってくれるからアイドルの個性が活き、カメラマンが最高の瞬間を捉えてくれるからアイドルは輝く事が出来るんだ。

だから榊君は、アイドルなっても現場の人へ感謝の気持ちを忘れないでほしいな」

「そうじゃない人もいますか？」

「残念ながらみんなが同じってわけじゃないからね。中にはスタッフがそうするのは当

たり前だと思ってる人がいるのも事実だ」

へえ、と返ししながら榊は再度スタッフ達に視線を戻す。

皆誰もが忙しなく働き、しかしこちらと視線が合うと頭を下げてきたり笑顔を見せてくれる。

それらに対して榊は愛想よく返す事が出来ず、ただ頭を下げ終わってしまう。

……あれ？ これって……。

一つの不安を感じた榊は、すぐさま今西に向き直して、

「さっきから俺の反応って、部長さんが言ってる駄目な人間に感じるんですが」

「ん？ ああ、それなら大丈夫。君のは無愛想じゃなくて、緊張してるっていうのはみんな分かってるだろうから。それに、ちゃんと返してるだけ偉い方だよ」

そう言われても素直に喜べないが、相手からの印象を悪くしてないならそれでいいのかもしれない。

軽快に作業進めるスタッフ達に再度視線を戻してから五分程経過した時だ。

「みなさんこんにちは。今日はよろしくお願います」

穏やかな、それでいて透き通った声がスタジオに響いた。榊が声のする方に振り返れば、

……わあ……。

人は想像以上のものを目の当たりにすると言葉を失うと聞くが、それが偽りではない事を榊は身を以て体験していた。

視線の先では高垣楓と思われるアイドルがスタッフ一人一人に愛想よく挨拶している。

その姿はメイクも終えており準備万端である。上下を青で統一した服装は彼女のクールなイメージを表し、ショートパンツの上に見えるくびれたウエストは彼女のモデルとしてのレベルの高さを物語っていた。

こう言っただけは失礼かもしれないが、やはり今までのアイドルでは一番だと直感した。アイドルとして見るなら誰も負けてないと思うが、楓はそれに加えて大人の女性の魅力もある。モデル部門出身は伊達ではないということだろう。

……菜々さんは……、ウサミン星人だからしょうがないよな。

何がしょうがないのかはよく分からないが、とりあえずはしょうがないのだ。

「あの人が高垣楓さんですよね？ 何というか、すごいオーラみたいのを感じますね」「今までの子達はオーラがなかったかい？」

「そこまで言っていないですよ。ただ今までの人達はだいぶフレンドリーな印象があったんですけど、高垣さんはモデルをやったせいかな近寄り難い気がして」

「それなら大丈夫さ。榊君も高垣君と少し話せば誤解が解けると思うよ」



「誤解ですか……?」

それは一体どういう意味だろうか。そもそも話せば分かるというのも理解不能だ。

「あら、部長さんじゃないですか」

こちらが思考を巡らすよりも早く楓がこちらの存在に気付いた。

彼女は早足で近づくと、今西よりも先に榊を見て、

「こんにちは。貴方が榊君ね? 部長さんから話は聞いてるわ」

「榊和巳です。今日はよろしくお願いします」

アイドルとの挨拶も三回目となると慣れてくるもので、榊もある程度は自然に出来た

と自負している。

だけど、と榊は楓を目の前にして改めて思う。

……分かりきっていたけど、やっぱりこの人美人だな。

モデルをしていたのだから当然と言われればそこまでだ。だが、楓にはそれだけでは

足りないと思わせるほどの魅力がある。

それをはつきりとした言葉に出来ないのは経験不足のせいだろうか。そう思う榊を

尻目に、楓は今西にお辞儀をして、

「彼、随分とアイドル慣れしてますね。この前に誰かと会ってたんですか?」

「何人かだね。ここに来る前には高森君のラジオにゲストとして出演してきたんだよ」

そうですか、とやや大袈裟に驚いてみせる楓は、しかしすぐに榊へと顔を向ける。

視界の中央で捉える彼女の笑みは、どこか嫌な予感がする。

自分はこの感覚を味わった事がある。それもつい最近だ。

思わず視線を下げてしまう榊に、楓は凜とした声で言う。

「それじゃあ榊君、ついでにモデル体験もしてみる？」

……やっぱりきたよ……！

どうしてアイドルの人はこう無茶振りばかり仕掛けてくるのだろうか。貴重な体験をさせてあげようという心遣いからなのかかもしれないが、こちらとしては有り難迷惑以外の何物でもない。

ラジオは声だけなのでまだ何とか出来たが、モデルはどうしたって自分には出来っこない。

いかにしてこの場を乗り切るか、榊が全力で脳細胞を働かせる。すると、

「ふふ、榊君、モデルにモデルつもりだったかしら？」

楓の笑い声が耳に響いた。

見れば彼女は人差し指をこちらのほっぺに押し当てていた。そして、自分の言葉に合わせるようにつついて、

「でもまだ駄目よ。貴方には足りないものがあるから」

「足りないもの……?」

「高垣さん! そろそろ撮影お願いします!」

「はい。それじゃあ私は行きますね。終わったらまたお話ししますよ」

それだけ言うと、楓はステージへ足を向けた。

……自分に足りないものか。

そんなものはいくらでもあると思う。だが楓が何に對して言ったのかは分からない。

カメラマンの前で、躊躇うことなくポーズを決めてみせる楓を、榊はまるで別世界を  
見ているように呆然と眺めていた。



「お疲れ様でしたー」

撮影を終えた楓が颯爽とこちらへ戻ってくるのを、榊と今西は近くにあつたテーブルに座つて見ていた。

……やっぱプロは違うなあ。

カメラマンからポーズに関して様々な要望があつたが、彼女はそれらに一発で応えている。それも迷いなくポーズをとつてみせるのだ。

中にはそれって何を求めているの? という要望もあつたが、楓のポーズを見ると相手

の要望がイメージしやすい。

改めて眼前のアイドルの凄さを肌で感じていると、楓はこちらに笑みをつくって、

「どうだったかしら? 男の子だどつまらなかつたでしようか?」

「いえ、本物のモデルさんのポーズを間近で見れて興味深かつたですし、色々参考になりました」

「三個のポーズで参考になりましたか?」

「……………」

また、やや違和感のある発言だつた。

撮影に向かう前にも似たような言葉を聞いた気がする。

……モデルにモデル……。三個のポーズで参考……。

ここまで言われると何となく予想は出来る。だが楓に限ってそんな事はないし、そうでないと願いたい。

段々楓への視線が探るものへと変わってきた時だ。

突如バイブ音が聞こえてきた。隣の今西は胸ポケットから携帯を取り出して、

「どうやら会社からみたいだ。ちよつと向こうで話しているから、悪いけど少し待ってね」

分かりました、と返す榊は正面に座る楓に近くにあつた紙コップとポットを持って、

「飲みますか？」

「いただこうかしら。ちなみにそれ、私がこの間静岡で仕事した時に買った抹茶なんです」

「え、そうだったんですか。他人の物なのに凶々しくすみません」

「気にしないで、部長さんの電話が終わるまで、抹茶でも飲んで待つちやいましょう」

「……ダジャレがお好きなんですか？」

ええ、と躊躇うことなく頷く楓に対して、咄嗟に何かを返せるほど榊のボキヤブラリーは豊富ではない。

……これが部長さんの言つてた誤解が解けるつてやつなのかな。

確かに誤解は解けたと思う。だがそれは榊の思つていたものとはだいぶ違いがあった。

「そういうえば榊君、撮影前に私が言つた貴方に足りないもの。何か分かりましたか？」

「あ……、いえ、分かりませんでした。自分には足りないものがありすぎて、高垣さんの言つてる足りないものが何のことなのか見当もつきません」

「そうかしら。私から見れば、榊君に足りないのはその一つだけだと思うけど」

「一つだけつて、お世辞はよしてくださいよ。これでも身の程はわきまえてるつもりですよ」

自分はまだまだ足りないものばかりだ。歌やダンスはもちろんのこと、美意識やファッションセンスなど数を上げればきりが無い。

……まあそれは、これから頑張ればいくらかはマシになるだろうけどな。

こうしたポジティブシンキングが出来るのも、少しはアイドルに希望みたいなものを感じたからなのかもしれない。

だがやはりいくら考えても、楓の言う自分に足りないものが何なのか想像出来ない。最終的に榊は諦めたように項垂れて、

「やっぱり分らないです。まさかルックスとか言わないですよね？」

「私は榊君のルックスなら、アイドルとして充分やっていけると思えますよ」

「やめてください。高垣さんみたいな人に言われると、余計惨めになります」

あらあら、と今度は困ったように楓が苦笑を見せた。

どうしてそんな反応を返されてしまうのか。モデル顔負け、と言っても元モデルなので当然なのだが、モデル級のスタイルを備えてる彼女にルックスを褒められてもピンとこないのが本音だ。

何にせよ、自分が楓の求める答えを出せなかったのは事実のようだ。

「あらもうこんな時間。すみませんが、次の仕事があるので私はこれで失礼しますね」

「あ、高垣さん……！」

立ち上がろうとする楓に榊は反射的に声をかけていた。

「何でしょうか？」

「何って……、結局俺に足りないものって何なんですか？」

「ふふふ、知りたいですか？　でもだーめ」

立ち上がり、こちらを見下ろす彼女の瞳が榊の目にとまった。

よく見れば彼女の瞳は左右で色が違う。世間ではオッドアイと言うそうだが、榊は本物を始めて見た。

右の緑と左の青の瞳はとてもきらびやかで、人によつてはエメラルドとサファイアに例えるだろう。

しかし今の榊には、そんな幻想的な感想を持てる程心に余裕はなかった。

二色の瞳は、まるでこちらの外面と内面の両方を見られてるような気がしてあまりいい感じではない。

視線を逸らしたら失礼なのは理解しているが、無意識に目が泳いでしまつてるのは自覚がある。

そのわけをどう汲み取つたのか、高垣は小さく微笑んで、

「そんな嫌な顔しないで、私だって何も意地悪で教えないわけじゃないんですから」

「はあ……、それは分かっているんですけど、オーデイション明日なんですよね」

「それは私も知っています。でもこれは他人から言ってもらうより自分で気付いた方が、きつと得るものは大きいと思うんです」

そこまで言われては、これ以上こちらが求めるのは楽をしてるように思える。

押し黙る榊に楓は納得の色を浮かべ、

「あ、でも気をつけてくださいいね」

何かを思い出した楓が一度手を叩いて、

「それに気付けないと、恐らく明日のオーディションは不合格になってしまいますから」

「は？ 不合格って、それってどういう意味ですか」

「言葉の通りですよ。それじゃあ頑張ってくださいいね」

こちらに有無を言わず、楓はスタッフに挨拶をしてその場を後にした。

「電話が長引いてすまないね。おや？ 高垣君はもう行ってしまったか。彼女とはいい話が出来たかい？」

かわりばんこにやってきた今西に、榊は言葉を返す事が出来なかった。

それを不思議に思った今西はこちらの肩に手を置いて、

「高垣君には例の質問は出来たのかな？」

「例の質問……あ！」

すっかり忘れていた。だが彼女との会話は、アイドルになったきつかけよりも有意義



だったと確信している。

「してないわけじゃなくて、単に忘れていたなんて。彼女とどんな話をしていたんだい？」

「それは……、ただの世間話ですよ」

本当の事を話そうか悩んだが、即座に言葉を濁した。

楓が言っていた自分に足りないもの。多分今西もそれが何か分かっているだろう。

それを言ってくれないのを意地悪とは思わない。先程言われたように、それは自分で気付かないと意味が薄くなってしまおうのだろう。ただ、

……それに気付かないと、明日のオーディションは不合格。

それは一体どういう意味なのだろうか。それは歌やダンスなどの技術的なものではないだろう。

それだと残るはそれ以外のメンタル的なもの、

……やる気は、朝に比べたら結構向上してるよな。

なら、オーディションの結果に及ぶほどの自分に足りものは何だろう。

……やめよう……。

ここで考えても答えを見つけられそうにない。それに、撮影が終わったのにいつまでもいたら邪魔になってしまう。

そう思った榊はわざとらしく背伸びをしてから立ち上がり、

「でも、有意義な話は出来ましたよ」

「そうか、それならいいんだ。今日の見学は終わりだけど、榊君はこの後どうするつもりだい」

「特に予定もないので、今日はこのまま帰ろうかと思つてますが」

時計に目をやれば、時刻はまだ二時半を過ぎたばかりだ。

だから今日はもう帰つて楓の言つていた足りないものを考えようと思つていた。

しかし今西はこちらの予定を聞くと、じゃあ、と懐ろから何かを取り出して榊に差し出す。

何だ？ と受け取つてみれば、一つは明日のオーディションの通知文書だった。それには、明日の集合時間からオーディションの大まかな内容などが書かれている。

そしてもう一つは、

「これつて、入館証？」

ラジオ局で今西からもらった首掛けタイプのもと同じだった。

意味を問うように視線をよこすと、今西は携帯の入ってる胸ポケットを指差して、

「僕は仕事で戻らないといけないけど、よかつたら346プロダクションも見学しておくといいよ。明日のオーディション会場の下見も兼ねてね」

「見学つて、入館証があるからつて俺一人で大丈夫なんですか？」

「現場に入るのは難しいだろうけど、外から見分には問題ないさ。それに、入館証の中に僕が書いた承諾書みたいのが入ってるから、何かあつたらそれを見せればいいさ。最悪僕に連絡くれればいいよ」

「いいよと言われても、仕事に戻る人に迷惑をかける可能性があるのにのんきに見学していいものなのか。」

「……なんなら、何も見ないで返しちやえばいいか。」

それなら別に問題ないだろう。だから榊は受け取つた入館証を首にかける。

「終わつたら、入館証は受付に戻せばいいんですか？」

「うん。そうしてもらえると助かるよ。——それじゃあ僕は行くけど、明日はよろしくね。会場に十時集合だから」

「はい、お疲れ様です」

お疲れ様、と返して今西もその場を後にしていった。

もう一度椅子に腰掛け、明日の予定表を見て思い出す。

「あれ？俺まだ明日のオーデイション受けるか決めてないけど」

なんだか今西に言いくるめられたような気もする。

だけど今西に言われた時に何の違和感を持たず返答したのは、少なからずやってみた

いという興味が出たからだろう。

最初に比べてアイドルが現実味を増してる。そのことに榊は、先程楓に言われた事も忘れて口端がつり上がるのを感じていた。

## 六話 目つきが悪いのは自分も同じ？

今西と別れた榊が最初に訪れたのは明日のオーディション会場だった。

346プロダクション内の見学。今西に言われた時は特に何も見ずに帰ろうとも思っていた。

しかしよく考えてみれば、オーディション会場の下見ぐらいはしてもいいかもしれない。

オーディションは別館で行われるが、ここは階数がかなりある。考えたくないが、<sup>万が一</sup>迷子の事もあり得る。

それなら下見するのは決しておかしくない選択だ。高校受験の時にも、進路担当の先生が会場の下見はしておくと口酸っぱく言っていた。

……俺はしなかったけどね。

「……」

そう声を漏らして右側をみれば、明日のオーディション会場となる会議室がある。

耳を澄ましても音がしないので、きつと中は無人なのだろう。中に入ろうとは思わない。だがそうになると、当初の目的が早々に達成したことになってしまう。

後は入館証を受付に返して帰ればいいのだが、いざとなると勿体無く感じるのは自分勝手だろうか。

明日のオーディションに落ちればここに来る事も、ましてやアイドルに会う事など二度とないのだ。

……もう少しぐらいはいいかな。

そう思考をまとめた榊は歩を進めた。

行くあてはない。今は六階にいるので、とりあえずはこの階を見て回って、後は下の階を順に見ていこうと思ってる。

ほとんどの人が中で仕事しているのか、廊下を開いていてもすれ違う人は少ない。

中には榊のような男子高校生が社内にいる事に違和感を持った社員もいたが、首からさげてる入館証を見ると一応納得の色を示してくれた。

とにかく堂々としていなくてはならない。挙動不審な態度をしていると余計に怪しまれてしまう。

六階は一通り見終わったが、この階はだいたいが会議室の類で中が見えないため特にめぼしい場所はなかった。

幸か不幸か他のアイドルに会う事もなかった。

……この時間はみんな外で仕事してるのかな？

疑問を確かめるすべもなく、榊はとりあえず下の階へ向かった。



五階は先程楓が撮影していた階であり、あそこ以外にも何箇所か撮影場所があるようだ。

これだけあるなら一つは何かしらやってるだろう、そんな考えで回っているが、どこも片付けの最中で撮影をやってる所はなかった。

残すは奥の部屋のみ。だが、

……他が終わってるなら奥も同じだろうな。

大した期待もせずにその部屋に近づくと、意外にも扉の上では撮影中のランプの点灯している。

一体何の撮影だろうか、と扉の横に貼ってある紙を見れば、

……シンデレラプロジェクト取材写真……!

その文字に、榊は自身の鼓動がはつきり認識出来るほど早く、そして強くなっているのを感じていた。

この扉の向こうには、自分と仕事をするかもしれない人達がいる。その事実は榊の好奇心を大いにくすぐっていた。しかし、

……さすがに中に入るのは駄目だよな。

今西も中に入るのには難しいと言っていた。それに撮影中に突然入ってくるのはいくらなんでもマナー違反だろう。

幸いな事に、扉には小さな円形の窓がついていた。背伸びしなくても中を覗けるそこに、榊は自分の顔を近づけた。

……いた……。

確かにいた。スタッフ達のさらに奥側、そこに彼女達がいる。

数は十四人、初めて今西から彼女達の事を知らされた時に見た資料の通りその年齢層はばらばらだ。

様々な身長や髪型、そして雰囲気や醸し出しながら、しかし榊はある人の存在だけはつきりと視界に入っていた。

……島村先輩……。

集団のややや端の方、そこに彼女はいた。他の女性二人と楽しいそうに話をしている。本当にアイドルだったんだ、と至極当然の事を思った時だ。

「あ……」

一人の男性と目が合ってしまった。

スーツ姿から彼がスタッフではないのは想像がつく。なら一体誰なのか、そんな疑問



を抱くよりも早く、その男性はまっすぐこちらへと向かってきた。

遠目でもよく分からなかったがその人はかなり長身だった。そしてなによりも、  
……ちよつ、なんかめつちや睨んですけど！

一重の無表情が早足でこちらに来る。

どう見ても怒っている。逃げるべきか迷うが、逃げたら確実に怪しまれる。

もしかしたら不審者だと思われるほど追いかけられるかもしれない。早足でもあの威圧感なのに、走られたら恐怖体験以外の何物でもない。

だから紳はあえてその場に留まった。その姿は蛇に睨まれた蛙に例えられるかもしれない。

「あの――」

扉が開くのと声が聞こえたのはほぼ同時だった。

間近に見ると、威圧感が五割増しに感じるのは決して自分だけではないはずだ。

だが黙っているは何も始まらない。そう思った紳はとっさに口を開いた。

「ハ、ハ、ハ、ハにちは」

なぜそこで挨拶なんだ、と自分の発言ながら呆れる。

眼前の男性も面食らった表情を見せる。しかしすぐにあの無表情に戻すと、

「ハ、ハ、ハ、ハにちは。関係者の方……、ではないようですが」

「はい。あの、これ」

榊は言葉で説明するより今西の書いた承諾書を渡すのを選択した。

男性の正体は依然として分からない。しかしあの場にいたということとは、何かしらの形でシンデレラプロジェクトに関係しているに違いない。

なら言葉よりこの紙の方が意味を持つ。そう榊は判断した。

榊から紙を受け取った男性は中身を確認すると、さらに驚きの表情を濃くした。しかし今度は納得の色を示して、

「貴方が……」

どうやら彼は自分の存在を知っていていてくれてるようだ。

「はじめまして、榊和巳です」

「はじめまして、シンデレラプロジェクトのプロデューサーをしています。武内と言います。

今はお一人なんですか？」

「部長さんは仕事があるから何処かへ行ってしまうました。まだ時間もあるから社内を見学してきなつてこれを」

そうですか、と武内は悩み事をしてるのか首に手を当てた。

そして決心したように頷くと、

「よかつたら見ていきますか？ 彼女達を」

予想外の申し出に、榊は目を丸めた。

「え、いいんですか？　一応俺、明日のオーディション受ける可能性があるのにその前に会っちゃって」

それは他の人達と不公平になってしまいう気にもする。

だが武内は、構いません、と前置きして、

「決まってるわけではないならただの見学です。それに、おそらく部長さんもこうなる事を見越して榊さんにこれを渡したんだと思います」

言われてみれば、今西ならここで宣材写真の撮影をしてる事は知っていたに違いない。

そしてここは、先程まで今西や楓といった現場と同じ階なのだ。

……こうなるのが分かってたんだらうなあ。

自分だけでなく同じ職場の武内が言うなら、きっとそういう事なのだろう。

「俺が行っても邪魔にならないですか？」

「見学なら特に問題はありません。さあ、どうぞ」

武内は扉を開いて促してくれるが正直まだ戸惑いはある。

彼女達が自分を見た時にどんな反応をするのかすごく不安だ。

十四人の女の子にただ一人の男の子入るのに、それが可能性としても自分になるか

もしれない。

自分が彼女達だったらどう思うだろうか。

「どうしましたか？」

武内の声に意識を戻すと、目の前で彼がまた首に手を当てて、

「気がすすまないなら、無理にとは言いませんが」

「いえ、ちよつと考え事をしていただけです」

考えるのもうよそう。

もし彼女達に微妙な反応をされたのなら、明日のオーディションを諦めればいいだけの話だ。

それに、今ここで彼女達を避けたところで何も変わらない。

そう割り切つて、武内が開いてくれる扉に櫛は足を向けた。



中は楓の時より賑わっており、入った瞬間に彼女達の話し声が聞こえる。

宣材写真のためかセットは簡素だ。しかし十四人分の撮影となるとそれなりにスペースを確保している。

彼女達に近づくと、まず近場にいた二人がこちらに気付き側までやってきた。

一人は長い金髪で、いかにも今時のギャル風の身なりだ。

そしてもう一人は、ミディアム程度の黒髪をツーサイドアップにしている明るそうな女の子。

二人とも櫛より幼く、小中学生くらいだろうか。

「ねえP君、その後ろの人誰!」

「もしかして、新しいお友達かな?」

開口一番に大声で言われ、周囲の視線は一気にこちらへと向かってきた。

それは他の彼女達も例外ではない。みんなが一樣に誰? と首を傾げたり隣と人と話したりしている。

しかしその中で、卯月だけはこちらの存在に気付き目を丸くしている。

……島村先輩、俺の事覚えてくれてたんだ。

とりあえず卯月に対して軽く頭を下げると、相手はわざわざ踵を合わせて深々と頭を下げてきた。

両隣の女の子が卯月に話しかけているが、多分あの人が知り合いなの? と聞いているのだろう。

「落ち着いてください。今ご説明しますので。——みなさん、ちよつと集まってもらってもいいですか?」

武内が二人にたじろぎながらも声をかけると、彼女達はすぐに集まってきた。

半円状に並んだ彼女達に武内は一步下がってこちらを押し出すようにして、

「撮影ですが、今日はこちらの榊さんが見学する事になりました。みなさん仲良くしてください」

「Pちゃん、みくは別に見学は構わないけどその子誰にや？」

武内からの紹介に、猫耳を付けたシヨートヘアの女の子がこちらを指差してきた。

語尾にやと付けたたり、頭に猫耳を付けたりとなかなか個性の強そうな子だ。

……あれだな。菜々さん程じゃないけど、似たようなもんだな。

それなら何も問題ないと思えるのは、きつと菜々のおかげに違いない。

「彼は明日のオーディションに参加するかもしれない人です」

武内がそういうと、おお、という声と共に周囲の関心はさらに強くなっていく。

想像してたより反応は悪くない。その事に榊は胸をなでおろす。

ここで一人でも渋い顔をされたら、きつと自分は回れ右をして帰っていただろう。

「ではみなさん、撮影の方に戻ってください」

武内の指示にそれぞれが返事を返して戻っていった。

……これが、部長さんの言っていたシンデレラ達か……。

シンデレラというだけあって素人の自分が見ても、全員がアイドルとしての素質が十

分なのは分かる。

彼女達とこれからアイドルをしていく可能性があると考えると、それだけで胸が熱くなる。

段々と心が高揚してきている。それを自覚して榊は武内の後をついていった。



武内とカメラマンの後ろにいた榊へ最初に話しかけてきたのはあの幼い二人だった。

ツーサイドアツプの女の子が嬉しそうに両手を上げて、

「こんにちは！ 私赤城みりあって言うんだ。よろしくね！」

「こつちこそよろしく、赤城さん。さつき武内さんも言ってたけど、俺は榊和巳っていうから」

「みりあでいいよ！ ねえねえ、和巳君って、私達の王子様になるかもしれないんだよね。すごいね！」

……すごいのはその年でアイドルになってる君の方じゃないかな。

目を輝かせながらこちらを見上げるみりあに榊は微笑を見せるのが精一杯だった。

すると、今度は隣の金髪の女の子が人差し指をこちらに向けて、

「でも、このカリスマガールアイドルになる私の王子様としては、ちよつと顔がイマイチ

かな」

顔に自信がないのは違いないが、こう面と向かって言われるときさすがに応えるものがある。

「莉嘉ちゃん、そういう事言ったら駄目だに」

三人の会話を割って入ってきた人物。声したのはみりあ達の後ろであり自分よりも上の方、そちらに顔を向けたら、

……うお、大きいな。

自分の身長は百七十ぐらいいはあるが、それよりも頭一つ分高い。

確実に百八十は超えている。女の子でこれほどの高身長は滅多にお目にかかれない。

武内に負けず劣らずの高身長にも関わらず、彼女には武内ほどの威圧感を感じなかった。それが彼女の服装によるものだと、榊はすぐに検討がついた。

パステルカラーを基調とした可愛さを重視した服装と腰まである軽くウェーブのかかった髪。何より愛嬌ある笑顔が彼女の人柄を表している。

武内の時とは違ってなるべく愛想よく笑みを見せて、

「はじめまして、榊和巳です。今日はよろしくお願ひします」

「おにゃーしゃー。諸星きりだに。それでこつちが——」

そう言つてきりりが下から持ち上げたのは、



「双葉杏ちゃんだよ！」

もう一人のアイドルが出てきた。

かなり小柄なためみりあ達の後ろにいる事に全く気づかなかった。

それより榊の目を引いたのは、

……働いたら負け……。

白のTEEシャツのど真ん中にプリントされたその文字に、杏の人間性を見た気がした。

「脱力系……?」

疑問を投げかけると、きらりに抱えられた杏は面倒そうにこちらを見て、

「無気力系」

「アイドルにあるまじき発言だな」

「事実だから仕方ないでしょ。それに頑張ったって疲れるだけだしね」

ここまで堂々と言われてしまうと寧ろ清々しいとさえ思えてしまう。

周囲を見渡しても他の子達は撮影を楽しみにしていたり緊張していたりしてるが、杏だけはそれとは別の無関心に近いものを感じる。

これが彼女のスタンスだとするなら、それをアイドルとして売り出そうとしている

346はやはり悔れない。

アイドルとしては異質の存在に、榊は物珍しく視線を送っていると、

「すみません！ それではそちらの四人から撮影お願いします！」

スタツフさんの声はこちらへ向けられていた。

すると真つ先にみりあが、はーい！ と返事をして、

「じゃあね和巳君！ 終わったらまたお話ししようね！」

こちらの返答を待たずにみりあは駆け足で向かっていく。

「あ、みりあちゃんずるい！ 私が最初だよ！」

みりあに追いつこうと、莉嘉は走って後を追う。

「みりあちゃんも、莉嘉ちゃんも、走ったら危ないよ！」

「私は置いてつていいよ」

「駄目だよ。杏ちゃんも一緒に、撮影するんだにい」

そう言つて最後に、杏を抱えたきらりが二人を追う。

置いてけぼりとなつてしまった榊は周囲を見渡した。すると、

……あ、いた。

榊の左前で、卯月が他の二人と会話していた。こちらの視線を感じ取つたのか、卯月もこちらを見た。

視線が交わつたその瞬間、相手は目を逸らしてきた。

理由は分からない。視線を逸らされるようなことをした覚えもない。ただ卯月を見ていただけ。本当にそれだけだ。

……もしかして、俺の目つきがよくなかったのか。

可能性としては十分あり得る話だ。榊だって武内に見られた時、その鋭い目つきから目を背けてしまった。

話しかけに行った方がいいのか。お互いに顔見知りなので話しかけに行くのは別におかしな事ではない。

それでも目を逸らした相手に近寄るのは、さらに卯月の気持ちを害してしまうのではないだろうか。

……島村先輩に避けられてるなら、ゲームオーバーだろうな。

どうしたものかと榊は頭を悩ませる。すると、現場に乾いた音が連続した。

それはローファーが床を蹴る音であり、同時に卯月がこちらに近づいてる音でもあった。

「あの……！」

こちらに声をかけてくれるのを聞いた榊は再度卯月と目を合わせる。

赤面というよりは紅潮している頬を見て榊は、

……どうやらコンティニュー可能みたいだ。

そう思い、また頭を下げた。

## 七話 一週間ぶりの先輩はサインが苦手

「この間は、本当にすみませんでした！」

一週間ぶりに会った卯月から開口一番に謝罪の言葉が出てきたことに、榊はぼかんとした表情で相手を見ていた。

何を謝っているかは分かっている。おそらくは入学式での出来事に対してだろう。

……もう気にしなくていいのに。

謝罪の言葉ならあの時既にもらっている。榊としてはそれで十分なのだ。

卯月の性格として謝らずにはいられないのかもしれないが、一週間前の事を言われてもなんとも思わない。

だから榊は微笑で手を振って、

「気にしないでくださいよ。もう一週間も前の事じゃないですか」

「そうですけど、私後でお詫びするって言っていたのに何も出来なくて……」

あの言葉を卯月が覚えていたは意外だった。

それも仕方ない事だと榊は思った。なぜなら、

「それも大丈夫ですよ。島村先輩はアイドルなんですから」

「アイドルとか関係ないですよ。私が迷惑をかけたのは本当ですし、それなのに何も出て来ないんですもん」

入学式の時でもそうだったが、卯月は基本的には優しい性格だ。しかしそれが仇となっているのか、かなり頑固な性格にも感じられた。

これは何かしないと話が進まない。そう察した榊はバックからマジックとノートを取り出して、

「それならせつかくなので、これにサインもらってもいいですか？」

「え！ サインですか!? でも私サインなんて書いたことないですから上手くないですよ」

「別にいいですよ。俺だって色紙じゃなくてノートですし、練習のつもりでどうぞ」

そう言ってノートを差し出すと、卯月は渋々それを受け取った。そしてゆっくり、というよりはぎこちない動きで文字を書いていく。

世間ではペンを走らせるという言葉があるが、卯月のそれはどう見てもペンを歩かせてるようだった。

しばらくしてペンの動きが止まった。書き終わったと思い榊が手を伸ばそうとする  
と、

「……………」

無言でページをめくられた。そしてまたペンを動かす。

どうやら最初のサインに納得がいかなかったらしい。急いでるわけではないので、榊は黙ってその様子を眺めていた。

「……………」

「……………」

サインを書き終えてはページをめくり、またサインを書き終えてはページをめくるというループが五周目を終えたところで榊はたまらず、

「島村先輩……？　そろそろいいのでは……」

「も、もう少し待ってくださいね！　いいサインが書けるように頑張りますから！」

「いや、今は頑張らなくてもいいんじゃないかと……」

こちらの発言などお構いなしに卯月は黙々とノートにサインを書き続けている。

一生懸命なその姿はとても微笑ましい。だがいつまで続くか分からないこの時間は、待っている榊としては段々苦行に感じてくる。

サインループがとうとう二桁を超え榊の集中力も尽きかけてきた頃、

「卯月、そろそろ止めてあげないと」

「そうだよしまむー。彼も待たされて困った顔してるよ」

先ほどまで卯月と話していた二人がこちらに加わってくれた。

そう言われると卯月はたいそう驚いた顔をこちらに向けて、

「すみません！ 入学式の時に続いてまた迷惑をかけちゃって！」

「大丈夫ですよ。急なお願ひしたこつちが悪いんですから」

「いえ！ 上手く書けなかつた私がいけないんです。今度は上手く描けるようにしておきますから」

「じゃあ俺も、その時までには色紙用意してますんで楽しみにしてます」

なんだか締まらない形となつたが、とりあえずは一つの区切りをつけることが出来た。

榊は改めて二人を見た。すると先に長髪の女の子が軽く頭を下げて、

「はじめまして、渋谷凜だよ。よろしく」

「よろしく、榊和巳です」

「さつき卯月から話は聞いてるから知ってるよ」

口調が若干冷たく感じるが、それは無意識なもので悪気がないのはなんとなく分かる。

すると、隣の見るからに元気つ子の女の子がこちらの肩を勢いよく叩いて、

「いやあ、階段から落ちそうになるしまむーを助けるなんて、まさに王子様って感じだね！」



「あ、うん。ありがとう。えっと……」

「私本田未央っていうんだ。気軽に未央ちゃんって呼んでもらって構いからね、かずみん」

「か、かずみんって俺の事？」

「そう。和巳君だからかずみん！ なかなかセンスあるでしょ」

ドヤ顔で言われても、あだ名をつけたこともつけられたこともない榊にはセンスがどうとかは一切分からない。

あだ名をつけられるのは嫌われていないということだと思い、榊はそうだね、と同意を示した。

……部長さんの言う通り、みんなそれぞれ違うなあ。

至極当然のことが頭をかすめ、榊は視線の奥で撮影を続けるきらり達を見た。そんな榊を卯月達は見て、

「どうかしたんですか？」

三人を代表して卯月が問いかけてきた。

「何というか、今すごい不思議な気分なんです」

感慨深く、それでいて夢見心地のような気分です、

「ついこの間……、いや、昨日まではただの高校生だったはずなのに、今はこうしてアイ

ドルになるチャンスをもたらしてる。しかもそこには島村先輩もいて、それ以外のみんなもとても魅力的で——」

なかなかくさい台詞を言っている。それを自覚しながらも榊は言葉を止めるつもりはない。

テンションが上がってるせいもあるだろうが、何より彼女達に聞いてほしいのだ。自分の考えの変化を。

榊は改めて周囲のシンデレラ達を見る。そして納得を深める頷きをして、

「はじめてアイドルの話をもたらした時には自分には無理だと思ったし、アイドルになりたいとも思わなかった」

「でも今は違うんですね？」

卯月からの問いかけに、榊は自信をもって頷く。

「今もアイドルに向いてるかは疑問じゃないです。でも、今日はちよつとだけアイドルの仕事を覗いて、何よりここにいるみんなを見て確信したんです。向いてるかどうかはとりあえず置いて、アイドルという夢舞台に挑戦してみたいって」

そうだ。決断出来たのは今西の言葉でも今までのアイドル達の言葉でもない。それらはきつかけにすぎない。

シンデレラの<sup>彼女</sup>、アイドルへの一步を踏み出そうとしているその姿を見て、彼女達と

アイドルをしてみたと思ったのだ。だから、

「俺、明日のオーディション受けます。受かる確率は低いかもしれませんが、それでも全力でオーディションに挑んで、島村先輩達とアイドルやってみたいです」

全てを言い終えて、榊は身体が熱を持ちはじめてるのを感じていた。

かなり恥ずかしい。そもそも卯月達にこの事を言う必要はどこにもなかったのではないのか。

しかし卯月達は、こちらの不安を一掃するように笑顔を見せて、

「はい！ 私も榊君とアイドルできるように頑張ります！」

「卯月が頑張っても仕方ないでしょ。オーディション受けるのは彼なんだから」

「そうだよしまむー。それにかずみんアイドルとしては顔がイマイチだから、明日のオーディションは厳しいでしょうなあ」

未央、と凜が睨みをきかせる。

こちらを氣遣つてくれている。それを嬉しく思いながらも榊は苦笑いを浮かべる。

……まあ事実だから仕方ないよな。

本気でアイドルを目指すと言っても、アイドルとしての容姿はイマイチという自覚はある。

自惚れるつもりはない。だけどそれぐらいで諦めるつもりもない。

アイドルに求められているのは容姿だけではないと思いたい。何より、こんな自分をスカウトしてくれた今西の判断を信じたい気持ち強い。

「いいんですよ。ルックスが微妙なのは自分だってよくわかってますから」

「うんうん。かずみんはしっかり自己分析ができてえらいねえ」

「未央、そろそろおふぎけ止めないとプロデューサーに言いつけるよ？」

ちよつしぶりーん、と凛に泣きつく仕草を見せた未央は、しかしすぐにこちらを見て、「でもかずみん、私どうせ一緒に仕事するなら、ただのイケメンより一緒にいて楽しい人がいいから！」

「わ、私もそう思います！」

「そうだね。あんまり気難しいところちもやりづらいしね」

その言葉がこちらへの気づかいではなく彼女達の本音であるのは分かる。

だがその場合、果たして自分は一緒にいて楽しいと思われているのだろうか。

……こんなの一言二言の会話じゃ判断できないよな。

それでも気になってしまうのは、やはり不安が頭をよぎっているせいだろう。

小心者だな、と思う榎の目の前に突如木の箱が差し出された。誰だ？ とその木箱の持ち手を見ると、

「クッキー焼いてきたからよかつたら食べて」

「え、うん。ありがとうございます。いただきます」

シヨートトヘアーの女の子に促されるままに、榊は木箱の中にあつたクッキーを一口に含んだ。

「あ、おいしい……」

「本当?!? よかつたあ、卯月ちゃん達も食べてね」

わあい、とお菓子に群がる様子を見る限り、やっぱり彼女達も普通の女の子なのだ実感する。

そこでふと、榊はお菓子をもってきた女の子の後ろにもう一人いるのに気づいた。

薄い黄緑色のワンピースを着たツインテールの女の子は、榊の視線に気づくと慌ててお菓子を持った女の子の背後に隠れてしまった。

……あれ?　なんか俺避けられてね?

卯月の時もそうだったが、自分は特に悪いことをしたつもりはない。ただ卯月の時は違って、完全に今は怯えてるように見える。

まるで小動物、それももうさぎのような反応を示す彼女に榊が困惑した表情を浮かべていると、お菓子を持った女の子がこちらの不安を感じ取ってくれて、

「ごめんね、この子緒方智絵里ちゃんっていうんだけど、人より少し恥ずかしがり屋なの。あ、私は三村かな子です。よろしくね」

「はあ……、榊和巳です。よろしく」

「よろしくね和巳君。ほら、智絵里ちゃんも挨拶しないと」

かな子に促され、その背中から智絵里が恐る恐る顔を出してくれた。

こちらに警戒心全開の彼女は決してこちらには視線を合わせず、

「緒方、智絵里です……。よろしくお願いします……」

「うん。よろしくね緒方さん」

そう言つて握手しようとして手を差し出すと、智絵里はそれこそ手を差し出されたうさぎのようにかな子の後ろに隠れてしまう。

脱兎の如く隠れた事に、榊もシヨックを隠せない。ゆっくりかな子へと顔を向けて、

「これ、どうみてもアウトなやつですよね？」

「ち、違うよ！ 恥ずかしがり屋だから！ ね、智絵里ちゃん？」

「……………」

……否定してくれないじゃないですか。

「すみませーん！ 次の人達お願いします！」

「は、はい！ ごめんね和巳君、次私達の番なんだ」

「いえ、順番なんですからお気になさらず」

「また後でね。ほら智絵里ちゃん、撮影頑張ろ」

そう言つてかな子は智絵里を連れて行つてしまつた。

……本当に、嫌われてないのかな……。

しかし智絵里の様子から、彼女が極度の人見知りなのは疑いようがない。

ならきつと、自分のことも嫌いではないのだろう。そう割り切ることにしたし、その方が楽に決まつている。

「それじゃあ私達も行きますね」

そう言う卯月に対して、榊ははい、と返事をしてから慌てて頭を下げた。

「サインありがとうございます。これ、大切にしますから」

「いえー！ 今度は上手く書けるようにしておきますから。なんなら捨てちゃつても構いませんよー！」

「いや、そんなことするわけないじゃないですか」

ノートを開いてみると、そこには卯月の名前が何ページも書かれている。

それはサインと呼ぶには程遠く、書いてるのを見ていなければ島村卯月と書いてあるのかさえ疑わしいレベルだ。それでも、

「形はどうあれ、これは島村先輩が俺のために書いてくれたことには変わりはありません。それを俺はとでも嬉しく思いますし、それは形で判断できるものじゃありません。だから、俺がこれを捨てるなんてあり得ませんから」

「榊君……」

「ちよつと、クサイセリフでしたかね？」

照れ笑いとともに言う榊に、卯月は大きく首を振る。

「いえ！　すごく嬉しいです。それじゃあ私もすぐ上手に書けるようになりますから、それまでそれは榊君が預かっていてください」

「ええと、ここは待ってますって言った方がいいんですよね？」

はい！　と満面の笑顔で頷く卯月を見て、榊は逆に自分が恥ずかしくなる感覚を得ていた。

……やっぱり島村先輩の笑顔はいいなあ。

入学式の時も思ったことだが、彼女の笑顔は純粹無垢の文字がびったりなほど自然なものだ。

たかが笑顔。誰にでもできるはずのそれが、卯月がやるとそれだけで立派な個性として成り立ってしまう。

才能、という少し語弊があるかもしれない。しかしあの笑顔が簡単にできるものではないのは間違いなかった。

こそばゆい感覚を内に残したまま、

「撮影、頑張ってくださいね」



「はい！ 島村卯月頑張ります！」

最後にそう言い残して卯月は走り去ってしまった。

「ねえねえかすみん。ちよつとそれ貸してくれない？」

いつの間に隣まで来ていた未央が紳の袖を引っ張ってくる。

なんだろうと思いつつも、断る理由もなかったため言われた通りにノートを渡した。

すると、どこから取り出したのか、サインペンでノートの一ページに何かを書き込み始めた。そしてわずか数秒後、

「はい完成！ 未央ちゃんの自信作」

そう言って返されたノートには、ローマ字で本田未央と書かれていた。それもただローマ字で書いているのではなく、MとHを同じ文字として書いていたり、Oを星型で書いていたりと未央のこだわりが見て取れた。

これが卯月のサインのすぐ隣に書いてあるのだから、なおさらサインの完成度が高く見えてしまう。

「本田さんのサインはこつてて上手ですね」

「えへへ、私アイドルを目指すって決めてからサインはずつと練習してきたから。それと、私のことは名前プラス呼び捨てでいいんだからね。同い年なんだし、そういうかしこまったの嫌いだから」

「ああ、うん。次からは気をつけるよ、未央……?」

若干疑問形になってしまふのは恥ずかしさのせいだと割り切る。

こちらが名前で呼んだのに満足したのか、未央は最後にとびっきりの笑顔をみせて卵月の後を追った。

そうなるとその場に残っているのは榊と凜だけとなる。流れから凜も撮影に入る可能性は十分にあり得る。

しかし凜はなかなかあちらに行こうとしない。まだ凜の順番ではなかったのならそれでいい。ただ、

……なんか気まずいんですよねえ。

榊は自分自身を他人に対して自分から積極的に話しかけていくタイプではないと思っている。おそらくそれは凜も同じ気がする。

そんな二人が同じ場所にいれば、自然とだんまりしてしまうのも仕方ない。

だからといって、こちらが別の場所に行くのは相手に失礼だろう。

遠くで撮影に苦勞しているかな子と智絵里を見ながら、何の話をふればいだろうと頭を悩ましていると、

「榊……君はさ」

「何ですか? 渋谷……さん」

向こうから声をかけてきた。

お互い歯切れが悪いのはまだ打ち解けてないからだろう。

「あのさ、なんでそっちはアイドルになろうとしたの？」

「え？ 俺……？」

それは予想外の問い掛けだった。今日きいていこうと思っていた質問をまさか自分にされるとは思ってもみなかった。

どう答えるべきか。ここで素直に話してしまってもいいのだろうか。そんなことが頭をよぎっていると、

「私はさ——」

また先に言われてしまった。

視線を合わせようとはしない。そうすると話しづらくなる気がするから。

「あそこにいるプロデューサーにスカウトされて、最初はやるつもりなんてなかったんだ」

「そうだったんですか」

……なんだか自分と似てるな。

だがそう口をはさまない。今は凜が話してる番なのだ。

「高一だけどアイドルなんて興味なかったんだ。プロデューサーは笑顔がいいとか言っ

てくれたけど、私はそうは思わなかったんだ。もともと笑うのが苦手だったしね。

それでもプロデューサーは差し伸べてくれたんだ。アイドルには、私が夢中になれる何かがありとあるって。だから、今はまだよくわからないけど、アイドルをやってみようって思ったんだ」

「……………」

榊はどの言葉を返すべきか悩んでいる。自分が想像していたよりも、凜とは境遇が似ているのだ。

考えてもいなかった世界にいきなり誘われて、その理由も納得できるものではない。それでも、次第に心の内でやってみたいという思いは強くなっていく。

運命なんてロマンチックなことを言うつもりはない。ただ偶然にしてはよくできているとは思った。

「俺はさ——」

だから榊も口を開いた。その始まりは凜と同じもので、

「オーディションには参加するけど、別に俺が自分で応募したわけじゃないんだ。知り合いが勝手に応募してて、それがたまたまここまで受かっちゃってさ」

それは藍子達にラジオで話していたことだ。

少し偽った、しかし榊にとっては事実の話を淡々と続けた。

「後でその人になんで俺を応募したのってきくと、その人は思いやりがあるからって答えたんだ。はじめそれを聞いた時は拍子抜けだけだったよ。そんなのは誰にでもあるものだし、それ以外は特にないみたいなんだもん」

「それで、榊君は納得したの？」

「どうだろう、とりあえず割り切ってはいるけど、本心はまだ納得してないだろうな」

でもさ、と榊は軽く目を閉じた。

まぶたの裏には今日の出来事が再生される。

「ある人はアイドルには自分の心を熱くする何かがあるはずって言った。ある人はアイドルは怖くないものだとか教えてくれた。それである人は、言葉とかはなかったけど、とにかくすごいと思った」

そう、今日出会ったアイドルの人達は皆自分がアイドルになるのを進めてくれた。なにより、

「そのアイドル達の誰一人、俺がアイドルになろうとしてることに否定しなかったんだよなあ」

「否定してほしかったの？」

どうだろう、と曖昧な返事を返しながらも思うところはあ

誰も否定しなかった。だからこそそこにいるわけで、もし誰か一人でも向いてないと

言ってくればきっぱり諦めることもできたのにと考えるのはずるいだろう。

ゆつくりまぶたを開けば、これからアイドルになろうとしている彼女達がいる。理由はきつとばらばらのはずだが、目指す場所は同じはずだ。

「まあ何が言いたかったっていうと、俺もだいたい渋谷さんと同じ理由だつてことだよ」「ふうん。なんだか私達つて似てるね」

「そんなことないさ。渋谷さんは誰が見ても美人だつてわかるけど、俺はイケメンとかじゃないからね」

自虐気味に言うのと、凜の眉間にシワが寄っているのが見えた。

「もしかして未央の言つてたこと気にしてる？ 悪気はなかったと思うんだけど」

まさか、と凜は否定してみせる。

「さつきも言つたけど、アイドルとしてルックスが微妙なのは自覚してるからね。でもアイドルに必要なのはルックスだけじゃないはずだから、俺は他のところをアピールして頑張るつもりだよ」

そっか、と素っ気ない返事を最後に、凜はまた黙り込んでしまった。

印象が悪かっただろうか。だいぶネガティブな発言が目立った気もする。

だがそれは事実だと考えている。それ以外に言葉が出てこなかったし、出てくるとも思わなかった。

また沈黙が続くのかと思った。その時だ。

「凜ちやーん、どうしたんですか？」

「しぶりーん、もう私達の撮影始まるよ！」

「うん。すぐ行くよ」

凜が呼ばれていることに榊は素直に驚いた表情をつくった。ここに残っていると  
うことは、てつきり撮影は後だと思っていたからだ。

こちらの顔を見た彼女は、照れ笑いにも見える微笑をみせて、

「ちゃんと話してみたかったんだけど、未央がいるとまた茶化してきそうだったから」

「それはいいけど、なんで俺と？」

凜の興味を引くようなことでもあっただろうか。困ったように頭を掻くこちらに対  
して凜は、

「なんでだろうね？」

どうやら凜もはつきりとはしていないらしい。

その気持ちはわからなくもなかった。理由は特になくてもしてみたい、それは誰にで  
もあることだ。

榊自身も特に理由はなかったが社内を回っていたら偶々ここに辿り着いたのだ。

だから榊はそっか、と簡素な返事をした。

「でもね——」

凜が初めてこちらと視線を合わせてきた。

まだ幼さの残る、それでいて強い意志を感じる顔立ちはまるで楓のようだと思った。

……高垣さんって確か二十五歳だから、十歳ぐらい歳が離れてるのか。

なら凜も、十年後は高垣さんのようになってるかもしれない。その素質は十分にあ  
るように思える。

……でもまあ、ダジャレは言わないだろうな。

そんな感想を持った榊に、凜は満足そうに頷いて、

「話してよかったとは思ってる」

「そうかい？　あまり大した話は出来なかったと思うけど」

「そんなことないよ。私って結構動機がみんなと違ってたから、榊君のように似た人が  
いるとすごく安心する」

「引き目でも感じてるの？」

「そういうわけじゃないんだ。ただ、ちよつと思うところはあつてね……」

そう言われてみればそうかもしれない。スカウトされる子は多くても、そのことに喜  
びを感じないのに続ける人は珍しいだろう。

最低でも、シンデレラプロジェクト内ではそういった子は凜くらいしかいないかもし



れない。

それは捉え方によっては、アイドルに対する情熱がみんなとは違うと思ってしまうだろう。

考えすぎと言ってしまったえばそれつきりだが、こればかりは凛の考え方の問題で、いくら似た境遇とはいえこちらがとやかく言うのは筋違いに他ならない。

でも、

「別にいいんじゃない。動機なんてなんでも」

「え……？」

つい口を挟んでしまう。

凛が何か言っただけと望んでいるように思えたから。たとえそれが気のせいでも別に構わない。だってそれは、自分自身に言っただけでもあるのだから。

「そりゃあ俺と渋谷さんはみんなとは動機が違うかもしれないよ。

シンデレラプロジェクトの中には島村先輩みたいに前からアイドルに憧れていた人だっただけだろうし。

でもさ、動機はしよせん動機じゃん。それが他の人とは違うからって努力しないわけじゃないんだし。それとも渋谷さんは、みんなとは動機が違うからって手を抜いたりするの？」

「そんなことするわけないじゃん」

「だったら尚更だよ。プロデューサーだって渋谷さんがアイドルになった以上動機は過去でしかないし、それよりもアイドルとしてのこれからの重視してるんじゃないかな」  
今日は色んな人に諭されたせいも、自分の口調も若干生意気に感じる。もしかしたら、他人に諭そうとしている自分に酔っているのかもしれない。

アイドルじゃない俺がいうのもあれだけどね、と付け足すが、凜はその部分を聞き終えるよりも早く頷いて、

「ありがとう、やっぱり話してよかったよ。榊君の長所が思いやりって言った人の気持ちがあわかった気がする」

「そうかい？ 俺としても唯一の取り柄だと思ってるから褒めてもらえるのは素直に嬉しいけど」

「だけどそれだけじゃ多分駄目だろうから明日は頑張つてね。榊君と仕事できるの楽しみにしてるから」

それだけ言つて、凜は駆け足で卯月達の元へ行ってしまった。

……やっぱり足りないものがあるのかな。

それは奇しくも楓と言つていたことに近かった。意味まで同じかは定かではないが、結果は同じなことに変わらない。

わざとらしく説教する未央に苦笑いする凜を見て、榊はまた頭を掻いた。

## 八話 猫耳とロッカーはにわか？

「ちよつといいかにゃ？」

凜を見送った榊に真つ先に声をかける人物がいた。

自分に話しかけるなんて誰だとも思ったが、語尾に「にゃ」とつけるアイドルなんて、榊の記憶の中では一人しかいない。

榊は声の主に努めて笑顔をつくって、

「何か俺に用ですか？ 猫、さん……？」

「なにや、その馬鹿にした感じは。みくは前川みくにゃ」

いい年して猫語を使ってる人を馬鹿にするなという方が難儀ではないだろうか。

……菜々さんはそう感じなかったんだけどなあ。

菜々の場合はあの年であれだけのことを真面目にやれている。見た限りでは高校生が猫耳付けてとりあえず語尾に「にゃ」とつけてるみくと比べると、菜々さんは尊敬に値するかもしれない。

……設定に対しての菜々さんの認識が甘い気もするけどね。

だがきつと、ファンにとってはそこがまたいいのだろう。

菜々への尊敬を再確認したところで、榊はみくに苦笑を見せて、

「ごめん、悪気はなかったんだ。ただ前川さんと似たアイドルに会ったからつい」

「みくと似てるアイドルって、もしかして猫ちゃんアイドルかによ!?! それは困るにや、これはみくだけの個性にや!」

……被るのを気にしてる割には、キャラが安易じゃないですかね。

しかしそれを言うと、みくはくつてかかりそうな予感がする。キャラの設定はともかく、この場でも猫語を使うあたり、それなりにこだわりを持っているのだろう。

……そういう意味では菜々さんに似てるんだよな。

榊はみくのような性格は苦手な方だ。生意気とまではいかなくとも上から目線に感じてしまうその態度が、榊はあまり好きじゃない。

だからって毛嫌いするわけではない。あくまでみくの性格は苦手なだけで嫌いではないのだから。

そう自分に言い聞かして、榊は口を開く。

「そういうわけじゃなくて、前川さんと同じくらいキャラを大事にしてる人でさ。安倍菜々って言うんだけど、よかったら覚えておいてよ」

「安倍菜々……? よく知らないけど頭には入れておくにや。——って、そうじゃなくって」

みくは頭を左右に振ると人差し指をこちらに向けてくる。

そういうえば、みくは榊に用があるから話しかけてきたのに話が脱線していた。一体なんの用だろうかと思う榊に、みくは威圧的な視線を送ったまま、

「猫ちゃんとわんちゃん、どっちが好きにや!？」

「……………は?」

あまりにも拍子抜けな質問に、それこそ榊は相手を馬鹿にするように聞き返してしまつた。

「だーかーら! 猫ちゃんとわんちゃんのどっちが好きかきいてるにや!」

「え、ああ……、猫か犬ですか……」

どうしてこのタイミングでその質問をしてくるのか。榊には全く理解できなかった。そもそもこれだけの猫キャラが目の前にいたら、その質問をされても答えを迫つていくようにしか思えない。

だから考える仕草を見せず即座の回答として、

「俺はどっちかと言うと犬派かな」

相手が望んでいるものと逆のものを答えた。

「な、なんで猫ちゃんじゃないにや!」

「なんでって、単純に猫より犬が好きだから」

「ありえないにゃ！ 猫ちゃんの方がキュートで可愛いにゃ！」

みくが怒鳴ったことで周囲の注目が一気にこちらに集中している。はたから見れば、自分がみくに怒られているように見えるに違いない。

……可愛いとキュートは同じじゃないのかな。

自分にしては珍しく周囲の視線を気にせず呑気な事が頭に浮かんでいる。ただそれを素直に言うのと、また眼前の猫が毛を逆立てるかもしれない。

榊はなるべくみくを刺激しないように言葉を選出しながら、

「もちろん猫も可愛いと思うけど、俺は男の子だから、ただ可愛いよりかっこよさもある犬の方が好きなんだよ」

「うにゃ……、それはそうかもしれないけど。でも、猫ちゃんだって高い所を登っていくのはかっこいいにゃ！」

……あ、やっぱりこの人の性格嫌いかも。

榊としては誰が何を好きだろうと構わない。人によって感性は違うわけで、犬と猫だって好みは分かれるに決まっている。

みくがどれだけ猫が好きなのかは分かったし、それだけ何かを好きになれるのは羨ましいとさえ感じる。

ただ、好みが他人と違ったからって自分の好みを強要してくるのは氣にくわない。と

いうよりも相手の器が小さいように思えてしまう。

ここにいるみんなとは仲良くしないといけないのは百も承知だが、やはりみくとはどこか馬が合わない。

榊は他人に合わせようとすることが多いが、みくは他人を合わせようとしている。この正反対とも言える性格が、みくに對して壁をつくっているとも考えられる。

「ど、どうしたのみくちゃん。そんな大きい声出して」

見かねたように一人の女性が歩み寄つて来た。長い黒髪に大人びた容姿はみくとは正反対で、それだけで榊は安堵を覚えていた。

「あ、美波ちゃん聞いてにや！ この子、猫ちゃんよりわんちゃんの方が好きって言ったにや。信じられないにや！」

「この子じゃなくて榊君ね。それに、犬だって可愛いじゃない」

「そうだけど、それでも猫ちゃんより上はありえないにや！」

全く引こうとしないみくに、美波は苦笑いを隠しきれていなかった。ただそれも、こちらが思う呆れよりも困ったという面の方が強い。

そう思っていると、美波は苦笑いから笑みへと変えた顔をこちらに見せて、

「紹介が遅れちゃったね。私は新田美波、十九歳の大学生でシンデレラプロジェクトの  
中では最年長なんだ」



「榊和巳です。よろしくお願ひします」

こちらこそよろしくね、と返してくれる美波を見て、榊は先ほどのみくに対する反応に納得した。

……最年長なだけあって、みんなのリーダー的存在なのかな。

発足して間もない段階だからまだリーダーとかは決めていないかもしれない。だがもしリーダーを決めるなら、それは美波が最適だろう。

最年長というのに加えて一目で責任感が強いのが感じ取れる。それに何より、……この人普通そうだもんな。

もちろんいい意味としてだ。ここまで個性的なアイドルが集まっていると、それをまとめるには美波のようなあまり個性の強くない人の方が向いてる気がする。

美波との簡単な挨拶をすませると、頃合いを見計らったようにみくがまた声を荒げる。

「呑気に挨拶してる場合じゃないにや！ この子はみく達の敵にや」

「敵って、みくちゃんいくらなんでもそれは言い過ぎよ」

「そんな事ないにや。それに、美波ちゃんだって猫ちゃんの方が好きでしょ？」

「えっ、私……？」

不自然に驚いた反応に、榊だけでなくみくも察していた。

気持ちをはわかる。その場の空気ですしい選択肢があつたとしても、不意にふられると本心が出てしまうものだ。

「うう、美波ちゃんも犬派なんて、裏切り者ー!」

「ああ待つてみくちゃん! そんなつもりじゃなかったの!」

最早味方がいない事に気付いたみくは、撮影そっちのけでどこかへ走ってしまった。

そしてすぐさまみくを追いかける美波を見ていると、だいぶシンデレラプロジェクトの先が心配になる。

……主に新田さんの負担だけだ。

「ソーラー……喧嘩してたんですか?」

「ん……?」

癖のある話し方に、首を傾げた榊が振り返ると、そこには見るからに外国人がいた。

雪のように白い肌とシルバーに近い髪色は榊に北国の人を連想させた。

見た限りでは年はそう離れていないだろう。だが相手が外国人というだけで、こうも人にプレッシャーを与えるものなのか。

おまけに先ほどの言葉、日本語も少しは話せるようだが、その前のソーラーが何語か全く見当がつかない。

だからといって黙っているのはよくない。相手はこちらがみくと喧嘩していると

思っているのだ。

どの程度かわからないが、ある程度日本語わかるようなので、榊はなるべく簡単な日本語を選択しながら、

「そうじゃないんだ。ただ、お互いの考えが上手く伝えられなくてね」

「ニードラズミーヤ……勘違いですか？」

「うーん……。そうだけど、そうじゃないかも」

あれはみくがこちらの話を聞き入れようとしただけだから、勘違いという言葉は不適切だと思う。

ならどんな言葉が適切かときかれると榊も思い浮かばず、結局曖昧な回答になっしまう。

それでも相手は困ったようすを微塵も見せず、

「それなら、後でみくと話せば大丈夫ですね」

「話し合って上手くいくかな」

「みくは優しいです。それに、和巳も優しいそうだからきつと大丈夫です」

みくが優しいと言われてもピンとこない。最初の手応えとしては、自己中の塊のようにさえ思える。

それを目の前の相手に漏らしたところで仕方ない。だから榊は肩をすくめると、

「わかった。今度会った時はもう少し分かり合えるように努力してみるよ」  
「ウダーチ……頑張ってください」

「うん、ありがとう。そういうえば、まだ名前を聞いてなかったですね」

「ダー、私の名前はアナスタシアです。アーニヤと呼んでください」

「アーニヤさんは見たところ外国人のようだけど、日本語上手ですね」

「あー……ちよつと違います。お父さんはロシア人だけど、お母さんは日本人です」

「ハーフかあ、と榊は納得半分驚き半分の感想を持った。

最近ではテレビでもハーフタレントを見る機会も増えたためハーフ自体はそう珍しくない。

だが、アナスタシアの場合はよく言われるハーフ顔という感じではなく、かなり父親の影響を受けているのだろう。一目見るだけではハーフよりもロシア人と言われた方が納得出来てしまう。

「十歳までロシアにいました。まだ日本語話すのはちよつと苦手ですけど、聞き取るのは大丈夫です」

「へえ、つまり日本語とロシア語両方話せるんですか」

「あと、英語も話せます」

まさかの三カ国語である。

アナスタシアのことを知れば知るほど、また自分に自信がなくなってくる。  
「ねえねえ、その君」

また声をかけられた。聞き覚えのない声ということは、まだ挨拶をしていない相手と  
いうことだ。

榊がそちらを見れば、ショートカットの女の子がいる。首にヘッドホンを掛けているの  
を見る限り音楽が好きなのだろう。

相手の女の子はおもむろに人差し指をこちらに向けて、

「榊君、だっけ？ 君なかなかロックだね」

「俺がロック？ どうして？」

「だってさつきみくの前で平然と犬が好きって言ったじゃん。あれだけ猫推しな人を前  
に犬派って堂々と言えるなんて、ロック以外ありえないでしょ」

また反応に困る相手が現れた。榊はあまりロックに興味がないので、ロックが何を指  
すのかはよく知らない。

ただ一々反抗してるのをロックと言われると、それは違うだろうと素人ながらに思う。

……その考えだと、極端な話反抗期の子はみんなロックになると思うんだけど。

「あのさ、君にとつてロックって何？」

「ロック？ そんなの、ロックだと思えばそれがロックなんだよ。それと、私の名前は多

田李衣菜だからよろしく」

よろしく、と挨拶を返しながらも紳は伏し目がちになるのを我慢しようとは思わなかった。

ロックと思えばそれがロック、言う人によつては深く感じるのに、李衣菜が言うと思議なことに安っぽい言葉に早変わりしてしまう。

李衣菜に足りないのは単純に実績なのだろうか、そう紳が思うと、アナスタシアがダー、と前置きして、

「ロック……ロシアでも有名な人たくさんいます。李衣菜は、どのロックが好きなんですか？」

「わ、私!? そうだなあ、色々あるけど、どれもみんなの知らないやつばかりかな……」  
……実績どうこうよりも、まずは知識が先に必要みたいだな。

このにわかロッカーはどうして知識もまともにならないのにロックを謳うのか。キャラ作りのためとしても、これだけ無知だとまだみくの方がマシに見えてくる。

「次の方撮影お願いしまーす！」

「あ! 次私の番だ。じゃあね、ロックの話はまた今度！」

助け船に乗つかるように、李衣菜は早足で去っていく。

逃げたな、と思うこちらに、アナスタシアは顔を向けて、

「私も李衣菜と一緒にステイルバ……撮影なんで、行きますね。榊君は、もうみんなと話ししましたか？」

「え？ ええと、島村先輩に、渋谷さん、それと……。あ、まだ一人話してないや」

「ダー、それなら多分それは蘭子ですね」

蘭子？ と疑問を返す榊に、アナスタシアはある方向を指差した。

人差し指の示す方に視線を送れば、スタジオの端に榊がまだ知らない女の子がいる。しかし、

……これはまた、癖の強うそうな子で……。

真つ先に榊の視界に入ってきたのは黒一色だった。

リボンやフリルをあしらったドレスのような洋服に、足は厚底のブーツ。そして手に持つ傘もレースついた黒い傘だ。

ゴスロリファッション。正式名称はゴシックアンドロリータ・ファッションだったと思うが、今はそんな事はどうでもいい。

ファッションは人それぞれに好みがあるのだから、ゴスロリでもおかしいとは思わない。ただ見慣れないものに対して警戒心を持ってしまうのもおかしいことではないとも思う。

猫耳を付けてるみくとどちらがマシかときかれたら、それはまた難しい選択だ。

あれもキャラのなのだろうかと口をへの字に結ぶ榊に、アナスタシアは耳打ちするよ  
うに、

「ザステインチビー……恥ずかしがり屋なんで、和巳から話しかけてください」

「あの子が恥ずかしがり屋？ あんな服装してるのに？」

人前であれだけの服装するのもそれなりに勇気がいると思うが、と漏らす。

「服装は好きだから出来ます。でも、人前だとすごく勇気がいります」

「わかるようなわからないような……」

「わからなくても大丈夫です。ただ、仲良くしてくださいね」

最後は念押し気味に言って、アナスタシアも撮影に向かってしまった。

また一人残された榊は困ったように頭を掻いた。

蘭子の元へ一人で行くには少し勇気がいる。本当なら誰か付き添いをお願いしたい

ところだが、それはできそうにもない。

……なんかさつきからちよくちよくこっち見てるんですよねえ。

少なからずこちらに興味を持ってもらえてるのは幸いだが、これだと誰かを誘ってか  
ら話しかけにくくと、あからさまに一人では無理ですと相手に言ってるようなものだ。

榊は言葉にならないため息をこぼした。覚悟を決めろということだろう。

これまでゴスロリの人と話すことなんて一度もなかった。榊にとって未知との遭遇



は好奇心を掻き立てるが、それ以上に不安を与えてくる。  
「はあ……」

不安と一緒に出るよう、今度はため息を声にして落とす。  
よし、と気合を入れて、榊は蘭子の元へ歩みを進めた。

## 九話 最後の刺客は中二病？

蘭子の元へ向かう榊は、表情こそ変えていないが内心では緊張を隠せずにいた。

意を決したと言つても、いざ行動となると心は落ち着かないものだ。自然と拳は強く握られ、額からは汗がにじみ出ている。

アナスタシアが蘭子は恥ずかしがり屋と言っていたが、そんなことはどうでもいい。むしろ榊自身も人と話すのは得意ではない。ましてや相手がゴスロリファッションの人となれば、それが際立ってしまふのは仕方のないことだ。

……誰か助けを呼びたい。

思わず口に出てしまいそうになる本音を、榊は一步ごとに飲み込んでいく。

他のアイドル達は撮影前のメイク直しをしている人や、逆に撮影後の写真チェックをしていたりと手の空いてる人はいなさうだ。武内もスタッフと打ち合わせをしている有様だ。

なぜ蘭子を最後まで残してしまったのか。知らなかったとはいえ、少し前の自分を叱ってやりたい。

しかしいくら悔やんだとしても所詮は過去の出来事だ。頭を左右に振って不安を取

り除き、本日何度目となる笑顔を作る。普段は動かす機会の少ない表情筋が悲鳴をあげている。

アイドルを目指すなら笑顔の練習も必要だな、と新しい課題を見つけた榊は片手を差し出して、

「はじめまして、蘭子さんだよね？ 今度オーディションを受ける榊和巳です。よろしくお願ひします」

「な！ 我的真の名を知っているとは、汝は預言者か!？」

「真の名、名前の事？ それならさつきアーニヤさんから聞いただけだよ」

我とか汝とか独特な単語が聞こえたが、菜々、みく、李衣菜と立て続けにキャラの強い人と会って抵抗が出来たのか、多少の言葉遣いでは気にせず会話できるようになっている。

……慣れって大事ですね！

己の中の小さな成長に感激する榊の目の前で、蘭子は日傘を肩に当て直して、  
「なるほど、ならば汝は、我と共に墮天へと墮ちようとするものか」

「え、墮天？ 墮ちる?」

「よかろう。汝が天界より参じようとする使者なら、この邂逅かいこうに祝福の音を響かせようぞー！」

……あ、違う。これ俺の知ってるやつじゃない。

菜々達のキヤラがかすんで見えるほどに、蘭子の存在は異彩を放っていた。ゴスロリファッションがおまけに見える。いや、ゴスロリファッションが蘭子の存在を際立ているのか。この際どっちでもいいだろう。

まだ数回しか言葉を交えてないが、これほどに第一印象で脳内に様々な言葉が浮かんでくる人は後にも先にも出てこないだろう。

出だして不意打ちを食らった榊が思わず言葉を発せず固まっていると、蘭子は逆にどうぞし始める。

……あれでも一応恥ずかしがり屋、なんだよな。

挙動を見る限りでは智恵理と似ている部分がある。アナスタシアの言っていた恥ずかしがり屋という情報も嘘ではなく、どちらかという人見知りの方が正しいかもしれない。

ただ、いかんせん話し方があれである。コミュニケーションを取ろうにも、会話のキヤッチボールが成立出来ない。

こちらが普通にボールを投げたら、あつちはノーサインで変化球を投げてる感じだ。しかもあそこまで堂々と話されると、まるで話を理解していないこっちがおかしいのではないかと思ってしまう。もちろんそれはないのだが。

「ええと……、とりあえず歓迎はしてくれてるのかな？」

「うむ、汝が天界の門を通ることに成功した暁には、共に魂の共鳴を図ろうぞ……」

歓迎はしてくれてるみたいだが、蘭子は上手く意思疎通が出来てないことを感じ取っているようだ。

ここで引き下がるのは得策ではないかもしれない。しかしこちらが蘭子の言葉を理解出来ないなら、これ以上無理に会話を続けるのは悪手でしかない。

「それじゃ俺はもう行きますから、蘭子さんは撮影頑張ってください」

「ふふふ、我の無垢なる姿を、真実を映し出す鏡に召喚しよう。汝も来たるべき試練のため、その身を灼熱の業火に晒すがよい！」

そう言い残すと、蘭子は高笑いをしてみんなの方へと行ってしまった。

結局最後も何を言ってるのかほとんど分からなかった。状況とニユアンスから察するに、撮影頑張りますので貴方も明日のオーディション頑張ってください、といったところだろうか。

……悪い子ではなさそうだな。

話し方こそ奇想天外ではあるものの、その言葉や表情からこちらを邪険にする様子もない。そこそこキヤラの強いみくと比べてみても、現段階では蘭子の方が印象はいい。

それでも蘭子とまともに会話出来ていなかったのは事実だ。

明日までになんとかしないといけない、しかしインターネットで調べようにも、どう検索すればいいのか見当もつかない。

……中二病、とは違うよなあれって。

とにかく頭を整理したい。榊の記憶ではスタジオの外に長椅子が一つあったはずだ。一度そこに座って考えよう、そう思いながらスタジオの扉を開けて椅子の方を見ると、そこには先客がいた。

「あれ、島村先輩」

榊が声を発すると、先客である卯月もこちらの存在に気付く。

「榊君？ こんな所でどうしたんですか？」

「いや、一通り挨拶も済んだんでちよつと一休みしようかと思ひまして」

「そうだったんですね。あ、隣どうぞ」

そう言つて卯月は身体を奥に動かしてスペースを作つてくれる。言葉に甘えて隣に腰を下ろすと疲れが一気に襲つてくる。

短時間に十四人との挨拶、中にはキャラが濃すぎる人も何人かいたのだ。

「意図せずため息が零れ落ちる。

「疲れましたか？」

「そうですね。普段はこうして女性と話さないせいもありますが、なかなかみなさん個性がお強いようで」

「それちよつと分かります。みくちゃんは猫語を話してたり、蘭子ちゃんは話し方が特徴的ですもんね」

「どうやら自分が思っていたことは間違いではなかったようだ。自然と二人の間に苦笑が漏れる。」

「それより島村先輩はどうしたんですか？ 他の人はまだ中にいるみたいですけど」

「私は……、気分転換ですかね」

「妙に歯切れの悪い言葉に、さすがの榊でもなんとなく予想はつく。」

「撮影、上手くいきませんでしたか？」

「そう質問すると、卯月ははにかみの表情を見せる。」

「恥ずかしいんですけど、どうやらぎこちないみたいで、みんなが終わった後に撮り直しです」

「なんだか意外ですね。島村先輩は緊張とは縁がなさそうですね」

「そ、そんなことないですよ！ 私も緊張ぐらいはしますよ」

「だって、と今度は照れ笑いをこちらに見せて、

「やっとならったアイドルになれたんですよ。緊張しないわけじゃないじゃないですか」

夢かあ、と榊はどこか懐かしい響きに耳を傾けた。同時に、自分の夢はなんだろうかと自問もしていた。

アイドルになるという目標ならある。だけど榊にとってそれはあくまで目標であって夢ではない。高校受験の時だって、自分の学力と通学距離から今の学校を選んだぐらいいだ。

高校生なんてそんなものだろう、そう思う反面、卯月が夢を持っていることに素直に羨ましいと思った。

「私小さい時からアイドルに憧れていて、養成所に通ってレッスンしてたんです。けどなかなかオーディションに受からなくて、その間に同期の友達も止めて私一人だけになっちゃって私ってアイドルに向いてないのかなって思ってたんです。」

でも、そんな時にプロデューサーさんが声をかけてくれて、やっと夢だったアイドルになれたんです」

だから、と卯月は榊のよく知るあの笑顔を見せてくれる。

「頑張ります！ このくらいでへこたれていられませんから」

「……なんだか羨ましいですね」

「羨ましい？ 私がですか？」

意外をそのまま表情に出す卯月に、榊は頷きを返す。



夢を持つているのもさることながら、それに向けてひた向きに頑張れるのは尚のこと羨ましい。

自分もそれだけ頑張れるだろうか、と頭に疑問が浮かぶが、即座に否定する。

……俺の場合は、今回駄目だったらそれまでだろうしな。

今でさえ自分はアイドルに向いてないと考えている。それを明日オーディションを受けようと決意したのは、今西の勧めがあつたこそだ。

だから今回が駄目だからって他のオーディションを受けようとは思わない。あくまでも自分を必要と言ってくれた今西のいるプロダクションでアイドルをしたいのだ。

わがままでと言われてしまいそうだ。これでは夢どころか目標と言えるかもあやしいかもしれない。

苦笑が溢れるのをぐっと堪え、榊は言葉をつくる。

「島村先輩、ちよつと笑つてみてください」

「え？ 笑うつて、今ここでですか？」

あまりにも唐突なお願いに、卯月が予想通りの反応を示した。

「何でもいいんですよ。自己紹介みたいな形でも、島村先輩の笑顔を見せてください」  
笑顔を見せてくださいとは、自分の発言とはいえかなり危ない発言をしてる気もす

る。

それでも卯月は、じゃあ、と嫌な顔など微塵も見せず前置きする。

「島村卯月、トップアイドル目指して頑張ります。ブー！」

卯月が両手でピースサインをつくったその瞬間を榊を見逃さなかった。

すかさずスマートフォンを取り出すと、カメラ機能でその笑顔を撮影した。

「ふえ……う？」

すぐに卯月は笑顔を崩すが、スマートフォンには卯月の笑顔がばっちり記憶されている。

最近のはすぐにカメラモードになるため、少しの時間さえあればすぐに撮影出来てしまう。

……それが良いか悪いかは、人それぞれなんだろうけど。

などと悠長なことを考えながらも、榊は早速撮影した画面を卯月に見せる。

「この笑顔、どう思いますか？」

「この笑顔って、私の笑顔ですよね？」

「当たり前じゃないですか。今撮ったんですから」

当然のように言う榊に、さすがの卯月も困ったような顔をした。

自分の笑顔を本人が評価するのはとても難しいだろう。だから、榊が先に口を開いた。

俺は、と前置きして出る言葉は、

「この笑顔が、とても羨ましいです」

出した言葉に、榊は微塵も恥ずかしさを感じなかった。なぜならそれは、初めて卯月と出会った時から思っていたことだから。

恥ずかしくないのに、身体は熱を帯び始めている。これではすぐに頭が回らなくなってしまう。

だから榊は言葉をまとめるよりも早く口に出す。身体に溜まり始めてる熱も一緒に出てくれと願いながら、

「入学式の階段で島村先輩と会った時、俺もああいう笑顔が出来たらいいなと思いました。昨日島村先輩がアイドルをしてるって聞いた時、俺はあの笑顔なら島村先輩がアイドルなのにも納得しました」

そして、

「今この笑顔を見て。正確にはアイドルを指すと決めたからこそ、島村先輩の笑顔は、アイドルとして嫉妬してしまうほど魅力的だと分かったんです」

「榊君……」

やっぱり駄目だ。身体は熱を放出するどころか、まるでエンジンがかかったかのように溜まっていく。

やはり慣れないことはするものではない、と片手で顔を扇ぐ榊に卯月は、

「くすっ——」

小さく笑った。だがそれはこちらをあざ笑っているわけではなく、今度は榊が疑問を表情に出した。

「や、やっぱりおかしかったですか？ 自分でも恥ずかしいことを言ってる自覚はあります」

「いえ、すごく嬉しいです。ただ、前にも似たようなことを言われたのでちよつとおかしくて」

「似たようなこと、ですか？」

「ええ、プロデューサーさんが、私の採用理由は笑顔だつて言ってくれたんですよ」  
「あのプロデューサーさんが……」

なんか意外ですね、と言うよりも早く扉が開く音が耳に届いた。誰だ？ と向ければ、そこには話していた武内がいた。

噂をすればなんとやらはこのことだろう、榊が無言で頭を下げると、武内も同じ反応を示した。

「島村さん、みなさんの撮影が終わりましたのでよろしいでしょうか？」

「はい、分かりました！」

元氣な返事で立ち上がる卯月の姿は、こころなしか最初の時よりも自信に満ちてるようにも見えた。

……これなら大丈夫そうだな。

素人ながらにそう思う。そもそも卯月ならただ笑っていてれば、それだけで宣材写真としては合格点のはずなんだ。

それを本人が難しく考えてしまうから、彼女の魅力が十分に伝わらなくて撮り直しになつてしまうのだ。

再び撮影セットへと向かう卯月を見送ると、武内がおもむろにこちらを見て、

「榊さんはどうしますか？　もう少し見学していきますか？」

「そうですねえ……」

正直卯月の撮影を見てみたい気持ちはある。撮影中も他の子と挨拶していたのでゆっくり撮影を見学してる暇もなかったのだ。だけど、

「この辺で失礼しようと思います。今日は、明日のためにやらないといけない事がたくさんありそうなので」

「では、オーディションを受けるのですね」

「はい。生気かもしれませんが、アイドルに興味を持ちました」

だけど、と榊は視線の奥でカメラマンにあの笑顔をつくる卯月を見つめながら、

「いい笑顔ですね」

はい、と武内が同意してくれる。誰とは言っていないが、それくらいは理解してるだろう。

だから榊は、それを前提として話を進める。

「隣の芝生は青いって言葉がありますけど、あの笑顔は本当に羨ましいです。アイドルにとって笑顔は必要不可欠でしょうけど、彼女のそれは人を幸せにする力がありますから」

「榊さんは、あまり笑うのが好きではありませんか?」

どうでしょう? と榊は苦笑いを浮かべる。

「好き嫌いというよりも、苦手なんですよ。武内さんはアイドルには笑顔が必要と考えているようですが、残念ながら俺の笑顔には、人を幸せにする力はありませんよ?」

「確かに島村さんの笑顔は素敵ですし、それはアイドルにとって必要なものだと思います」

ですが、と武内はこちらを見た。

相変わらずの無表情は、榊に威圧感を与える。だがそれには高圧的なものは感じない。

むしろその目はなぜか安心感も与えてくれる。まるで今西のようだ。こちらの心を

読み通して、それでいて最善の答えを返してくれる。

それを証明するように、武内は言葉が続ける。

「人それぞれによつて目指すアイドルは違つてきます。島村さん達が目指すアイドルには笑顔は不可欠ですが、榊さんが目指すアイドルがそうとは限りません」

「俺が目指すアイドル……」

それは考えてもいかなかった。アイドルには多少の違いはあれど、みんな同じものだと思つていた。

だから必然とアイドルに求められるものは共通してるとさえ考えていたし、榊は自分をアイドルに向いてないと判断していた。

それを武内は否定してきた。プロデューサーが言うなら本当だと信じようとする反面、ただのお世辞ではないかと疑う心もある。

「俺の目指すアイドルってどんなアイドルなんでしょう?」

「私にはまだわかりません。それは榊さんが決めることですから」

「え? プロデューサーなのに分からないんですか?」

「私はあくまでお手伝いをするだけです。シンデレラという魔法使いのようなものです。シンデレラがお城で踊りたいと思えば、私はそのための魔法をかけます」

……俺男なんだけどなあ。

一瞬シンデレラ衣装を着た自分の姿が脳裏をよぎり、榊は吐き気にも感覚を得る。

嫌なイメージを頭から払拭する榊は、武内の言葉を聞いて納得することもある。それはシンデレラプロジェクトの個性の強さだ。

武内がシンデレラだからこういうアイドルだと決めつけるのではなく、一人一人希望や夢に沿ったプロデュースをしてくれる。

だからこそ、同じプロジェクト内でもあれだけの年齢差で蘭子やみくのような癖の強いが集まるのかもしれない。

本当にいい職場だ。改めて思うと、なおさら明日のためにやることがあるだろう、と自分を叱咤する。

「すみません武内さん。もうそろそろ行かせてもらいます。今はずっと先の事よりも、目の前の事で頭が一杯のようです」

「そうですか。明日のオーディション、楽しみにしています」  
あまり期待しないでくださいよ、と弱音を覗かせるが、武内は全く気にした様子を見せない。

ただ一言、頑張ってくださいと榊に言うと、武内をお辞儀をしてスタジオに戻る。

一人になった榊は意味もなく天を仰いだ。自分が目指すアイドル、アイドルを目指すと決めた以上今日はそれも考えないといけない。



「俺が目指すべきアイドルってなんだろう？」

不意に出た疑問に、無機質である天井が答えるはずもなく、ただ虚しく自分の疑問が耳に響いた。

# 十話 氣遣いほど心に刺さるものはないんですよ？

「あ、榊君！ 待つてくださーい！」

時刻は四時過ぎ。時期によつては赤みがかつてくる空も、四月ではまだ青く染まつて  
いる。

そんな中、ビルから出てきた榊を見つけて彼女は声を上げた。

「あれ？ 菜々さんじゃないですか。今朝はお世話になりました」

礼儀正しく頭を下げる榊につられ、彼女、安部菜々もどういたしましてと頭を下げた。

二度目の顔合わせとなると、お互いに緊張が少ない。その証拠に、頭を上げた榊の顔  
には朝とは違つた柔らかい笑みがある。

「榊君はもう見学終わつたんですか？」

「はい、今日は帰るだけです。菜々さんの方もメイドはおしまいなんですか？」

「ええ、今日は早番でしたので。それと榊君、これをどうぞ！」

背負つていたリュックからあるものを取り出すと、菜々はそれを両手で差し出した。

「榊は何ですか？ とそれを受け取つた。そして表と裏を確認すると、彼は目を見開い  
て、

「これって菜々さんのCDですか!? ……本当に出してたんですね」

「それどういう意味ですか!? ナナが嘘をつくとも!」

「いや、CDを出していたのはウサミン星でした、キャハツ! みたいなオチも考えていたもので」

……榊君の中で私ってどんな扱いなんでしょう……。

冗談交じりに決まっているが、その冗談がどのくらいかは分からない。

冗談を言ってくれるくらいには打ち解けてくれたのだろう、そうプラス方面で考えることにした。

彼はCDを大事そうにリュックに仕舞うと、何の前触れもなく言った。

「そういえば菜々さん、俺明日のオーディション受けることにしました」

「え……?」

唐突に告げされた事実にも、菜々は間拔けな声をこぼした。

思うところはほとんどはいくつもあつた。ただ、今声として出るのは、

「よかつたじゃないですか! ナナは、ナナはすごく嬉しいです!」

周囲のことなど一切気にせず、菜々は喜びを爆発させた。それだけ菜々にとっては重大なことだったのだ。

……今日は仕事も集中できなかつたですからね。

仕方ないですよね、と自分自身を納得させる。なんたつて、面接カードとはいえ菜々が初めてアイドルについて指導した子だ。

それが実際にアイドルの仕事を見学してどう思うか。アイドルだつて立派な仕事なのだから当然楽しいことばかりではない。人によってはそれが際立って見えて、アイドルなんてまっぴらだと思いかもしれない。

菜々自身下積み時代の中では長らく結果が伴わないことや、なかなかやりたい仕事が出来ないなど、辛いことの方が多かつたのは確かだ。

それでも菜々は、可能なら櫛にアイドルを目指してもらいたいと思っていた。強要するつもりは微塵もない。ただ共有したいと思った。アイドルは大変で楽しやないが、だからこそ見える景色があることを。

そんなことを考えていたらまともに仕事をこなせるはずもなく、カフェのマスターには時間前にも関わらず今日は帰っていいと怒られた始末である。

久しぶりにお叱りを受けて意気消沈としていたところに彼からの吉報である。嬉しくないわけがない。

「でもどうしたんですか？ 見学で何かありましたか!? それより今日は誰と会えたんですか!？」

「ちよつと菜々さん。いきなりそんな話されても、答えられないですよ」

「あ、そうですね。すみません、次から次へと質問攻めで」

いや、別に大丈夫ですよ、と笑う榊は辺りを回して、

「時間があるならあそこのベンチにでも座りませんか？　立ち話だと菜々さん首が疲れちゃうでしょ」

あ、と指摘されて初めて、ずっと首を上げていることに気付く。

菜々の身長は百四十六センチと、女性としてもかなり小柄な方だ。以前インターネットで調べた時に中学一年生の平均身長よりも低いと知った時には、成長期など過ぎていたのもお構いなく祈るように毎日牛乳を飲んでいたのはちよつとした黒歴史だ。

それに対して彼はしつかり成長期をものにしてきたようだ。見た限りは百七十センチはあるだろうか。

それはつまり菜々とは二十センチ以上も差があるということ、それなら話す時に首を上げるのはある意味当然の結果だ。

朝の時は他人との輪に入るのが苦手とか、空気が読めない人間だと自虐していた榊だが、ここまで他人のことを気遣えるならそんなことはないのではないかと思う。

ベンチへと足を向かわせる榊の背中に、しかし菜々は今思ったことを口にしなかった。こちらがどう思っても、彼が苦手というなら、それなりの理由や経験があつてのことだろう。

まだこちらはあまり榊のことをよく知らない。それなのにずかずかと入り込もうとするのは無礼にあたる。

だから菜々はあえて何も言わず、榊の後をついていった。



ベンチに腰掛けると、榊は今日あった出来事を、流暢りゅうたうに語り始めた。

ラジオ局で藍子や愛梨と一緒に生放送に参加してきたこと。こつちに戻って楓のモデル撮影を見学したこと。

そしてなにより、シンデレラプロジェクトの女の子達と実際に会ってオーディションを受ける決意をしたこと。彼は出来事の一つ一つを楽しそうに話す。

ある場面では困り顔で、また別の場面では照れくさそうに、そして大部分ではまるで酔いしれるように。

それは今朝の時点では決して見せることのない表情であり、彼がアイドルに対して強い関心を持つてくれた証でもある。

菜々はそれらの全てを、相槌を打ちながら、所々でオーバーリアクションをしてあげる。初めてのことや楽しかったことは他人に話したくなる気持ちは痛いほど分かる。

菜々もアイドルの仕事であった出来事をよくカフェのみんなに話している。逆もま

た然りで、自慢とは違った、でも話したい衝動にかられる不思議な感覚だ。

「——とまあ、見学はこんな感じでしたね」

一通り話し終えた榊は興奮気味のようにも見える。落ち着かせるための吐息をする彼に、菜々はやつと言葉を返す。

「いきなりラジオの生放送に出演したり色々あったみたいですけど、良い体験が出来たみたいですね」

「ええ……本当に、良い体験でしたよ。アイドルはなんとなくテレビとかで見たことがある程度だったので、それが普段どういった仕事をしているのか見れてよかったです」

ラジオは予想外でしたけどね、と肩をすくめる榊は、でも、と前置きして、

「アイドルやスタッフさんとか色んな人にお会いしてきましたけど、みなさん楽しそうで、それでいてとても一生懸命でした。これが菜々さんの言ってた心を熱くする何かなのかなあって思ったりしました」

「だから、榊君もアイドルをやってみたいと思っただんですか？」

どうでしょう、と即座の肯定をしない。346プロダクションのお城のような建物を見上げて、

「でも、いいなあとは思いました。ああやって何かをひた向きに頑張れるのは羨ましかったです。」

だからこんな俺でも、あの子達と一緒にならそうやって出来るのかなあって。そう考えていたら、自然とアイドルをやってみたいと思っただけですね」

照れ臭そうに言う彼の動機を、菜々はどう評価するか悩んだ。個人的には素敵な動機だと思う。自分が熱くなれるものがあるというのは、アイドルになった後の大事なモチベーションに繋がるからだ。

ただし、これを明日のオーディションで言った場合に面接官の反応もいかと言われると、菜々は決してそうではないと言わざるをえない。

彼はそれを理解しているだろうか。いや、おそらく理解していない。理解してないからこそ、彼はあれほどまでに目を輝かせているのだ。

言ってあげるべきだろうか、悩んだ末に菜々が出した答えは、  
「良い動機だと思いますよ」

個人感想を述べる菜々に、榊も嬉しそうに頷く。

「だから俺、明日のためにやれることはやっておきたいんです」  
「やれることですか？」

明日がオーディションだからやれることは限られていると思う。歌やダンスなんて一日でどうにかなるものではない。挙げるとするならば、面接の練習くらいだろうか。

首を傾げた菜々に、彼は指を一つずつ折ってみせ、



「まず第一に、俺346プロダクションのアイドルのこと全然知らないんですよ。高垣さんでやつと顔と名前が一致するレベルです。だから今日は、帰りにレンタル屋さんで皆さんのCDをあるだけ借りてこようと思ってます」

「あるだけって、もしかして全部ですか？」

「全部のCDが残ってるとは思いませんけど、とりあえず残ってるのは全部です」

「全部って、結構な枚数ありますけど本当に全部聞くんもりなんですか？　というより聞けるんですか？」

「聞けるかじゃなくて聞くんです。それに、全部聞くと言っても、別に歌を覚えるわけじゃなくて、346のアイドルがどういう歌を歌ってるかを知れば良いんです」

「すごいやる気だ。テストの点数が悪くて勉強しようと思う心理と似ている気もするが、一晩ぐらいだったらやり切れるだろう。」

「それと二つ目は、シンデレラプロジェクトの中に个性的というか、なかなか癖の強い子がいます。まあ、菜々さんみたいな感じなんですけど」

「榊君、それってナナも癖が強いってことですよね」

「その言葉遣いがなかなか難儀なものでして、まともに会話出来なかつたんですよ」

……あ、ナナの癖についてはスルーですか。

彼としてはそこは触る必要のない部分なのだろう。

口が滑っただけかもしれない。その場合は、彼が菜々を癖の強い人だと思ってるのは確定だが。

菜々も他のアイドルよりは変わってる事ぐらいは自覚している。だからと言って癖が強いと言われてノードメージなわけもなく、それなりに心に刺さるものもある。

何か一言言うべきだろうかと迷うが、彼にも悪気はなかったに違いはないと思ひ会話を続けた。

「まともに会話が出来ないって、日本語を話せないわけじゃないんですよ？」

「うーん。日本語ではあるんですが、天界とか、かいこう邂逅とか、そういった単語が飛び交う感じでした」

「ああ、いわゆる中二病ってやつですよ。それはなかなか手強そうですね」

「まあ菜々さんも負けてないですよ。それに、中二病って括っていいのか疑問が浮かびますが、明日はもう少しコミュニケーションを取れるようにしておきたいんですよ」

……あれ？ またナナがデイスられてないですか。

これはもう意図的ではないだろうか。

榊にとっては褒め言葉かもしれない。ただ当事者である菜々にとっては残念なこと  
に冷やかしにしか聞こえない。

やはり言った方がいい、そう判断した菜々は、あの……、と前置きして、

「榊君？　なんだかさつきから、ナナのメンタリテイを削る発言が出てきているように感じるんですが」

そう指摘すると、榊は唸るように考える素振りをこちらに見せた。そして彼はまず唸り声を響かせて、

「菜々さんって、アイドルの時はウサミン星人じゃないですか？」

また序盤から返答に困る質問がきた。

アイドルの菜々がウサミン星人なのは当然のことで、そうです、と彼の質問に肯定すればいいはずだ。

しかしそれだと、アイドルの時以外のプライベートはウサミン星人でないと云ってるようなものだ。

それはいけません、と菜々は自身を叱咤する。ウサミン星人はキャラではないと豪語している以上、そんなことあつてはいけないのだ。

だから菜々は答える。いつものようにピースサインを目元までもつてきて、

「ナナは二十四時間三百六十五日、いつでもウサミン星人に決まってるじゃないですか。キャハっ！」

「……………」

一瞬。ほんの一瞬だけだったが、榊の顔が真顔になったのを菜々は見逃さなかった。

この空気を菜々は何度も経験している。場が凍るといふやつだ。

一回二回と瞬きを繰り返した彼は、ああ、と声を絞り出してから、

「菜々さんのそういうところ、俺は本当に尊敬してますよ。」

……いたた！ その心遣いが逆に鋭利な刃物ですし、そもそもなんで疑問形なんですか!?

気遣いが難しいことを身をもって体感した菜々は、疲れが溜まった肩をなんとか持ち上げて、

「この話題は一旦保留にしておきましょう。ええそうしましょう。いいですね榊君、分かったら返事ですよ?」

「あ、はい……。了解です」

歯切れの悪い返答に、いささか大人気なかったかと思う。

けど仕方のないことだ。これ以上この話題を続けていたら、きつと菜々の何かを持たないかもしれない。

何かはあえて深く考えないことにした。ただ菜々の心が深く抉られたことには違いなかった。



「菜々さん、今日は二回もありがとうございますございました」

駅の改札前で櫛は再度頭を下げた。

時は既に六時前。この時間になると空は赤よりも黒が主色になってくる。そして周囲には帰宅途中のサラリーマン達の姿が目立ってくる。

これからどんどん混んでくるであろうその場所で、頭を下げられた菜々は手を横に振ってみせる。

「だから気にしないでくださいって、あれは菜々が好きでやってるんですから」

結局あれから、明日のオーデイションに向けて主に菜々の体験談を中心としたレクチャーでほとんどの時間が過ぎてしまった。

菜々の体験談ということは、失敗した話が必然的に多くなってしまふ。だけどそれでよかったですと菜々は今更に思う。

どうすれば良いよと話すより、どうしたら駄目かと話す方が櫛としては理解しやすかったようだ。その証拠に彼は、何も無いはずなのに笑みを浮かべると、

「いやでも、菜々さんの話は参考になるのはもちろんですが、なかなか面白いものでしたよ。特にダンス審査で腰を痛めた話なんて……ぶっ」

笑いを我慢出来なかったのか、彼は口元を手で隠すと即座に顔を逸らした。

思うところは多々あるが、こちらの話がちゃんと頭に入ってるならそれでよしとしよ

う。

……ナナは先輩ですから、それぐらいの余裕は見せませんとね。

未だに肩を震わせている榊に、でも、と菜々は声をかける。

「榊君は本当に、今回駄目だったらおしまいなんですか？」

こちらの疑問に榊は視線を戻した。うっすらと涙が溜まっている瞳は、しかし菜々をしつかりと見ていて、

「さっき言ったばかりじゃないですか。346プロダクションが駄目なら、他を受けるつもりはありませんよ」

そうですけど、と菜々は不満を一切隠そうとしない。

菜々がこの事を知ったのはつい先程、駅に向かっている途中での事だ。レクチャーもほとんど終え、最後の締めとして、もし明日駄目でも、また次がありますから！ とアドバイスをしてあげた。

これは菜々が長い下積み時代で一番大事にしていたものでもある。たかが一度の失敗で全てが決まるのではない。むしろその経験が次へと活き、成功に繋がるのだ。

菜々もたたくさんの失敗を経験してきた。榊が笑ってしまうようなくだららない失敗から、心が折れそうになるほどの大きなものまで。

その一つ一つが踏み台となって、念願のアイドルになれたのだと確信している。

それなのに榊は、こちらの言葉を聞くとなぜか申し訳なそうに笑って、

……今回のオーディションが駄目だったなら、アイドルになるのは諦めますよ、か。

どうしてそんな事を言うのだろうか。アイドルは榊を熱くするものがあると彼自身  
が言つてなのに、それを一度駄目だからと諦めてしまつていいのか。

投げやりに言葉が出そうになるのを菜々はぐつと堪えた。

アイドルを目指すのにどこで線引きするかなんて人それぞれだ。自分のように何回  
何十回先を見てる人もいれば、彼のように一度で区切りをつける人だっている。

諦めるのが早いと根気が足りないとと言われるだろうし、逆に諦めるのが遅いと能天気  
とも言われてしまう。だからどっちが良いかなんて判断つかないものだ。でも、

「榊君はそれでいいんですか？」

せっかかく堪えていた言葉が思わず出てしまった。

すぐさま口元を押さえるが、今となつてはその行為すらわざとらしく思われるかもし  
れない。

余計なお世話だったに違いない。項垂れそうになる菜々に、しかし榊はこちらが思つ  
てるのとは逆に嬉しそう表情を緩めると、

「当たり前じゃないですか。アイドルを目指すかどうかはだいたいぶ悩んでましたけど、ア  
イドルを目指すならこれつきりというのは最初から決めてましたから」

「でも、こう言ったらあれですけど、榊君みたいに養成所とかレッスンを一度もしたことがない子が一回目で受かるなんてほとんどないですよ」

我ながら冷たいことを言ってる自覚はある。だがそれは自覚でもある。

全くの素人がいきなりオーディションに受かるほど甘くないのは、菜々が身をもって味わっている。

世間で聞く新人発掘オーディションだって、芸能人ならまだしもアイドルになると大抵が養成所、もしくはダンスや歌の経験者が上位のほとんどを独占している。

実際に菜々自身もたくさんのオーディションを受けてきたが、榊のような素人がオーディションに合格したのを見たのは一人か二人ほどだ。

だから今回のオーディションは榊がアイドルを目指すきっかけに、そして何より次へのステップアップに繋がればと菜々は考えていたのだ。

それなのに彼は今回きりだと言い張る。絶対無理とは言わない。ただその可能性は限りなくゼロに近い。

こちらの気持ちを知ってか、榊は一度を手を叩いて、「でもですね、シンデレラプロジェクトの中に渋谷さんっていう俺と同じ素人の人がいたんですよ。だから案外大丈夫かもしれないですよ」

それは違う、と菜々は声に出して否定したかった。



菜々もある程度はシンデレラプロジェクトを知っている。知っているからこそ違う  
と言いつけるのだ。

シンデレラプロジェクトは女の子の新人アイドル十四人と、今回のオーディションで  
合格した男の子を合わせた十五人からなる大きなアイドルグループだ。

十四人も新たにアイドルを集めるなら、一人ぐらゐは素人がいてもなんら不思議では  
ない。

だけど男の子の方は違う。プロジェクトには十五人の内の一人でも、男の子はあく  
まで一人なのだ。そうした場合、なんの経験もない子を採用するのかと言われると疑問  
を抱いてしまう。

女の子達の中に男の子が一人だけなら尚更だろう。考えたくはないが、素人だと他の  
子に下に見られて最悪いじめられてしまうかもしれない。

「あのですね菜々さん」

榊はまるで言葉を探るように視線を泳がせる。時折隣で流れるサラリーマンの列も  
見て、

「菜々さんが一回で区切りをつけようとしてる自分を理解出来ないように、俺は何回で  
もチャレンジする菜々さんを理解出来ません。でもそれは、当たり前前の事なのかもしれ  
ません」

だって、と続ける榊の顔を見て、菜々は諦念を抱いた。

……ああ、これは駄目ですね。

自分も頑固には定評があるが、もしかしたら彼はその上をいくかもしれない。いや、ここは意志が強いと言ってあげるべきだろう。

アイドルを目指すならそのぐらいでいいかもしれない。今回きりというならなおさらだ。

眼前で言葉を紡ぐ彼を見て、菜々はしようがないと苦笑を漏らした。

## 十一話 前日に夜更かしはいけません

「ただいまー」

玄関を開けると緊張から解放されたせいかな身体が一気に重くなる。やはり慣れないことが続くと、体に力が入ってしまふのだろう。

それを少しでも吐き出そうと、榊は言葉を可能な限り伸ばした。

「おかえりー、遅かったわね」

リビングから母の声が聞こえ、やっと普段の生活に戻ってきたのだと実感する。住み慣れた家にいると今日の出来事が夢のようにも感じた。だけど帰り道で借りた多数のCDが、それも現実なのだと教えてくれる。

リビング入ると、ちょうど母が晩御飯をテーブルに並べている最中だった。近くのソファに荷物を置くと、キッチンで手を洗いながら、

「うん。寄り道してたら予定より遅くなっちゃった」

「そう。なんだかたたくさん借りてきたみたいだけど……、あら珍しいわね、和巳がアイドルのCDを借りてくるなんて。今までそんな様子なかったのに」

当たり前の反応なのに、榊は心臓が飛び出るような感覚を得た。

「え？ ああ、クラスの間で流行っているみたいだから興味本位でね。それと、明日も出かけるから昼御飯はいらないよ」

「そうなの？ 二日連続で出かけるなんて珍しいわね」

ちよつとね、と言葉を濁す榊の表情は浮かない。

母には明日のオーディションどころか、今日のことすら話していない。

別に話したくないわけではない。母の性格なら、アイドルにも反対するどころか応援してくれる可能性の方が高い。

だからこそ、榊はアイドルのことを母に話そうとしないのだ。その証拠に母は、

「でも良かったわ。中学の時はあまり外に出ようとしなかったから、高校でもそうなのかと心配してたけど、どうやらその必要もないようね」

嬉しそうに話す母に空返事をする。

もし明日が駄目だったたら、次を考えてない自分はきつと以前のような生活に戻るに決まってる。それを今言わないのは、ただ逃げているだけだろうか。

……部活もしないなら、バイトぐらいはしらないとな。

そう考え、榊は残りの食器をテーブルに運んだ。



「さてと、それじゃあやりますか」

自室に戻った榊は伸びをしてからテーブル上のパソコンの電源を入れた。慣れた手つきで音楽プレイヤーを繋ぎ、袋の中からCDを一枚取り出す。

「それにしても、ある程度の枚数は覚悟していたけどまさかこれだけあるとは思わなかったな」

袋の中には三十枚以上のCDが二段になって入っている。

帰りに寄ったレンタル屋では346プロダクションの特別ブースが設けられていた。店員オススメのアイドルが写真付きで紹介されており、その中に楓や藍子の名があるのを見ると関係ないはずなのに胸が熱くなった。

おかげで探す手間は省けた。しかし榊の中ではあっても十枚程度だと思っていたCDが何十枚もあるのは予想外だった。

たまたま返却されたばかりだったかもしれないから幸運だったのかもしれない。だがその時の手持ちの金額的に借りられる枚数には限度があり、結局ユニットなどは除いてソロのCDだけを借りてきた。

それでもこれだけの量となると全部のCDを音楽プレイヤーに入れるだけで相当の時間になる。明日のためにも早く寝たかったが、それは残念ながら諦めないといけないかもしれない。

わざとらしくあくびをする榊は、しかしヘッドホンを通してパソコンから流れる曲に目を見開いた。

「あれ、この曲って……」

聞き覚えのある声に、無造作に取っていたCDのジャケットを確認した。

「やっぱり、これ高垣さんの曲か……」

作業を一旦中止して聞くことに集中する。ベッドに背中を預けて前奏からサビまでを聞いて思うことは一つ。

……上手いなあ……。

榊はどこか心の中でアイドルの歌は歌手と比べると歌唱力も含めて全てが劣っていると考えていた。

アイドルに必要なのはビジュアルや個性で、歌唱力なんて二の次だと思っていた。

だけど楓のそれは違っていった。アイドルをやるならここまでの歌唱力を求められるのだらうか。

曲に耳を傾けながらも、榊はバックから一枚の紙を取り出す。それはオーディションの要項であり、明日会場で行うかが細かく記されている。

その中の一つである“歌唱力テスト”の項目に、榊は顔が歪むを自覚していた。

正直歌に自信はない。というよりは自分の歌唱力がどのくらいのものかがわからない

い。

友達とカラオケなんてここ数年は行ってない。一応音楽の成績は悪くないが、そんなものは参考にもならないだろう。

一度全部を聞き終えてから余韻に浸る気持ちを抑えて榊はマウスに手を伸ばす。

楓の歌がリピート再生される中、榊はインターネットを開いて素早く文字を入力する。

画面には検索結果が表示され、様々な項目の中から一番上をクリックする。

すると今度は画面に西洋のお城が映し出される。そして光のイリュミネーションとともに美城プロダクションの文字が現れた。

榊は美城プロダクションのホームページを開いていた。トップ画面には今月のイベント情報などが日単位で載っている。

しかしそれらには目もくれず、右上にあるタレント紹介の文字をクリック。

俳優や歌手など、複数の事業の中からお目当のアイドル部門をクリックすると、画面にはたくさんさんの名前と宣材写真が載せられていた。

その中の一つである高垣楓の文字を選ぶと、拡大された写真とともに細かいプロフィールが出てくる。

曲が移し終えるまでプロフィールなどを確認し、それが終わったらまた別の人の曲で

同じ事をする。

全部のCDの作業が終わる頃には、時計の短針は真上を指していた。

「ああ……、もうこんな時間か」

まだ調べ物の途中だが、これ以上の夜更かしは明日に響いてしまう。

もう寝よう、そう思い立ち上がると、視界にあるものが入った。

「……菜々さんのCD忘れてた」

パソコンの電源は既に落としてある。それに寝ると決めたからにはもう何もしたくはない。

だから仕方ないのだ、と部屋の明かりを消してベッドに潜る。枕に顔を埋めればすぐに眠れる。そう思っていたが、

「……………」

疲れているはずなのに眠れない。その代わり脳裏を過るのは、嬉しそうにCDを差し出した菜々の笑顔と、

『ナナは、ナナはすごく嬉しいです!』

別に聞かれないと思ってるわけじゃない。明日やそれ以降だって聞くに決まってる。だから気にする必要なんてない。

「……………やろう」



そっちの方が寝つきが良いのかもしれない。

今度はあくびをしてからパソコンの電源を入れる。先程と同じようにCDを入れた後ヘッドホンを耳に当て、うとうとした状態で曲を再生する。

「菜々さんこれは……」

出だしから度肝を抜かれた。

眠気が吹き飛ぶほどにこの曲はすごいと直感した。

楓のように歌唱力に長けてるわけではない。しかし菜々の曲にはそれにも勝るとも劣らないすごさがある。

……自己主張が激しい。

個性は抜群。だがこれを自分が歌えるかと聞かれると答えはノーだ。

ましてや菜々の年齢にもなって歌うなど罰ゲームといっても過言ではない。

アイドルという仕事は本当に大変なんだと実感する。

それでも、聞いてるうちに榊の顔から笑みがこぼれる。

「ミンミンミン、ミンミンミンウーサミン……」

そして自然とフレーズを口ずさんでいることに、榊はさらに笑みをこぼした。

## 十二話 練習はあくまで練習

人は人生の中で、たくさん緊張する場面に遭遇する。

習い事の発表会や部活動での大事な大会。大学受験や仕事のプレゼンテーションなど、人によって様々な場面がある。

榊もその例に漏れず、現在緊張する場面にいる。しかし、その場面は普通の人なら体験出来ないものだと思う。なぜなら、

「それじゃあ皆さん、これからシンデレラプロダクション・男性アイドルオーディションを行います。よろしくお願いします」

武内が挨拶するのに合わせて数人の男の子が挨拶を返す。榊もワントンポ遅れてそれに倣う。そうすることで、本当に自分はアイドルオーディションに来たのだと実感することができた。

昨日下見をした会議室。白と青を基調基調とした広い部屋で、榊を含めた六人の候補者は横一列に並んでいる。

左端に位置する榊は、武内に促されて座る時にそれとなく右側を見た。

自分より背の高い人に低い人、歳が上の人に下の人。色々な人がいるのは当然のこ

と。ただ、その五人に共通して言えることは、

……何で皆さんそんな自信満々なんですかねえ。

不安な顔より自信に溢れている顔の方がいいのは承知の上。ただ実際にやるのは、最低でも紳にとつては難題である。

それを紳以外の全員が問題なく行えている。おそろく皆が養成所でレッスンを受けているだろう。それに加えて自発的に応募しているのだから、自信があるのは当たり前なのかもしれない。

意気消沈となりそうな気持ちをなんとか奮い立たせる。

……大丈夫、俺にだってあの人達よりアドバンテージが取れてるものがある。

そう自分を励ます視線の先、紳達と対面する形で置かれた椅子に腰掛けているのは、今西や武内といったシンデレラプロジェクトの関係者。それに、

「なお今回のオーデイションでは、私達関係者だけでなく、シンデレラプロジェクトの皆さんにも審査員として参加していただきます」

そう話す武内の両隣には七人ずつの計十四人の女の子達が座っている。

その全員を見知っているのはきつと自分だけだろう。そう思うだけで、小さな優越感と確かな自信が持てる。

「ではオーデイションを始める前に、今回のオーデイションの責任者でもある今西部長

からお話があります。——よろしくお願いします」

武内に促されて、今西は重い腰を上げた。

よっこいしょ、と前置きしてから簡単に挨拶を済ませると、目元にシワを寄せた笑みを見せて、

「みんな今日はわざわざ来てくれてありがとう。君達も分かっているだろうけど、今日のオーディションは普通のとはちよつと違う。このアイドル業界には様々なアイドルグループが存在するけど、十五人もいて男の子が一人なのはおそらく美城プロダクションが初めてだろう。それに知つての通り、男性アイドルをデビューさせるのも初めてだ。

だから正直僕は今も悩んでいるよ。美城プロダクションにはどんなアイドルが必要なのか。彼女達にはどんな王子様が必要なのかね」

というわけだから、と今西は改めてこちらを見渡して、

「今日は普通のオーディションのように無理に自分をアピールする必要はない。その代わり君達が僕達に提案してほしい。自分がここでどういった存在になれるのかをね」

今西の言葉は、榎の傾いた気持ちを立て直すのに十分すぎた。

……ああ、そうだよね。無理する必要なんてないんだよね。

無理に自己アピールをしようとしてもどうせボロが出るのは目に見えている。

だったら着飾らない自分を見せた方がきつとよく見えるしその方が楽だ。

目線を泳がせれば昨日話した女の子達がいる。彼女達は昨日自分と話してどう思っただろう。今、他の人達と並んでどう思われているだろうか。

確認する必要はない。ただこのオーディションが終わった後に、少しでも自分がいいと思ってもらえれば幸いだ。

頑張ろう、昨日から何度も繰り返した思いを念頭に置き、榊は前を見据えた。



どうしてこうなってしまったのだろうか、昼食のサンドイッチを口に含みながら榊は長考していた。

時刻は既に十二時を過ぎており、周囲では各候補者達が、女の子と小さな集団をいくつか作って各々の昼食を食べながら談笑している。

榊もその例に漏れず、卯月、凜、未央と昼食を食べている。ただ他のグループと違うのは、

「榊君、その……大丈夫ですか？」

「」

気を利かせて卯月が話を振ってしてくれるが、今の榊に返事をする余裕はない。

……散々だったなあ……。

今思い返してみても、面接は悲惨としか言いようのないものだった。

面接は武内からの質問に順々に答えるというシンプルなもの、質問の内容も決して難しいものではなかった。ただ榊に誤算があるとすれば、

……六番目って、普通に考えると結構不利ですよ。

不利というよりは大変という言葉の方が正しいだろう。六番目となるとあらかじめの回答は出尽くしている。だからこそ、そこでの回答は大きなアピールになることもある。

ただし榊には、そのチャンスを掴むことができなかった。

昨日の面接練習でも、菜々から回答は複数用意しておくのがいいと助言は受けていた。

それでも用意しているのはせいぜい二、三個程度だ。

途中で順番を変えても……、と考えるのはいささか身勝手に違いない。

なぜなら自分の一つ前の人はしっかり答えられているのだ。こういう機転の良さも、きつとアイドルには必要なのだろう。

思わず出そうになるため息をぐつと堪える。

ここには卯月達がいる。彼女達はオーディションの最中もこちらを気にしてフオーローしてくれた。

それなのに目の前でため息をつくのは失礼になるだろう。

「ちよつと、お手洗いに行つてきますね」

その場から逃げるように席を立つ榊に、卯月達はあえて声をかけなかった。



「あれ？ どうしたんですか、こんなところで」

トイレの前に置かれた長椅子にうつむき座る少女に、榊はそつと声をかけた。

「——天界からの使者か」

昨日と変わらない漆黒の衣装に身を包んだ蘭子は、一瞬こちらを見上げると、またすぐに視線を落とした。

……うわあ、無視できないじゃんこれ。

こんな人目のつくところで落ち込んでるのは、もしかしてわざとじゃないだろうか。

仮にそうだとしても、ここで素通りするわけにはいかない。別にトイレは行こうと思つてきたわけではないし、時間潰しにはちよつどいい。だから榊は、蘭子の側まで寄

ると、

「面接で疲れちゃったかい？」

その言葉に蘭子は再度顔を上げる。すると今度は、きちんと視線を交わらせた後に首を横に振った。

「天より墜ちし墮天使は、現世でも異端児ということか」

未だに蘭子が言っていることを全て理解はできないが、彼女が落ち込んでいる理由はわかる。

……面接のことだね。

面接では武内や今西などのスタッフ以外にも、シンデレラプロジェクトのみんなに一人一回質問することができていた。

内容は好きなアイドルやスイーツ、中には猫の種類など様々な質問があった。

だがそのどれもが、答えるには単純なものばかりだった。……蘭子以外は、

『私は漆黒の墮天使、神崎蘭子。私の贖罪に汝達の意を問おう！』

はい、何言ってるかわかりません。

それは当然榊だけでなく、他の候補者全員が言葉を失うほどだ。

誰もが失笑だけで答えられるわけもなく、最後は他のスタッフが先に進めてしまう始末である。



「ごめんね、面接の時上手く答えられなくて」

順番があつたので榊が勝手に話せるわけではなかったが、仮に自分の番だとしても答えられなかつたに違いない。

だから謝罪の言葉を述べる榊に、蘭子は小さく首を振つて、

「いや、全ては私の驕りなり。墮天使は蔑まれるもの。たとえ純白の衣装を身をまとい、天界への昇天を望もうとも、それは不変の真理」

そつか、とそれとなく返事を返すが、やはり蘭子が何を言っているのか理解できない。どうしたものか、と頭を悩ませていると、

「あら榊君、どうしたの？ 二人揃つて困つた顔して」

どこか聞き覚えのある声に視線をやると、榊は自然とその人物の名前を口にしていった。

「高垣さん……」

どうしてここに？ と疑問が浮かぶ榊に、楓は蘭子が座っている長椅子を指差して、隣に座つても、いーすか？」

昨日と変わらぬダジャレに、榊は真顔でどうぞ、と言うのが精一杯だった。

## 十三話 魔王を倒しても平和は訪れないようです

どうしてこうも事態は面倒な方向にしか進まないのか。蘭子の隣に座る楓を見ながら、榊は伏し目がちに思った。

「高垣さんも休憩中ですか？」

「ええ、別の階でレッスン中だったんだけど、誰かさんの様子が気になったので様子を見に来ちゃいました」

楓がジャージ姿なのを見れば、レッスンという言葉は嘘ではないのだろう。

「やつぱり受けにきたんですね」

「やつぱりつて、それどういう意味ですか？」

「深い意味はありませんよ。ただなんとなく、女の勘です」

どうして大人は、こうも勘という単語を使用するのだろうか。

……まあ俺も、なんとなくよく言うけどさ。

それは単に経験が足りないだけだ。それに比べて、今西や楓は自分なんかより何倍も色々経験している。

それを大人とか女の勘で済まされてしまうのはずるいと思う。

ただ、それを口に出すわけにはいかないので、

「流石高垣さんですね」

「ふふ、伊達に榊君より長生きしてませんから。それより——」

一度オーディション会場の方を見てから、またこちらを見て、

「オーディションの方はどうですか？ 順調ですか？」

「さっきの表情から察してくださいよ」

「表情だけじゃ、どれだけよくなかったのかわかりませんよ」

「だいたいわかってるじゃありませんか、と苦笑が溢れる。

だが榊としても、ここで嘘をつく必要はない。

「難しいというのは最初からわかっていました、実際に目の当たりにするとなかなか  
厳しいですね」

「でもオーディションって、大抵自分が駄目だと思ってる時の方が受かってるもの  
から、諦めないでくださいね」

果たしてそうだろうか、と湧いてくる疑問を口にはせず、榊は先ほどと同じ反応を  
した。

「それで、貴方はそんな暗い顔してどうしたのかしら？」

「ふえっ!？」

突然話をふられたことに、蘭子は明らかに動揺を見せた。

……ああ、多分これが普通の反応なんだろうなあ。

高垣楓は誰もが知る有名アイドルだ。それはつまり多くの人達の憧れであり、同じ事務所の後輩ならなおのこと緊張してしまうのだろう。

だがここでふと、榊にはある疑問が浮かんでいた。

……先輩の前だと、どんな風に話すんだろう。

先輩の前であの話し方は失礼にあたるかもしれない。もちろん楓がその程度で怒るとは到底思えないが、それ以前にマナーの問題である。

しかし蘭子はまだ中学生。それに、オーディションでもあの話し方をしたほどの人物だ。

一体どうするのだろうか？ 興味津々で蘭子の様子を見てみると、彼女はおもむろに

高笑いからはじめて、

「彼の者達は我への謁見を求めた。しかし、私の禁呪前になす術もなくひれ伏していったわ……」

段々と言葉に力が入らなくなっていくが、先輩を前にあの話し方が出来る彼女はやはり只者ではない。

……もしかして菜々さんに一番近いのは、前川さんじゃなくてこっちなのかな？

どうでもいいことに思考を巡らせていると、楓がこちらを見ているのに気付く。「榊君、ひれ伏しちやつたんですか？」

そう問われ、しかし事実であることに、榊は気まずそうに頷くしか出来ない。それを見た楓は、そうと頷いた後に、じゃあ、と前置きして、

「榊君は早く、立ち上がらなくちゃいけないですね」

立ち上がる。その言葉を楓は、どういう意図で言ってるのだろうか。

落ち込んでいる自分に対して、立ち上がれと言ってくれてるのか。それとも、蘭子の言葉に対してだろうか。

……両方に決まってるよな。

それぐらいは今の自分でも読み取れる。ただ、それをすぐに実行できるほど器用ではない。だから、

「ええと、神崎さん……」

言葉に、蘭子だけでなく楓までこちらを見てくる。

楓の視線は、こちらへの期待感で溢れている。

そんなに期待しないでほしいと思う。だがそれ以上に、

……なんでそんなに怯えてるのかなあ。

まるで外国人に話しかけられてるかのように身構えている蘭子に、榊はなかなか次の

言葉が出てこない。

別にこちらは変な言葉を言っていないし言うつもりもない。寧ろこっちが理解不能な言葉を言われて困っているぐらいだ。

……ああ、そういうことか。

こちらが相手の言葉を理解していないのだから、こちらからの言葉もある意味理解できないのだ。

だったら普通に話してほしいとは思いますが、蘭子にも色々考えや思いがあるに違いない。

でも、自分はまだそこまで彼女を知らない。

「正直に言うとな、俺は神崎さんが何を言っているのか分からない。多分、それは他の人も一緒だと思う」

「心得ている。禁呪とは触れざれるもの。しかし、我が内なる野望はこの方法でしか、なし得ることは叶わぬ」

「確かに禁呪は簡単に克服できるものじゃないかもね」

相変わらず何を言っているのかわからない。それでも、言葉の意味は汲み取れるようになってきた。……気がする。

だから、と榊はかがんで蘭子と目線を合わせると、

「俺も、禁呪を使いこなせるようにならないといけないね」

「な、それはまことか!? 我が禁呪は想像を絶する苦難が待ち受けているぞ!」

想像を絶する苦痛がどういう意味なのか、それが分からない榊としては苦笑しかできない。

それでもやはり、蘭子の言う禁呪を使えるようにならないといけない。なぜなら、

「でも、そうしないと君の野望。意思疎通はできそうにないからね」

「っ!」

そこまで言うとは、蘭子は急に立ち上がり、脱兎の勢いで会場の方へ戻ってしまった。

間違つた事を言ってしまっただろうか、と不安になるこちらに、楓は小さく笑い声を漏らす。

「見事魔王を倒しましたね」

「いやいや、倒しちや駄目じゃないですか」

「倒しちやつてもいいんですよ。だってそれは、榊君が彼女から逃げずに向き合つた証拠なんです。私には到底できないことです」

「何言ってるんですか。俺にできるなら高垣さんもできるに決まっていますよ」

きつと俺以上に、と付け足すのは仕方ないことだと思ふ。

「こちらの発言をどう捉えたのか、楓は少し困つた表情を見せる。

「榊君は、どんなアイドルになりたいんですか？」

「どんなって、それは……、わかりません」

それは、オーディションが始まる前に今西が全員に言っていたこと。そして面接の時に、武内から全員に問われた言葉である。

榊はその質問に答えることができなかった。答えるのが最後だったからではなく、最初から答えが浮かんでこなかったのだ。

どうしてアイドルになりたいのかは、昨日の体験で見つけることができた。

なら、実際にアイドルになってどこを目指すのか。榊はそのことを全くイメージしていなかった。

自分が憧れるアイドルが目の前にいる楓であることは間違いない。だから、この後の歌唱力審査では彼女のCDを選んでいる。

しかし今になってみると、それでよかったのかと疑問が頭を離れない。

今西はどんな存在になってくれるのかアピールしてほしいと言っていた。武内も共感したからこそ、あの質問をしたに違いない。

それに対して、まだ自分は何も示せていない。他の候補者達の話聞いていたが、どれもが自分には合いそうにないものばかりだ。

「俺って、どんなアイドルになれるんですかね」



「素敵なアイドルになれると思いますよ」

即座に、しかし大雑把な返答がきた。

こちらが求めているものとは明らかに違う答えが返ってきたことに、榊は表情が歪むのを我慢できない。

すると、楓はまた小さく笑った。いつもこちらの心を見透かしてるようなオッドアイをまつすぐこちらに向けくる。

「私は、榊君ができないことができます。でもそれと同じ様に、榊君も、私にはできないことができません」

「それって……」

「色々ですよ。でも、私達アイドルが目指すのは一つです。それは榊君も、きっと気付いてるはずですよね」

気付いている。いや、正確には教えてもらったのだ。

「フアンの人を幸せにすること」

正解、と楓は拍手をする。

「だけど同じ幸せにも、たくさん種類があるんですよ。私<sup>あ</sup>があげられる幸せがあれば、<sup>のこ</sup>蘭子があげられる幸せ。そして、榊君があげられる幸せも」

……俺があげられる幸せ。

それは一体どういうものだろうか。頭に浮かんだ疑問を口に出そうとすると、

「楓ちゃん！ もうとつくに休憩時間過ぎてるのよ」

声のする方、廊下の奥から一人の女性がやってきた。

身長は榊や楓よりもだいぶ低いが、それと反比例するように大きな胸がグラマスな印象を与える。

顔もかなり童顔だが、楓のことをちゃん付けで呼んでるのでそれなりの年齢なのだろうか。

「あら早苗さん、もうそんな時間だったんですか？」

早苗と呼ばれた女性は、腕組みをした後にため息をこぼして、

「全く、なかなか戻ってこないから探してみれば、まさか他の階にいるなんてね。……で、休憩を延長してまでお話してるその子は誰なの？」

「オーデイションを受けに来た榊君です。早苗さんも聞いてますよね。今日男の子のオーデイションがあるって」

そういうば今日だったかしら、と早苗は榊を隅々まで見渡す。

あまりいい気分ではなく、榊が警戒の色を強くすると、早苗は首を捻って、

「アイドルのオーデイションを受けに来たわりには、ルックスはいまひとつね」

「ぐっ……！」

榊が一番気にしていたことを、早苗は直球で投げ込んできた。

昨日も未央に言われていたが、こうも面と向かって言われると、なかなか心に刺さるものがある。

……まあ自覚はしてますけど。

だからと言って、ノーダメージというわけでもないのだ。

「まあでも、楓ちゃんが注目するぐらいなんだから、見所はあるんでしょ」  
もちろん、と頷いた楓はゆっくり立ち上がる。

「それじゃあ榊君、私達は行きますから。オーデイション、頑張り過ぎないでください  
ね」

「え？ 頑張り過ぎないで？」

「ちよつと楓ちゃん、ここは頑張ってじゃないの？」

早苗のもつともな指摘にも、楓は自分の発言を訂正しない。

「それは既に昨日言ってますので。それに、榊君はもう十分に頑張ってるのに、これ以上頑張れっていうのは酷じゃないですか」

「俺って頑張ってるんですか？」

まだまだ足りないと思うのが自己評価だ。

……頑張りが足りないから、ここまで悲惨なことになっているのに。

「今頑張らなくちゃ、オーディションに受かるわけじゃないじゃないですかー！」

言葉が強くなり、怒鳴るような口調になる。すぐに我に返るが、榊はうつむいて楓の顔を見ることが出来ない。

昨日も藍子に反発する場面があったが、あの時とは状況がまるで違う。

……自分に余裕がないから。

その事実には、榊は目頭が熱くなるのを我慢できなかつた。

「頑張るのは、今じゃありませんよ」

まるで糸に引つ張られるように、無意識に榊の顔は上がっていた。

そこには当然楓がいる。困り顔の早苗とは対照的に、楓は笑みを浮かべている。

「菜々ちゃんから聞きましたけど、榊君は今日のオーディションに向けて、色々頑張ってたみたいですね」

「菜々さんとお知り合いなんですか？」

時々飲みに行きますので、と答える楓は、それで、と話を戻して、

「そこまで頑張ったなら、今は頑張らなくてもいいんですよ」

だって、

「オーディションの審査員もそうですが、ファンの皆さんも、私達の頑張ってる姿を見た  
いわけじゃないので」

「頑張ってる姿を見たいわけじゃない……」

「もちろん、実力は日々の積み重ねで成り立つものですから、普段の練習は頑張らなくちゃいけません。でも、本番で頑張りすぎても、実力以上のものは出ないと思うんです。

なら、こちらでも楽しんで、みんなと共有したいじゃないですか。楽しい時間を」

「そりゃ楽しむならそれがベストですよ。でも……」

「でも、今回のオーディションが最後なんですよ？」

……菜々さんそこまで話してたんだ。

別に秘密にしてほしいと頼んでいたわけではないので気にはしない。

ただ、できることなら言わないでほしかったのも事実である。

そうですね、と、歯切れの悪い言葉が並ぶ榊に、背後で早苗が仏頂面をしてるのも気にせず楓は一層笑みを濃くした。

「どうせこれが最後なら、せめて榊君自身も楽しんでください。オーディションは、本番でステージに立つ榊君をイメージしています。だから、頑張り過ぎて辛い貴方より、笑顔で楽しそうな貴方を見たいはずですよ」

……笑顔で楽しそう……。

それは昨日、榊がアイドル達を見ていて思ったことであり、何よりアイドルになると決断した要因の一つでもある。

自分も シンデレラ<sup>彼</sup>プロジェクト<sup>達</sup>のようになりたいと、そう思ったからこそ自分は今ここにいるのだ。

それが蓋を開けてみればこの様である。

情けない、と頭に言葉が浮かぶ。

「今からでも間に合うでしょうか？」

もちろん、と返すに楓に、榊も同じように笑みを見せる。

「オーデイション合格まで、もう 数マイルですから」

「ドヤ顔で言われても、反応に困るんですが」

榊君は意地悪です、と頬を膨らませる楓だったが、最終的には早苗に腕を引っ張られる形でトレーニングへと戻っていった。

……高垣さんって精神年齢低めだなあ。

一人残された榊は時計に目をやる。

時刻は間もなく一時になる。そろそろ会場に戻らなくてはいけない。

まだ心にはたくさん不安が残っている。

ただそれ以上に、今はオーデイションを楽しんでみたいという好奇心が優っている。

そのためにはやるべき事がある。

榊は速くなる鼓動にせかされるように、足早に会場へと向かった。



## 十四話 一押しだから

「ふう……、ナナの腰もそろそろ限界ですかねえ」

太陽が真上から傾き始め、子供達がおやつだと騒ぎ出す頃。菜々はメイド姿のまま、カフエの控室でそう呟いた。

ソファにだらしなく座る姿はアイドルとしてよろしくない格好であるのを自覚しながらも、誰もそれを咎める者がいないのでそのままだ。

昼のピークが過ぎ、午後のティータイムを過ぎしに疎らに客が出入りするのを見ると、体に疲れが押し寄せてくる。

朝からのトレーニングを終えた彼女は、疲れで悲鳴を上げそうになる体に鞭打つてこの場にいる。

本来なら午後は体を休めるべきなのだろうが、これはアイドルになる前から続けていることであり、こうしてメイドとして客と接するのは精神的にリフレッシュできる。

紙コップにお茶を注いで一口飲むと、思考が仕事から別のものに変わる。

……榊君上手くやれてますかね。

そろそろ彼のオーデイションが終わってる頃だろうか。



どうなったのか気になるどころだが、昨日連絡先を交換するのを忘れていたせいで確認のしようがない。

昼頃楓から彼についてのメールがきたが、

「榊君が魔王を倒したつてどういう意味ですかね」

疑問を口に出したところで答えが返ってくるはずがない。

メールを送ってきた楓もトレーニング中の為か、それからメールが送られてくることはなかった。

今夜も飲み会ですかね、と考えていると、

「安部ー、ちよつといいか?」

声と同時に扉が開き、隙間から店長が顔をのぞかせた。

まだ休憩時間のはずだがどうしたのだろうか。

稀にこの時間でも客入りが多くなることがある。だからそのせいだろうと菜々は振り返る。

「どうかしましたか?」

「昨日来てた男の子が来てるけど、何か話すことでもあるのかなと思ってな」

「え! 榊君が来てるんですか?!?」

「ああ、アイスコーヒーを頼んでたが持って行くか?」

「行きます行きます！ ナナにお任せくださいー！」

そう返すと、菜々は脱兎の勢いで休憩室から掛け出た。

すれ違いざまに店長が何かを言っていたが、そんなものは耳に入らない。

カウンターで手早くアイスコーヒーを用意すると、コップをトレイに乗せていざ彼の元へ。

「榊君ー！ わざわざ来てくれたんで……」

コップをテーブルに置こうとした菜々の手が止まってしまった。

席を間違えたわけではない。確かに菜々の目の前には榊がいる。

昨日と同じ席にいるが、昨日とは明らかに違い、

……完全にノックダウンしてますね。

顔をテーブルにべったりと付け、両腕は力なく垂れている。

……ナナも他人として見ると、こうだったんでしようか。

菜々自身アイドルになる前は、オーディションに落ちると彼のように脱力してることが多かった。

場所は職場の時もあれば、近くのファミレスだった時もある。

あの時は現実に向き合う事で精一杯だったが、今こうして見るとかなり周りに不幸を撒き散らしていたのだと感じる。

「さ、榊君ー？」

止まっていたコップをテーブルに置いてから呼びかけると、榊は寝起きのようによくりと体を上げた。

そしてこちらの顔を確認すると、

「あ、菜々さん。こんには……」

これまたゆっくりお辞儀をすると、その顔が上がつてくることはなかった。

……ちゃんと返事をしてくれるだけ、まだまともですかねえ。

当時の自分には返事する余力もなかったはずだ。

「ど、どうでしたかオーデイションは？」

わざわざ聞くべきではない話題しか触れないことに、まだ自分は彼のことを知らないのだと実感する。

榊はすぐに答えなかった。菜々もその事を急かしはしない。

やがて彼が顔だけをこちらに向けた。そして絞り出すように出る言葉は、  
「疲れました。凄く、疲れました」

二度も強調して出る感想に、菜々はくすりと笑いが漏れるのを抑えられなかった。

自分も初めての時はオーデイションの出来を考えるよりも疲労感が優っていたと思う。

だから榊の言う感想は決しておかしいものではない。それでもこうして笑みが出てしまうのは、

……ナナも随分、余裕が持てるようになりましたね。

天狗になっていているわけではない。自分はアイドルとしてまだまだという自覚もある。ただ、

「そうですか。榊君も頑張りましたね」

榊の努力に対して、菜々は頭を撫でて労っていることに、小さいながらも優越感を持つているのも事実だった。

「自分は子供なんで強く言えないですけど、そんな露骨に子供扱いされるのは好きじゃありません」

即座に不満を漏らす榊だが、こちらの手を払い除ける様子もない。

疲れてるせいもあるでしょうが、やっぱり榊君は優しいですね、と菜々は頭から手を離して思う。

「菜々さんは——」

今度は榊の方から口を開いた。

アイスコーヒーを手元に寄せて、ストローで意味もなく中身をかき混ぜながら、

「菜々さんは、何回もあんなのを受けてきたんですね」

あんなのとは、きつとオーディションのことだろう。

菜々は榊の正面にある椅子に腰かける。

どう答えようか。頭では思考を続けながらも、まずは事実として返す言葉がある。

「はい、菜々はたくさん受けましたよ」

「たくさん受けて、やっとアイドルになれたんですよね」

「ええ。何度も落ちて、ナナはやっとアイドルになれました」

相手の言葉を少しだけ訂正すると、榊は申し訳なさそうに顔を歪めた。

……事実なんですから、一々気にしなくてもいいんですけどね。まあそこが、榊君の良いところですけど。

「榊君はどうなんですか？ もし今回が駄目だったら、次は考えてますか？」

それは既に昨日聞いている問いかけだ。

だがそれはまだオーディションを受ける前の事。彼がアイドルの仕事を見学した後ではオーディションに対する熱意が変わったように、今回も何らかの変化があるかもしれない。

そう期待しての言葉だったが、菜々の気持ちを裏切るように、榊は首を振った。

「むう。榊君も強情ですね」

「強情ってわけじゃないですよ。今回のオーディション、上手く出来たことより出来な

かったことの方が圧倒的に多くて、今度は上手く出来るようにもう一回チャレンジしたいって気持ちも確かにあるんです。

ただそれ以上に、今は達成感に溢れているんです」

「上手く出来なかったのにですか？」

「やっぱり変ですよ。でも俺は、今回のオーディションを通して自分がどんなアイドルになりたいのか、それがしっかり見えた気がしたんです。そしてそれを見せたいい人にアピール出来た。それだけでなんだか、満足しちゃってるんですよ。まあ、それで満足しちゃうあたり、俺はアイドルに執着してないんでしゃうね」

そう言つて笑つてみせる榊に嘘をついてる様子はない。やはり彼の気持ちが揺らぐことはない。

これ以上この話題に進展はないだろう。そう思った菜々は自分から話題を変えた。

「それで、結果はいつ発表されるんですか？」

「今審査員達が話し合つていて、明日には連絡があるそうです」

「そうですか。受かつてるといいですね」

「理想を言うならそうですけど、現実はそのままで甘くないですからね」

……こういう時ぐらひは素直に受けたいと言つてもいいのに。

声には出さない本音を浮かべると、彼は残ったアイスコーヒーを一気に胃に流し込む

と、そのまま勢いで立ち上がった。

「それじゃあ、俺はそろそろ失礼します」

「もう帰るんですか？　まだ来たばかりなんですから、もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「昨日に続いて菜々さんの仕事の邪魔したら悪いですから。それに、なんだか今は早く帰りたいたい気分で……」

彼の浮かぬ表情から、やっぱりオーデイションは上手くいかなかったのだと感じ取れる。

口では満足していると言っていた。その言葉に偽りはないと思う。

だがそれと同じ、もしくはそれ以上に、彼には思うところがあるのかもしれない。

……不謹慎ですけど、ちょっと嬉しいですね。

昨日はなんとなくで行動していたのに、今では自主的に行動し、そして結果に悔しきを感じてくれている。

自分が何かをしたとは思わない。それでも、自分が好きだと思うことにこれだけ真剣になつてくれたのは嬉しい限りだ。

意気消沈気味の榊に、菜々はできる限りの笑みで言った。

「きつと大丈夫ですよ。なんとって榊君は、菜々の一押しなんですから」

◆ 「おや、榊君はここに来てなかったのかい？」

帰宅の途につく榊を見送った後、テーブルを片付けていた菜々に話しかける人物がいた。

顔を向ければ、それは菜々々の見知った人だった。

「あ、部長さん。榊君ならさつきまでいましたけれど、少し前に帰りましたよ」

そう返され、今西は行き違いか、と頭を掻いた。

「榊君に用があつたんですか？」

「ん？ いや、もしいたなら労いの言葉でもかけようかと思つただけど、いないならその方が好都合だ」

よかつたらどうぞ、と席を促す菜々に今西は素直に甘えた。

よっこいしょ、と年相応の言葉を漏らした今西に菜々は、

「榊君がいけない方が好都合つてどういうことですか？」

「実は菜々君にお礼が言いたくてね。君のおかげで、榊君が一段と面白くなつたよ。ありがとう」

「ありがとうつて言われましても、ナナには身に覚えがないのですが」



お辞儀付きで言われた感謝の言葉に、菜々は即座にそう返した。自分が特別何かをしたという記憶がない。

面接シートの書き方や菜々自身の面接体験を話したりはしたが、それは他の人でもやれることだ。

ましてや今西は、菜々のおかげで榊が面白くなったと言っている。

果たしてそれだけのことをしていただろうか。

答えの見えない疑問に頭を悩ませていると、今西は大きく笑って、

「別に菜々君が何かしたわけじゃないよ。強いて言うなら、君がアイドルでいてくれたことだよ」

「ナナがアイドルなのですか?」

「そう。今日のオーディションには歌唱力審査もあつただけど、その内容は知ってるかい?」

オーディションの大まかなことは榊から聞いてるので、その中に歌唱力審査があるのは知っている。

ただその一つ一つの内容まで聞いていない菜々は正直に首を振った。

すると今西は、それじゃあ、と前置きして、

「先ず歌唱力審査で歌う曲は346プロダクション所属のアイドルの曲であること。そ

れと、歌う曲はオーディション前に申告しておくこと。この二つが条件としてある。ちなみに榊君は高垣君の曲を選んでいたよ。

「だけど審査が始まる直前に、彼は曲を変えたいと言ってきた。誰の曲か分かるかい？」

話の流れでその答えは容易に想像できる。だが同時進行でありえないとも思った。

期待とも不安とも言える菜々の答えを、今西はためらわずに続けた。

「菜々君の曲だったよ」

「そ、それ本当ですか？」

「僕も含めて、審査員は同じ反応だったよ。もちろん君の歌は良いものだけど、あの場で歌うにはなかなか度胸がいるものだからね」

度胸がいるなんてものじゃない。

あの曲は菜々にとって大切な曲であることに間違いない。

だからと言つてわざわざオーディションで、しかも榊のような年頃の男の子がなぜ歌うのか。歌い手である菜々自身が理解不能だ。

……素直に楓さんのを歌えばいいのに。

楓の曲は歌唱力がものを言う難しい歌だ。そのかわり比較的シンプルな為審査しやすい歌だと思う。

それと比較して自分のはどうだろうか。

榊ぐらいの年の子が歌うのは、せいぜいカラオケで友達と和気あいあいと歌う程度のもので、とても歌唱力を審査するのに適しているとは思えない。

彼は今回のオーディションに満足していると言っていた。達成感すらあるとも言っていた。

自分の曲を、それも年の近い他人の前で歌うのは恥ずかしくないのだろうか。

なぜ彼は、

「わざわざ変えてまで、ナナの曲を選んだんでしょう？」

「知りたいかい？」

「部長さんは知ってるんですか？」

「そりゃあ急な変更だからね。こちらとしては、理由を聞かないと許可できないよ」

「それで、榊君は何と言ってたんですか？」

尋ねる先、今西はどこか得意げに話し始める。

「彼は言っていたよ。楓の曲が自分の憧れであるのは間違いないし、こうなれたら最

高だと思っている。だけどそれはただの理想であって、自分にできることじゃない、とね」

その気持ちは菜々にも理解できた。

楓はアイドルにも関わらず男女両方のファンが多い。

幅広い人にファンになってもらえる。それはアイドルにとって光栄なことであり、当然菜々もそこを目指している。

だが楓と同じことをしようとしても駄目だ。

自分には楓のようなスタイルや歌唱力がないのは自覚している。それなのに楓に真似ようとしても、せいぜい二番煎じがいいところだ。

憧れを持つのはモチベーションに繋がるので良いことだと思う。

ただ注意しなくてはいけないのは、憧れと目標を同じにしないことだ。憧れというのは大抵自分にはないものに抱く感情だ。あまりにかけ離れている人を目標にすると、なかなかそこに近づくことが出来ず、やがてレッスンなどにも嫌気がさしてしまう。

そして最終的にはアイドルを辞めてしまった人がいることを菜々は知っていた。

でも、と思考の途中で生まれた疑問を口にする。

「だとしたら、榊君にとって菜々は何なんでしょうか?」

「それは僕も思ったことだよ。だから尋ねた。じゃあ、菜々の曲は、君にとって何なのかな? って」

「そしたら榊君は何て?」

唾を飲み込む音が聞こえそうなほど神妙な面持ちで問いかける菜々に今西は彼の言葉のまま伝える。

「自分はさつきまで、貴方が最初に言ったように自分に何が出来るかを考えていました。でも私は、今何が出来るかを示せるほど自分や シンデレラ<sup>女</sup>プロジェクトの<sup>達</sup>ことを理解してません。

だけどこんな私でも、どんなアイドルになりたいかは示すことが出来ます」

「榊君は、ナナのようなアイドルになりたいってことですか？ こういうのもあれですけど、菜々はアイドルとしてかなり異質ですよ」

まるで榊本人に話しかけてる気分になる。

今西もそれを感じ取ってくれてるのか、もちろん、と言葉を繋いで、

「彼が菜々君のような衣装や歌を歌いたいわけじゃない」

ただ、

「菜々君のように、見ただけで分かるぐらい心からアイドルを好きになりたい。そして何より、アイドルである自分に誇りを持って楽しみたいそうだよ」

今西の言葉を最後まで聞くと、菜々は身体の奥から熱くなるのを抑えることが出来なかった。

事実から言うと、その理由なら榊は曲を変える必要はなかったと思う。

楓だって、自分と同じようにアイドルが大好きで、その事に誇りを持っている。

そもそもこれは歌唱力審査なのだ。榊の言いたいことは本来面接で言うべきことだ。建前上ではいくらでも言葉が出てくる。だが、菜々の本心としては、

……嬉しいに決まってるじゃないですか！

「それで、榊君は受かりますか？」

「僕の口からは言えないよ。それに僕個人が良いと思っても、みんなの意見を擦り合わせなくちゃいけないからね」

そうですね、と肩を落とす菜々に、今西は大丈夫だよ、と笑ってみせる。

よっこいしょ、と座った時と同じ言葉を漏らして立ち上がった今西は、菜々から見ても分かるくらい自信満々の笑みで言った。

「なんとたって彼は、僕の一押しだからね」

## 十五話 変化は突然に

「うーん……、すっかり寝たはずなのに、疲れが全然取れてないな」

経験したことのない倦怠感に、榊は学校の階段を上りながら肩を揉んで対処していた。

昨日は菜々と別れた後、鉛のように重い身体をなんとか家まで動かすと、母の言葉に返す余裕もなくベツトに倒れ込んでいた。

そして身体を動かすことも、思考を巡らす暇もなく眠りに落ちてしまった。

晩御飯を無駄にしてしまったことを母は怒っていたが、そんなになるまで元気があるのは良いことだと満足もしていた。

……まあそれも、今回が最後だろうしね。

昨日のあれで合格する可能性があると思うほど自惚れてはいない。

後悔はしてない。いきなりオーディションを受けることになった割には頑張った方だと思っている。

ただ、心残りがあるのも事実だ。

……まあ、今更気にしても仕方ないことか。

過ぎたことを気にしても意味がない。一瞬だけ非日常を味わえたが、これからはまた退屈で、寂しい学生生活がまっているのだ。

……そういえば、仮入部の届け出してなかったな。

そんなことを思つて教室の扉を開けると、

「……………」

教室にいる全生徒の視線が榊に集中した。

あまりにも唐突な反応に、思わず榊は後退りしてしまう。

これまで何人かの生徒に誰だ？ と顔を向けられたことはあるが、それが榊だと分かるはずに戻していたはずだ。

それが今回は全員が、それも榊だと分かっても誰も視線を外さないでいる。

一体何があつたんだ？ と身構える榊に一人の女子生徒が近づいてくると、

「ねえねえ、榊君つて名前は和巳で合ってるよね？」

これまた唐突な質問が飛んできた。

どうして今そんなことを確認するのか。疑問を抱きはしたが、秘密にしておくことでもないのだから一度だけ聞いた。

すると目の前の女子生徒は、より一層興奮した様子で榊に詰め寄り、

「もしかして、もしかしてだけど！ 榊君土曜日のゆるふわタイムに出てた!？」



「え、なんでそれを……?」

その発言は先の質問を肯定しているものであり、その言葉を聞いた教室内の生徒は盛り上がりを見せた。

「本当にオーディションを受けたの? アイドルのオーディションってどんな感じなの!?!」

「なあなあ、十時愛梨と高森藍子どっちが可愛かった!?!」

男女問わず生徒が各々に質問を飛ばしてくる中、榊は自分が踏み入れた世界がいかに非現実だったのかを思い知っている。

……これはこれで、また面倒な事だな……。

そう思いながらも、これが最後の非現実だ。

榊は苦笑いを浮かべながらも、時間の許す限り生徒からの質問に答えていった。

◆ 「……榊君、どうかしましたか?」

車の後部座席で卯月に問われ、榊はふと我に帰る。

「いや、分かっていた事です、やつぱりこの世界アイドルは凄いなああって改めて思っただけです」

時間はすでに放課後を過ぎており、榊は卯月と一緒に、武内の運転する車で美城プロ

ダクシオンに向かっている最中だった。

「私が教室に行った時も、榊君の周りはお祭り騒ぎでしたもんね」

生徒からの質問に答える予定だった榊だったが、次から次へと溢れてくる質問は朝だけで無くなるわけもなく、それどころか昼休みだけでなく放課後になっても質問攻めが終わる様子はなかったほどだ。

結局卯月が榊を車まで引つ張ってくれた事でひとまずの終わりを迎えたが、

「自分の振る舞いが原因なのは理解してますが、休みが明けてあんなにも態度が変わると複雑なのが本音ですよ」

どうせ落ちてるのに、と小声で漏らすと、隣の卯月は大袈裟なりアクションをこちらに見せて、

「え？ そんな事ありませんよ。私は榊君がアイドルになってくれたら嬉しいですよ。ね、プロデューサーさん？」

「私は立場上あまり言えませんが、榊さんがそこまで悲観するものではないと思いますよ」

そうですか？ と返す言葉にあまり感情はこもっていない。

乗り気ではない榊の心情とは裏腹に、車は目的地である美城プロダクシオンに到着した。

建物の入り口で二人を下ろすと、武内は先に事務所に向かってくてください、と言い残して車を駐車上へと走らせていった。

「島村先輩も、クラスだとあんな感じですか？」

道中でこんな疑問を投げかける榊に、卯月は照れ笑いを浮かべた。

「私の場合、以前から養成所に通っていたのは知ってましたから。シンデレラプロジェクトの参加が決まった時は友達とかは喜んでくれましたけど、

榊君程ではなかったですよ」

「まあ部活やってる人がプロに行くのと、素人がいきなりプロになるのではインパクトが違いますもんね」

「それに、アイドルって男性よりも女性の方が圧倒的に多いですから。珍しいって意味もあると思いますよ」

まるで客寄せパンダの気分です、と答える榊の言葉に力はない。

「でもわざわざ結果を直接言われるなんて思いませんでしたよ。てつきり電話やメールだと思っていたので」

「今回は特別だそうです。どの子も素晴らしかったら直接言いたいって部長さんが言うてました」

それはきつと自分の為だと思うのは自惚れだろうか。そんな疑問を決して口には出

さず、  
榊はただ卯月との会話を楽しんだ。